Character Voice

野沢雅子　金丸淳一
大谷育江　玉川紗己子

声優倶楽部　編

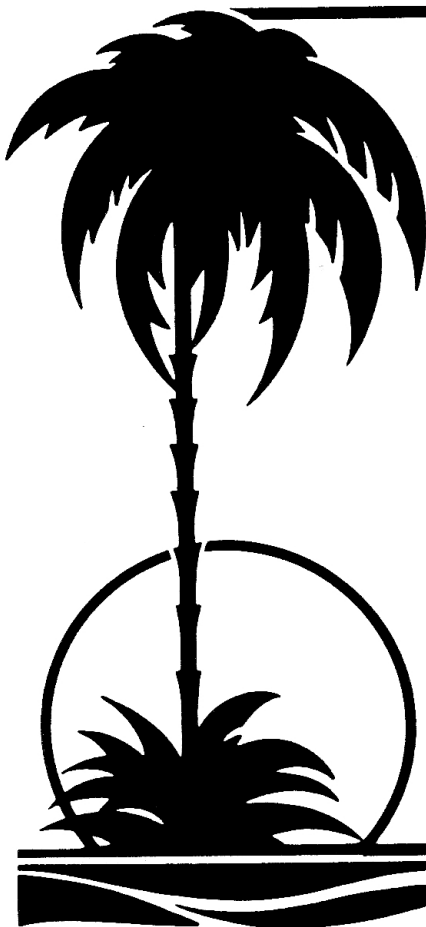
Character Voice 2

CONTENTS

声優インタビュー ―――――――――――― 3

野沢　雅子 ・・・ 4
大谷　育江 ・・・20
金丸　淳一 ・・・28
玉川　紗己子 ・・・38

声優大事典 ―――――――――――― 49

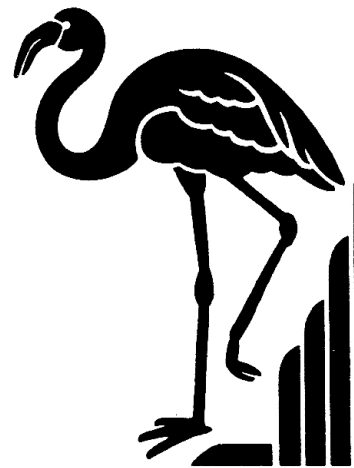
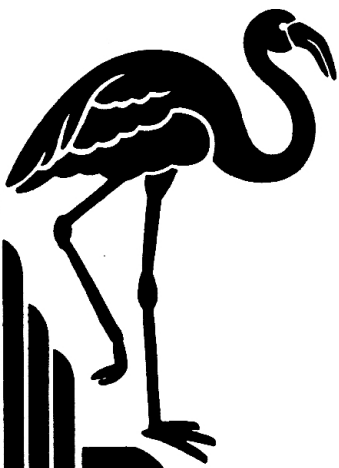
声優小事典　ギャグ版　知ったかぶり野郎編 ・・・70
コ　ラ　ム　世紀の天才！　林原めぐみの『七色の声』！ ・・・18
声優がいっぱい　その1　CITY　HUNTER ・・・27
声優がいっぱい　その2　銀河英雄伝説 ・・・37
元祖『オールマイティ声優』松島みのり　の魅力 ・・・68

まず初めに、本書をお買い上げくださいました皆様にお詫びしなければなりません。前号が発行されてから、なんと5年の歳月が経ってしまいました。ひとえに編集長の私の怠慢がすべての原因です。大変長らくお待たせしましたことを深く反省しています。苦情その他は、おくづけの宛て先まで遠慮なくお送り下さい。ところで、前号の前書きの内容を覚えている人はいますか。当時は声優さんのラジオ番組なんて皆無に等しかったのに、いまのこの状況をみると、本当に一体なんなんだって感じですよね。週３０本以上放送されてるなんてホント信じられない。それと、声優関係の本のなんと多いこと。これだけ立て続けに出されると、我々声優ファンとしてはちょっと食傷ぎみです。まあ、こんなご時勢だけど、我々としては商業誌とは一味違った本を作ったつもりですので、楽しんでもらえたら幸いです。インタビューに応じて下さった、野沢雅子さん、玉川紗己子さん、大谷育江さん、金丸淳一さん、そしてvol.1から待っていて下さった辛抱強いファンの方にこの本を捧げます。

声優インタビュー

野沢雅子

大谷育江

金丸淳一

玉川 紗己子

［経歴］

役者になる前の経歴をお聞かせ願いたいのですが。

野沢　私は役者になる前の学生生活ってないんですよ。この世界に三歳からいるんで。おばが松竹の一大スターだったんですよ。私はそう聞かされてましてね、自分の後を継がせたかったんでしょうね、映画女優にしたかったんでしょうけど、私はもうその頃は魅力を感じていなくて、舞台の方が好きだったんですよ。物心ついた頃はね、好きも嫌いもないんですよ。芸や舞踊は好きだったんですよね。両親が歌舞伎やお芝居が好きだったものですからね。よく連れて行ってもらって。でも、そういう小さい時分って、なりたいものなんてないでしょ。仕事を持ってこられると、だまされだまされしながらやってたんだと思いますね。

小学生、中学生の頃は、学校は。

野沢　父がわりとうるさい人でね、両立はしてたんですよ。学生の間は、夏休みとか学校の勉強に差し支えない程度にやっていました。

大学の方は演劇関係に？

野沢　演劇の方に行こうと思ったんですね。

声優インタビュー

親としては、私は一人っ子なもんですから、本当は花嫁修業みたいな感じで家政科のようなところへ行かせたかったんでしょうね。でも自分の目的で行くのならともかく、私はそういうのあんまり好かないんですよ、学校にそうやって行くのはね。

声優というものを作ったという自覚みたいなものは。

野沢　そういう自覚はないんですよね。私、劇団にいましたでしょ。劇団ってのは、みなさんご存じのように、小さい劇団では芝居だけじゃ食べていけないんですよね。現状ではね。自分たちで持ち出しでしょ。収入源ってのはマスコミに求めるんですよ。顔出しの頃からテレビもやってましたし。最初は顔出しってのをやってたんですけどね、生本番の。そのうちに、あるとき、日本に初めて洋画ってのが来たわけですよ。西部劇だったと思うんですけど、声優さん志望じゃないから、そんなに執着心もないし、魅力もそんなにないわけですよね。ないと言ったら怒られますけど、舞台の方が好きだから。仕事の一つとして来てるわけでしょ。そのときにオーディションがあったんですよ。各劇団、プロダクションから来たんでしょうね。たまたま私受かったんですよ。で、生本番で、その頃生本番だと、やっぱり少年役は皆さんくらいの人を使うのが一番安心よね。間違ったら間違ったまま全国に放送されちゃうから。だけど、変声期がすぐ来るでしょ。かと言って子供使ったら危険でしょ。ちょっと突々と読まれちゃったら洋画なんてどんどん進んでいっちゃいますからね。だからね、私、最初に考えた人が偉いなあと思うのは、声帯的には大人の女性が近いんじゃないかということで、私たち女性に白羽の矢が立ったんじゃないかって私は思ってるんですよ。で、オーディションに受かって、演って。洋画は字幕スーパーだから大変ですよね、読むのが。お年寄りなんか半分も読めないうちに画面が変わったりしますでしょ。それが日本語でってのは楽ですよね。日本語はわかるんだから。反響が大きかったらしいんですよね。それで順々に取り入れられるようになって。そうすると、使う方は一度やった人の方が安心感があるでしょ。だから私は年中使われるようになりましてね。

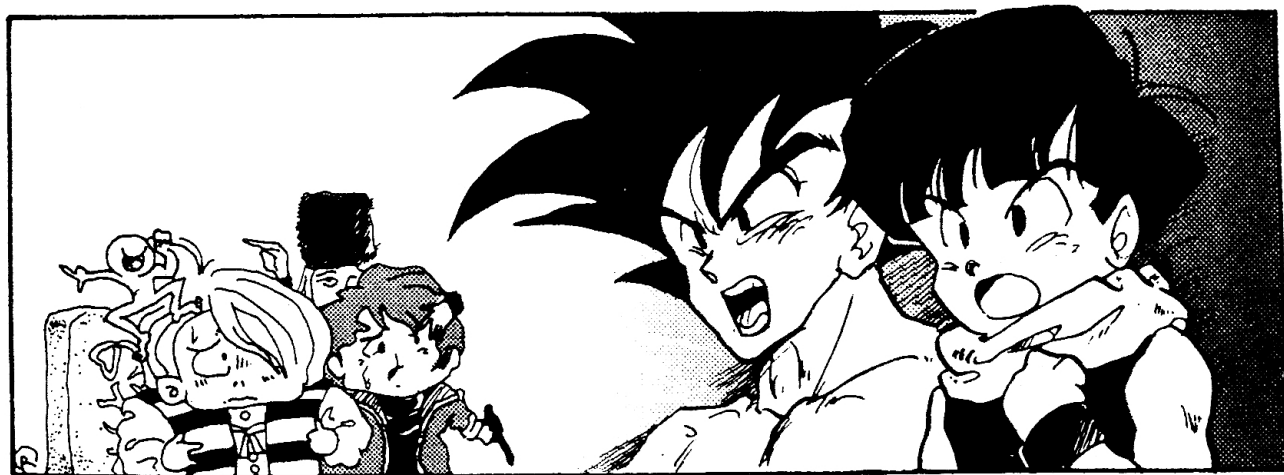
私もその頃は十代ですよね。増えちゃったら、顔出しってのは、時間をくって一週間くらい取られちゃうわけ。すると、悲しいかな、私は顔出しは主役じゃないんですよ。脇役で来ているから、主役のスケジュールには合わせるけど、脇役のスケジュールなんか合わせてもらいないわよね。そうすると、よく降ろされてるのよね。話はあるんだけど、「どこどこは埋まってます」って言うと「じゃ、またの機会にお願いします、すみません」って。劇団としては、それが収入源でもあるから、遊ばしておくのはもったいないわけですよ。すると、穴を何で埋めるかって言ったら声の仕事だったら埋められるわけですよ。時間取らないで一日で済みますから。多くても二日だから。で、リハーサルはどこかでやってもらえれ

ばいいから。一日で済むってことから結局、めいっぱい声の仕事で埋まっちゃったもんで、自然と私は声優さんになっちゃったと思うんです。だから本当の初期からやってます。

顔出しの仕事が減ってしまってアフレコ主体になったことに不満などはあったのですか。

野沢　それはなかったですね。やっぱりやってみると楽しいしね。役者さんの芝居の間ってのもわかってくるし。うまい役者さんに当たるとね、すごく自分の勉強にもなりますね。同じ芝居する人もいるんですよ。間も。そんな人は演りやすいですね。呼吸も何も一致するからいいんですよ。自分でスーッと入っていって、役になり切っているわけでしょ。逆に間が合わないときもあるんですけど、やっぱり短い時間の間にそこまで持っていかなきゃならないからね、自分をね。

アニメーションも初期からやってらしたわけですが、洋画と違った苦労というのはありましたか。

野沢　そのときは苦労と思ってたのかなあ。役者ってね、全員とは言えないですけど、私個人としてはそのときすごい苦労してるのかもしれないんだけど、それが出来上がったときには苦労を忘れるほど喜びの方が大きいわけですよ、役者は。だからあまり苦労ってのはわからないんですよね。

違いって言ったら、洋画は私の好き勝手には出来ないんですよね。あちらの役者さんが芝居してるから。あちらに近づけた芝居をして、なおかつ自分を入れないと、誰が演ってるのかわからないからね。自分も入れて演じるわけですよ。ところがアニメーションは無から有ですよね。一から全部自分で作れるわけですよ。生かすも殺すも役者次第で、私次第。そういう点が楽しいですね。命を入れるわけだから。

舞台とアフレコの違いというのは。

野沢　舞台は肌で感じますでしょ、お客さんを。出てる間は一人ひとりの奥につながっているような。ビンビン入ってくるわけでしょ。画面を通しちゃうと何か一つクッションを置いて入ってくるような感じがします。

アニメーションと舞台とは続けて…。

野沢　はい、ずっとやってました。もう劇団やめちゃっているんで今はやってないんですけどね。プロデュース公演はやりますよね、お話しがあれば。後は、今やるんな

ら、生意気かもしれないけれど、自分でね、劇団じゃないから。劇団時代は、うーん、この役はどうかなって思ってもやらなきゃならないことがありますよね。でも今は自由でしょ。だから、ちょっと読んでみて、ある程度選ばせてもらってる部分もあるんです。

〔役どころ〕

野沢　永久少年でいたいですよね。大人の役がないかって言ったら、そんなことはないですしね。アニメーションの吹き替えの最初の頃は、大人の女性が多かったんですよね。今みたいにやる人がこんなに多くなかったからね。私声がきたないから、段々それで少年役の方が圧倒的に多くなってレギュラーで埋まっちゃうとね、なかなか出来ないんですよね。

周りの見る目もやはり野沢さんっていったら少年役っていう。

野沢　そうなっているでしょうね。（洋画の吹き替えで大人の役をやったという話になる。）あ、本当？　嬉しいな。私、わりあい、洋画は大人の役が多いんですよね。自分では印象に残っているのは、何でもいいんですけど、いただいたのは自分でそれなりに気持ちを込めてやりますから、愛着があるし。けど、『普通の人々』っていう、平凡な、決して派手な作品じゃないんだけどね。好きなんですよ、そういうの。

アニメでも私、美女の役ってないんですよ。個性的な女性、好きなんですけどね、そういう方がね、でも、唯一の美女っていうのが『ポリアンナ』のパレおばさまですか。カリウ夫人の池田昌子ちゃんと二人でね。

『999』の（メーテル役で有名な）。

野沢　そうなんですよ。常に大人をやってらっしゃる方だからね。私はイメージ的には少年っていうイメージでしょ。本当に唯一の美女でね。みんなに信じてもらえないと困るので、終わってから、私あれやってたのよって言っても「ウソでしょ」なんて言われて困るから、証拠としてセル画を頂いて来たんですよ。これ私が演りましたよ、ということで。

数多い主役作品の中でとくに強く印象に残っていらっしゃるものはありますか。

野沢　私ね、主役のものってのは、どれも甲乙つけがたく好きなんですよね。強いて挙げなきゃいけないとすると、『ゲゲゲの鬼太郎』。シリーズの主役で一番最初でしょ。全国的にヒットもしましたしね。美空ひばりが大好きで、放送される夜6時になると、インタビューも受けないっていう話だったらしいですよ。

あとね、『999』や『ドラゴンボール』ね。この三つが気持ち比重が高いかなっていう感じで。数演っててちょっとわからないんですけど、主役切らしたことってなかったんですってね、私。全然気がつかなくて。その時々に夢中になって演ってますからね。今としては、主役のギネスブックと言うか、そういうものに、少年役の役者として載り

声優インタビュー

たいな、なんて思ってるんですよ。
　昭和四十三年の『ゲゲゲの鬼太郎』以来一年も途切れていないんですよ、25年以上も。
野沢　そうですか、嬉しいですよ。本当、有難いですよね。でも皆さんのおかげなんですよ。喜んでもらえて、反響があってね。
　主役以外の作品で、僕が好きなのが『みつばちマーヤ』のウィリーっていう役ですね。
野沢　あ、好きなの、私も。眠たそうな顔しているんだよね。第一声で出した声があの声なんですね。その一方で「故事いわく」なんて言ってね（笑）。あの役はね、これを演っててよかったなっていうものの一つなのね。最初に録音に行ったときに、「野沢さん、これ4話で消えるんです」って。4話過ぎちゃうとマーヤが巣から飛び立って冒険の旅に出ることになっていたんですね。それでウィリーは出なくなっちゃう。でも私の方はたった4話でも演ってよかったなって思ってたんです。そうしたら、本の先生たちが「面白いから、このキャラクターをこのままにしておくのはもったいない」っておっしゃってくださって。それで急きょ録音をちょっとお休みして、その間に話を変えて一緒に飛び立つことになったの。『マーヤ』のウィリーは、そう言ってくれる人が多いんですよ。そういうのって役者にとってすごく嬉しいんですよね。
　主役じゃなく、脇役を演るってことについては、とくに心情的な違いのようなものはあるのでしょうか。
野沢　主役だからどう、脇役だからどう、ってことはないんですけど、主役の方がどっちかと言ったら気は使いますよね。主役を演っているからって、一番いいわけじゃないし、みんなに盛り立てていただいて。例えば『ＤＢ』だったら悟空がより良く生きるわけだから私一人の力じゃないと思ってるからね。だから、本当に皆さんに感謝しなきゃいけないと思うしね。そんなこと言うと、すごく偉そうなこと言ってるようだからね、嫌だからあんまり口に出さないんですけど、自分の心の中ではあるんですよ。脇役のときは、主役を盛り上げてなおかつ自分も生きなきゃならないってのがあるから、もう思いっきり楽しんじゃったりしますけどね。
　アドリブのようなものは。
野沢　アドリブもね、脇役の方が多いかな。主役があんまり入れるとね、ガチャガチャしていけないと思うんですよ。個人的にはアドリブ大好きなんです。
　少年役にも色々ありますが、野沢さんご自身はどういうキャラが好きですか。
野沢　本質的にはギャグが好きですね。好きですけどね、影のある少年ってのも好きなんです、でもあんまり来ない（笑）。結局、イメージがあるんでしょうね。「元気のいい」となると「ああ、野沢雅子」っていうイメージがあると思うんです。影のある少年って言うと「んー、違うな」ってね。役者だからできないことはないし、何でもチャレンジしたいしね。

声優インタビュー

〔技術〕

『ドラゴンボール』で、2役やってらっしゃいますが、2役というのは初めてですよね。

野沢　主役では初めてですね。

　初めから悟飯も野沢さんで、ということだったんですか。

野沢　いえ、知りませんでした。聞いたときは最高に嬉しかった。役者冥利ですね。オーディションもなかったし。

　特別番組で悟空の父もやったので、

3代ですよね。

野沢　そう、バーダック。嬉しいんですよ、『ドラゴンボール』ではいろんなものに挑戦させていただけて。新記録も作れるでしょ。これも私初めてだし。劇場版で主役3人ってのもないでしょ。これも初めてで、新記録で。最高に嬉しいんですよ。

　悟空とバーダックもちゃんと演じ分けていらっしゃって。野沢さん自身も変えようと。

野沢　うん、性格が違うからね。役作りして、絵に合わせて。絵がないのが辛いですね。劇場版には多いですからね。その場合はセルを持って来ていただいて、ホンを読んで。

　役作りは、かなり考えてやる人もいれば、絵を見てその場で考える人もいらっしゃいますが、野沢さんはどういうタイプですか。

野沢　私は絵を見てスーッと入って、後は本を読むと。長年のキャリアで大体分かりますからね。でも私は、新人は作るべきだと思います。今、作られていないのが多いから。私の場合、スッと入って、絵を見て、スッと第一声で出たのが、ディレクターや演出家の狙いとはずれたことはないですね。

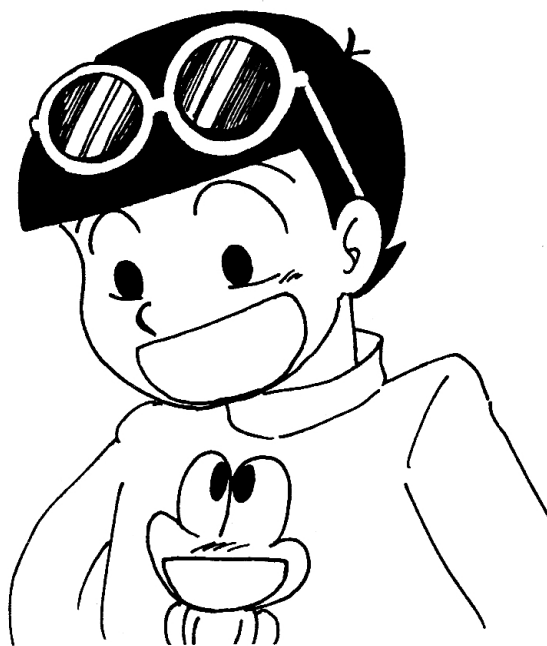
それで役作りをやらせていただいちゃう。だから、決して作っていないわけじゃないし、そうかと言って前もって、うーん、って作ってくるわけでもないし。作っていっちゃうと、絵と合わない場合もあるわけね。性格は合ってても、声ってのもあるでしょ。

　アニメーションだと、その場で台本をもらってその日にアフレコするのが多いですが、ずっとやってる作品ならまだしも、新番組や単発ものだと下準備のようなものを取れる時間がないと思うんですが。

野沢　確かにないですね。単発のときに、パーッて読んで、チェックして、パッと作らなきゃならない。だから、そのへんがキャリアですね。私だと、スッと出来ますけどね。若い人は無理じゃないかな。なんか、どれをやっても同じって人が多くて。同じわけがないんだから。声は一人の人がやってるから同じだっていいけど、性格や人物は違うわけでしょ。

　声優さんになるにはどうすればいいですか、という質問には、どのようにお答えになってますか。

野沢　地方の人には声優学校ってあまりないですね。プロとしてやっていくにはやっぱり東京に来ることが第一条件ね。あとは、

声優インタビュー

本を読むことですね。理解力や創造力がつくから。役作りに必要ですからね。ただセリフを言えばいいっていうんじゃないから。

野沢さんは声優学校の講師をしていらっしゃいますが、声優になろうとしている若い人に対して、どう思われますか。

野沢　やさしい世界じゃない、観るのとやるのとでは大違いだし、観ているぶんには簡単そうだし、憧れでやっていける世界じゃない、っていうことは、目指して来ているることだろうから、口を酸っぱくして言ってるんですよ。個人個人だから、みんなでせーのって上がれるわけじゃないし。みんなだったら試験勉強すれば、いい成績が取れるじゃないですか。役者はペーパーテストってものはないですから。経験が豊富じゃなきゃいけないし。だから、私は歳取った人、先輩が大好きなんですよ。色々なものが頂けるから。それが大切なの。やっぱりけむたいでしょ、年寄りと話すのは。それじゃだめなのよ、知識がふくらまないじゃない。上の人と話す機会を持ちなさいって言います。あとは演技ですね、発声とか。

舞台でやることが出来なければ声優も出来ない、という考えをお持ちですか。

野沢　いや、そうは考えてない。舞台をやらなくても出来ると思います。やるに越したことはないですね、勉強になるし。当てることはうまい、今の人は。声優学校で教えているから。昔の人は自分の間で出来ないぶんやりにくかったんですね。その代わり、今の人は、全部とは言いませんが、やっぱりセリフは血が通ってなきゃいけない。切れば血が流れなきゃいけない。いくらアニメーションでも、命を吹き込むってことは、役の絵を傷をつけたら血が出るくらい生きてなきゃいけない。今は、自分の与えられたセリフをいかにうまく言ったらいいか、っていう部分があるようにも感じられますね。会話がかみ合ってない。反応の仕方が相手の出方で変わるはずなのに、いつも同じに答えちゃう。そこがちょっと違うかなって思います。

新人の方にしてみれば、野沢さんは恐れ多くて近づけない部分もあると思うんですが。

野沢　私ね、新人が入ってきても、すごく庶民的なんですよ。気さくな人間だし、下町っ子だから、話しかけるんだけど、向こうも固くなってるから、一生懸命リラックスさせてあげようと思うの。新人はどうしても固くなっちゃうから、実力を出しきれ

声優インタビュー

ないのよ。新人はそこが登竜門になってくるわけでしょ。だから少しでもいいものを出してあげなきゃいけないと思うのよね。それが私の役目でもあるような気がするの。自分の芝居とともにね。たまに「私たち今日みんなでお茶飲もうって言ってるんですけど、野沢さんもし時間があったら」って話があると、「行く行く」って言うんですよ。そこで「私いつでもみんな行くのうらやましいなって思ってたのよね。誘ってもらえると嬉しいな、って思ってるのに」って言ったら、「えー、そうなんですか。私たちには雲の上のような存在だから話しかけられない」って言うんですよ。「とんでもない、私、地上の、普通の人よ。話しかけてよ、誘ってよ」なんて言うんですよね。

だけどその気持ちは僕たちにもわかるような気がします。

野沢　なんか、こっちの方へ追いやられちゃってさみしいような気がするしね。この世界ってとくにそうじゃないかしら。私たちと同じくらいの年代の人って少ないんですよ。ところが私はまだまだしゃべれるし、芝居できるし、しゃべれる間はもちろん役者ですから芝居できるわけですよね。その間はやっぱりやらなきゃうそだと思いますよ。引退なんかさせとくのもったいないですよ。もっともっと学び取るところがあるし、そういう人たちも使って、新人も出られるっていう。夢を売る仕事なんだから、私たちは。超豊かでなくていいですけど、ゆとりのある生活でできるくらいのことをしたいな、って思います。

最近は、舞台をやらないで声優だけをなさっている方もいらっしゃいますね。

野沢　昔の人だって、舞台が専業でこっちがあれ、ってことはないんですよね。やっぱり役者だから。こっちだって役者の作業でしょ、ジャンルが違うだけで。熱は入れて演りますよ、どれでも。でも、どっちが自分として比重的に楽しいかって言ったら、舞台が好きな人。

入ってからが勝負ね、声優学校出てきてる人は。昔はこういう学校がなかったぶん、そうそうはならなかったんですよね。神谷くんたちが一番大変な時代だったんじゃないですか。なかなか浮かび上がってこないってことで。今、超ベテランと言われる人たちがガッチリそこを守ってたから。新人が出てこられなかった。

世代交代は…。

野沢　なかった。アニメーションやってても何してもそうなわけね。そこでガッと守られてたから。そのかわり、今のその世代が吉田理保子さんたちが、よく言うんだけどね。「私たちが新人で入ると、先輩がたくさんいたから、先輩の芝居を見て学んでいった」って。昔はそうなんですよ。私たちは教えてもらっていたわけじゃないけど、先輩の芝居を学ぶというか盗むわけですね。それで自分たちが上がっていくという。それがいつもの方法だったの。

そういう点では今の人たちはかわいそうだし、そういう世界ってのはよくないんじゃないかな。この世界で伸びていかなくな

っちゃうんじゃないかなって、話してて思うんですよね。あの人たちが出ていくには大変な時代だったんですよ。一言二言なんて時代が長かったんじゃないですかね。今はポッと出てきても、主役や何か取れますからね。ところが、一本主役を取って次になると生徒ＡＢＣに戻ったり、あっと言う間にいなくなっちゃったりするのね。つかんだチャンスってのは逃さないようにやっていかなきゃ。そのへんが昔と違うのかなあと思いますね。

［キャスティング］

音響監督さんとのおつき合いというのはあるでしょうか。

野沢　音響監督とは、一緒に作品を作るってことで、仲よくしなきゃいけないと思います。でも、私根が明るいから。暗い人は嫌ですね。陰険な人もいますし。でも、必要以上に仲よくはしません。一線を置きます。個人的なつき合いから仕事をもらうの嫌なんですよ。役者のプライドもありますし、情けないでしょ。でも、親しいですよ。立ててはいます。外からはわからないでしょうけど。

キャスティングは音響監督によって偏ったりしてますよね。

野沢　でしょ。それが素人さんにわかるようなやり方しちゃいけないんですよ。自分の作品なんだから、名前も出るんだから、やっぱりグループが違っても、ピッタリの人を使って、大切に作って欲しいです。

プロダクションの力関係もありますよね。

野沢　ありますあります。

特に、東映動画作品は青二が強力ですよね。プロダクションの結びつきはどう思われますか。

野沢　本質的には好きじゃないです。役者はどこにでも出られなきゃいけないし。合ってる人を使っていい作品を作るべきだし、でも、今は仕方がないなって思う部分もありますね。それと、例えば、私は青二を作った人なんですが、資本金を出して。それをやめて来ちゃった人なんですけど（笑）。あそこの社長が東映を開拓した人だし、社長のつながりで力関係を保っているわけですよ。だから、久保さんは大好きなんですよ。久保社長が開拓したんだから、自分でがっちり持っているわけでしょ。それを崩そうと思ったら久保さん以上に力を持っていて、自分でも入り込んで、対等にキャスティングが出来るようにすればいいわけでしょ。それが出来ないんだから、やっぱりガタガタ言ってもいけないと思うのね。他のプロダクションにも何か責任があると思うんですよ。それがスタッフの仕事でしょ。スタッフが一流にならなきゃ。

８１プロデュースはぷろだくしょんバオバブから分裂して出来たと聞いたんですが。

野沢　青二は俳協から分裂して、私も含めて資本金出し合って独立したんです。そのときに、何をどうなったか、大きくなると

声優インタビュー

色々ゴタゴタがあるでしょ。南沢さんって人がそこを出て、バオバブを作ろうってことになって誘われたんです。そして、南沢くんについていってバオバブに来たわけですよ。バオバブは、社長は町田くんで、南沢くんは下でマネージャーをやってたんです。南沢くんも力がついてくれば、一国一城の主になりたいってのがありますよね。で、81ってのを作りたいって。それで私はついていったんです。私は、南沢くんについていって移動しているんですよ。でも、久保社長とも親しくおつき合いさせていただいてます。

“売り”として声優を当てますよね。例えば、歌手をポッと主役に当てたりとか。そういうのをどう思われますか。

野沢　情けない気がするのよね。この世界ってバカにされてるのかしら、なんて思っちゃうときもある。野球の選手が来てやったりするでしょ。その逆はないもんね。最近聞くところだと、イベントが出来るっていう事情で選ぶことがあるんです。若い人で歌が歌えるってことで。やめてよって思いますね。歌わなくたっていいっていう役もあるわけでしょ。それなのにまったく違う歌うたったりして。寂しいですよね、役者をコツコツやってきた者にはね。

ギャラ問題に関してですが、失礼ながらだいたいどれくらい頂くんですか。

野沢　私たちはね、ある程度のギャラがありまして、日俳連で決められているんです。これは言っていいと思わないんですけどね、まあ三万円としようか、三万円以上出したら自由、本人のケースバイケースで、私が欲しいと思ったら、ほんのちょっと取りづらいから、それだったら三万五千円にしましょう、それだったら五十万くださいってね。それは出せませんって言われたら、それでやって、妥協できるまでってのがありますよね。でも役者ってね、本来は、私なんかはただでもやりたい作品ってのがあるわけですよ。でも事務所としてはそうはいきませんよね。キャリアや何かもあるし。いくら未満でやってはいけないって。そこの時点でやるんですけど。だいたいね、五万円以上って言うんじゃないですか。私、そうじゃないかなって思うんですよ。でも色々つきますからね、再放送料ってのが。とりあえず2回までは再放送料が入っているわけです。込みの値段みたいな感じでね。コマーシャルになったらそれは違いますよ。ケタ違い、お金はね。

日俳連での活動はどのようなものなのでしょうか。

野沢　今まではおんぶにだっこだったんですよ。横着なのかしらね。委員って大変ですよ、役者の他に手当も出ないし。感謝してます。で、平成二年に、日俳連代表に選ばれちゃったんですよ。色々な会議や、シンポジウムでお手伝いしたんですよ。次の年、新委員がスタートして、誘われたんですよ。役者の他にやるのは大変なんですが、前の年やって、長年この世界にいて、今までみなさんにお願いしすぎちゃったから、このへんで、自分に出来ることがあれば手

伝った方がいいかな、やってみようって平成三年から引き受けたんです。私、発言が過激で、包まないんですよ。オブラートに包んで伝わらなかったら嫌だから。上の人にも平気で言うんです。下の人には割と包んで言うんですが。危険性もあるなって自分でも思ってるんです、そんなことないよって皆さんからはおっしゃっていただいていますが。

声優ギャラアップを目指して、ストも辞さないようですね。

野沢　今相談してるんですよ。話し合って、どうしてもっていうときには、ってことで。回答が返って来なかったらデモをやろうかって話なんですよ。私は、ファンの人の声が大きいと思うんです。そういう人たちに賛同を得てやったら強いんじゃないかと思いますね。

〔プライベート〕

車の運転がお好きだそうですが。

野沢　運転大好きで、体力の続くかぎり運転していたいって感じ。スピード狂ですね。保険は入ってます（笑）。計画して行くのはあまり好きじゃないんです。私、“自由、夢、ハプニング”って言葉が好きで。何も考えずに行って「あ、こんなところがあったのか」って。キント雲があればいいんですけどね（笑）。

休日はどのように過ごされますか。やはりドライブですか。

野沢　その他にもスポーツ観戦好きなの。正月のマラソンとか、「だらしないぞ早稲田」って（笑）。あと、ラグビーとか、野球でもなんでも。テレビが多いですけど、時間があれば実際に行きます。生の熱気が伝わってきますから。

休みはとれるんですか。

野沢　週1・2日くらい。取れないときもありますけどね。あせっちゃいますよ、「休みだから何しよう。これもやってみなきゃ」って。だんだん時間が経っちゃって、「何だ、1日ボケッと過ごしちゃったな」って。ボケッとしているのも好きなんですけど、あせるのが自分でもおかしいですね。

ショッピングも好きですね。これも、場所を決めずにね。「え、こんなところにこんな店があるんだ」って。あと、お寺とか、お墓も好き。ポケッと見てるだけで。色々あって、すごい古いのや変わった形があったり。『鬼太郎』のとき言われたんですよ、「そういうので選ばれたんですか」って（笑）。

親しい声優さんは。

野沢　親しい人けっこう多いですね。若い人でも、水島（裕）とかトモとか。神谷（明）、三ツ矢（雄二）、（井上）和彦とか、弟みたいな感じで。同時代の人とも親しいし。上の人でも麻生美代子さんは、お姉さん的、お母さん的で。池田昌子ちゃんなんかも。

同時代、あるいは少し下の人とはなかなか会えないんですよ。若い人とはスタジオで会えるんですが。情けないことに、冠婚葬祭くらいでしか。これはいけないって思

声優インタビュー

うんですよ。現場で会いたいですよね。

　ご家庭に関してですが、お子様はいらっしゃいますか。

野沢　子供はいますよ。二十歳過ぎの。去年結婚しました。相手は早稲田の人で。内心ニコニコしてるんです。

　では、お子様も野沢さんの作品を観て育ったということですか。

野沢　そうですね。ファンの一人かな。私はバロメーターにも使っていました。そういう反応を示すかなって。ある種の先生でもあるわけですよ。

　ファンレターはやはり多いですか。

野沢　やはり多いですよ。小さいお子さんはね、お母さんが書いてるんだと思う。字もきれいだし。それを読んでいると、今のお母さんたちの考え方や若い人たちの考え方がわかるのね。年齢のギャップもあるけど、私はなるべくその中に入っていきたいから。自分の歳なんて考えたことないし、役者に年はないと思いますしね。私は、よく「年歳いくつですか」って聞かれたら、「役者に年を聞かないでください」って答えてるんですよね。その日によって私は違ってるの。８歳の少年をやるときは８歳の気持ちでいかないとね。自分の年を考えたり、もう大人なんだって考えたら、子供やれないでしょ。だから、そういう人たちの中へ入っていって。「若い人」っていう言い方は嫌いなんだけどね。自分と同じだと思ってるから、常に。

　ファンレターの質の変化は、長年の間にありますか。

野沢　あまりないですね。子供ってのは、同じなのかなあ、どの世代でも。考えは純真よね、悟空さんに憧れちゃうとか。自分の友達になってきてるのよね。それが嬉しい。それでいて、声は私がやっているからダブッちゃって一体になってるのよね。

　裏を返すと、悟空は子供たちのアイドルだけど、野沢さんは言わば裏方ですよね。野沢さんのお名前は、失礼ですけど、世間一般には知られていないと思うんですよ。そういうことに関して何か特別な思いは。

野沢　それはあまり感じたことはないですね。知ってもらうことは、そりゃあ嬉しいけど、タイトルを見ないで知っていなくても、キャラクターを知ってもらえれば嬉しい。観てもらえているってことですからね。

　やめたいと思ったことは。

野沢　ないですね。一日もないとは言いませんが、いやでやめたいって思ったことはないです。ただ、ずっと役者やってるでしょ。役者・野沢雅子として、きれいな華やかなうちに幕を閉じようかって思ったことは一回だけあるの。そしたら、都はるみがやったでしょ。二番煎じはいやなのよ。だから、それだったらギネスブックにのってやろう、と。今ギネス目指してます(笑)。やっぱり役者やめられないと思う、私は。死ぬまでやってると思います。プロデューサーや演出家も魅力あるんですけど、自分の好きな作品を手がけて、自分がこの人！

声優インタビュー

って思ったキャスティングをしてやれたらいいなと思うんです。だけど、役者やってたら二足のわらじは履けない気がするから。

アニメの作品で、あんまり乗れないなっていう作品もあるわけですよね。

野沢　そうね、そういう作品も読んだときにはそういう感じがあるのかもしれないけど、やっちゃとだめ、乗るわよ。私は根っからの役者だから。

この頃、野沢さんのインタビュー記事をあまり見かけなくなりまして。

野沢　そうですね。もう私、古くて、シーラカンスみたいなものでしょ。若い人にもう移ってるのね。年寄りだからって、脇に置いてきぼりにしないでほしいな（笑）。その方が精力的に動く気になるじゃない（笑）。

PROFILE

野沢　雅子

本名　　同じ
誕生日　１０月２５日
血液型　Ｏ型
星座　　蠍座
所属　　８１プロデュース（劇団ムーンライト主宰）
<主要キャラクター>
１９６６年　『魔法使いサリー』トン吉・チン平・カン太
　　７０年　『いなかっぺ大将』風大左衛門
　　７１年　『ゲゲゲの鬼太郎』鬼太郎
　　７２年　『ど根性ガエル』ヒロシ
　　７３年　『ドロロンえん魔くん』えん魔くん
　　７４年　『ガンバの冒険』ガンバ
　　７５年　『みつばちマーヤの冒険』ウィリー
　　７６年　『ピコリーノの冒険』ピコリーノ
　　７７年　『おれは鉄兵』鉄兵
　　　　　　『あらいぐまラスカル』ラスカル
　　７９年　『銀河鉄道９９９』星野鉄郎
　　８０年　『トム・ソーヤの冒険』トム
　　　　　　『釣りキチ三平』三平
　　　　　　『怪物くん』怪物くん
　　８３年　『銀河漂流バイファム』ケンツ・ノートン
　　８６年　『愛少女ポリアンナ物語』パレー夫人
　　８６年以降　『ドラゴンボール』　孫悟空
　　　　　　　　『ドラゴンボールＺ』孫悟飯・悟天

世紀の天才！林原めぐみの「七色の声」！

「いいことあるわよ」の春日エリの声が、今でも私の頭の中を駆け巡っていますが、それにしても早いものですね、「チンプイ」が終了してからもう4年がたつんですよね。

私が林原めぐみさんのことをはじめて知ったのは、確か八九年四月頃のＮＨＫ教育ＴＶの「やっぱりヤンチャー」だと思います。一般のファンに比べて遅い方だと思いますが、それは、その頃の私は（まだ学生でしたが）、ほとんどアニメを見ていなかったからで、それでもなぜかＮＨＫ教育の午前中の学習番組だけは興味があって見ていました。「やっぱりヤンチャー」もその一つで、結構何気なしに見ていたのです。ただ残念なことに、当時は林原さんが出演していたことは知っていたのですが、特に気合いを入れて見ていた作品ではなかったこともあり、ファンになるところまではいきませんでした。

こうして、私が林原さんの出ているアニメを見たのは、八九年一〇月の「チンプイ」の一話が初めてだったのです。しかし、非常に悔やむべきことに、なぜか本放送の時には、それほどインパクトを受けず、そのうち「チンプイ」も見なくなってしまいました。

＊　＊　＊

そんな私に最大の転機が訪れました。それは忘れもしない九〇年六月二八日、就職して間もない頃のことでした。久しぶりに「チンプイ」を見ようと、一九時三〇分にテレビ朝日をつけました。それは「見つかった　宇宙人の秘密基地！」という話で、私はもの凄い衝撃を受けたのです。

それは、まさに今までに私が一度も経験しなかった衝撃でした。私も一応「マジンガーＺ」の頃から、それなりにアニメを見ていた人間ですが、アニメからこれほどの衝撃を受けたことはなかったのです。

「こんなにも味のある声を出せる声優さんがいたのか」という驚きのあまり、その日、「チンプイ」を見終わった後も、しばらくは呆然としてしまったほどです。それほどに、林原さんの声は素晴らしかったのです。

あらためて、「チンプイ」の第一話をビデオで見たのですが、もう第一話から、春日エリのあのキャラクターを見事に演じておりまして、感動しました。何故初めて見たときに何も感じなかったのか不思議なくらいです。

＊　＊　＊

それ以降、私は急速に林原さんのファンになり「チンプイ」だけでなく、「ワタル2」「らんま1／2」「平成天才バカボン」「ようこそようこ」、ＮＨＫ教育の「ともだちいっぱい」なども見るようになりました。

「ともだちいっぱい」は「うたってあそぼ」「なかよくあそぼ」「しぜんとあそぼ」「かずとあそぼ」「つくってあそぼ」の五パートからなり、林原さんはソラミの役をやってます。ソラミは、小学校入学前の子供という設定なのですが、この演技もまたうまいのです。どうしてこう役柄に合わせた声に変えられるのでしょうか。まさに「七色の声」というしかありません。

「らんま1／2」では、みなさんご存じの通り女らんまをやっていますが、この演技も絶品です。水をかけられて女にはなっているものの、もともとの「男としての心」を表現しながら演技しているのは、「うまい」の一言に尽きます。

「平成天才バカボン」のバカボン役は、林原さんの新境地を開いたといえるでしょう。純然たる「男の子役」でのレギュラー出演は数少ないでしょうから、その見事な演技に新鮮な驚きを感じました。

他にもいろいろ見ましたが、やはり「チンプイ」が一番すごいと思いました。林原さんの演技が、春日エリというキャラクターに血の通った人間の様な魅力を与え、感動的とさえいえます。

ちなみに「チンプイ」という作品自体も面白い作品です。ストーリー展開も作画もかなり良いのですが、やはり林原さんを始めとした声優陣の貢献が大きいでしょう。まさに声優陣がいいと作品全体もいいという見本といえるでしょう。

＊　＊

林原さんは歌も良いのです。残念ながら私はそんなに聞いているほうではありませんが、これがいいんですよ。

まずは「シンデレラになんかなりたくない」。春日エリの気持ちが、見事なまでに歌い込まれていて、私は歩きながらとか、電車を待っている時などに、よく口ずさんだものです。

この歌は何といっても2番の「シンデレラのなんかなりたくないだってあの子が好きだから」のフレーズが最高です。これはまさに「チンプイ」の根幹に流れるテーマそのものです。林原さんはこのフレーズを特に味わい深く歌っていて、聞く者に深い感動を与えてくれるのです。

次に「HOLD　YOU」。激しさとノリの良さが心地良い歌です。

他にも、素晴らしい歌をたくさん歌っています。

＊　＊

本当に林原さんは、演技も歌も素晴らしい声優です。なかなかこの素晴らしさを文章で表現するのは難しいのです。

例えば「チンプイ」の予告編の春日エリのナレーションの、最後の一言、「いいことあるわよ」。この一言ですら、普通の人が言うのとは全く違うのです。この一言を聞くと、どんなに落ち込んでいても、明日への希望と、逆境に立ち向かう勇気が湧いてくるのです。林原さんの声にはそういう力があるのです。

残念ながら、「チンプイ」は九一年四月に放送を終了しました。しかし、放送当時も、今日ビデオで見返す時でも、林原さんのセリフを聞いていますと、そしてまた、林原さんの歌を口ずさんだりしますと、仕事の疲れや憂欝が消え、心に快活さを取り戻すことができるのです。本当に素晴らしいのです。

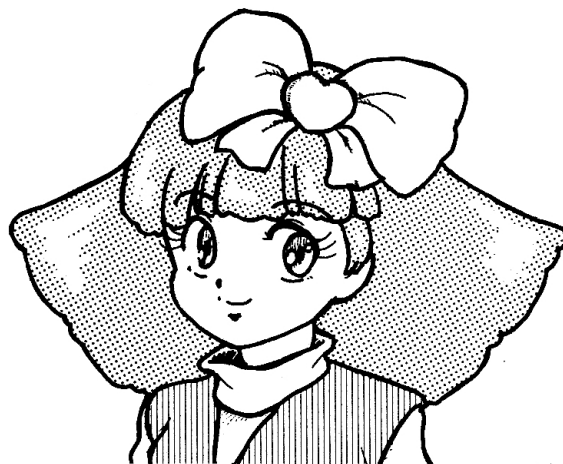
＊　＊

その後の林原さんというと、「魔法のプリンセス　ミンキーモモ」になるでしょうか。実に見事にモモの役を演じていて、いわば五月晴れの爽やかさを感じるのです。

――枯野と寒風が支配する厳しい冬を越え、生命力に満ちあふれた新緑の季節。真夏と同じくらいの強い日差しと、青葉を輝かせる風。――林原さんのモモ役には、こんな爽やかな表現がふさわしいのです。

以上のように、林原さんの役柄のごく一部を見てきましたが、他にも非常に多くのキャラクターを演じています。しかしどれとして同じ声では演じていません。まさに「七色の声」、筆舌に尽くしたいほど素晴らしいのです。

これからのますますのご活躍を期待します。

（鎮）

〈デビューまでのこと〉

声優になったきっかけからお話し願います。

大谷　私は、最初は舞台を目指していたんです。入る劇団を探すのに一番てっとり早い方法はということで、何かの雑誌で見たアナウンス学校の短期集中コースを受けに行ったんですが、そこはアナウンサー志望の人が多くって（笑）。ほんの少数、声優を目指している子がいて、「へえ、声優なんていう方法があるのか」と思ったんです。講習が終わったあと、養成コースと実践コースがあったんですが、だったら、そっちの方に行かないと、情報も何も手に入らないだろうと思って。まあ、同じ演劇関係で勉強することはだいたい一緒だから、ということで入ったのがきっかけですね。はっ、と気がついたら、あらっ、みたいな（笑）。

それはいつ頃のことでしょうか。

大谷　高校を卒業して、いったん、世間の目というか母親の目をごまかすために、一般企業に入って一年間正社員として働いたんですね。最初から一年間で辞めるって決めていたんですけど。ところがそこは、辞めなくても休みが比較的自由に取れるとこ

声優インタビュー

ろだったから、そのまま働きながら勉強していましたね。

江崎プロダクションの養成所にお入りになったきっかけは。

大谷　アナウンス学校を卒業して、ある劇団を受けたんですよ。でも、劇団に入っても最初は食べていかれないし、どっちにしろ仕事を続けていかなくちゃならないなあ、という考えでいたから、ちょっと気合い入れられなくて、落ちたんです（笑）。ところが、その年初めて行なわれた江崎プロダクションの養成所の試験が、試験日に大雪が降ったために延期になったんですね。私はその間にさきの劇団の試験に落ちていて（笑）、じゃあ、どこかに入って勉強して、次の年に受ければいいかなと思ったのが、入るきっかけになってしまったという・・・。

でも、谷育子さんや、納谷六朗さん、北村弘一さん、嶋俊介さんのような養成所の先生がたに恵まれまして。いつも芝居をきちんとしなさい、とおっしゃる先生がたでしたので、なあんだ一緒じゃない（笑）と思って。声優という考えは、最初はなかったんですけど、舞台と一緒なんだということで、真剣に勉強を始めたというわけです。

〈役どころに関して〉

では今でも、舞台をやりたいとお考えになっているですね。

大谷　ええ。二回ほど舞台は踏ませていただきました。最初は、八歳の男の子の役だったんです。台詞劇で、本物の子役を使うには大変なので、みかけも子供に見えて、なおかつ人が見ても納得できる子というので、やらない？　と谷さんに誘われたんです。それからついこないだ、今度は看護婦さんの役で、やらせていただきました。

やはり大谷さんは男の子の役が多いように思われるのですが。

大谷　アニメデビュー作の『がんばれ！キッカーズ』も、男の子役でしたね。その後はずっと洋画の仕事をやっていて、蕨南さんがディレクターをなさっている作品には、子供の声でよく出させていただきました。蕨さんがおっしゃるには、（大阪弁の抑揚で）「おまえは女はできんよ、子供で一生終われ」ということで（笑）、必ず男の子の役をいただきました。

だから、『おれは直角』のオーディションのときにも男の子を受けに行ったんですよ。ところが、ディレクターの水本完さんは、

声優インタビュー

「君、男の子ダメだね（笑）。女の子にしなさい」とおっしゃって。それで女の子をやってみたら、「女の子の方がいいじゃない」と言われて、綾乃の役をいただいたんです。

　綾乃は元気なタイプでしたが、『姫ちゃんのリボン』のエリカは全然違いますよね。

大谷　ねえ、苦しいんですよ、あれ。たぶんエリカだけで呼ばれていたら、もうそろそろなんとかなってるんじゃないかなって思うんですけど。姫ちゃんと一緒だから救われた、という部分があったかもしれませんね。

　でもエリカの声は落ち着いていて、こう言ったら失礼ですが、ああ、やればできるんだな、と思いました。

大谷　あ、できるんだなみたいな。私も思いました（笑）。みんなにも、「気持ち悪くない？」と言われましたし、自分でも、男の子役ばかりだったから、自分が男だという発想があって、オカマになったみたいな気分がしましたね（笑）。ちょっと最初は拒否反応がありましたね、女の子の気持ちでしゃべったことが数少ないものですから（笑）。そういう気持ちの問題でちょっと・・・。考えてみたら私も女の子なんですものね（笑）。

〈姫ちゃんのリボン〉

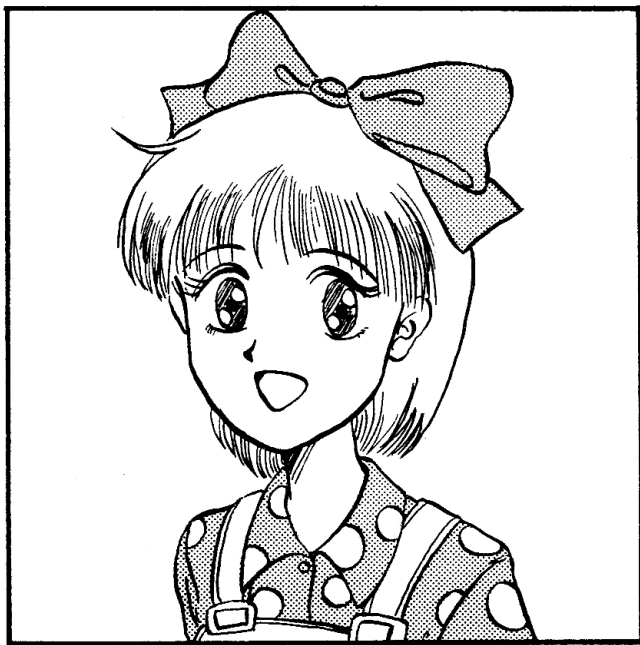
　『姫ちゃんのリボン』は、大谷さんに限らず、今までの役どころと違った役に挑んでいらっしゃる声優さんが多い作品だと思います。

大谷　私をはじめとして、みなバージン・キャラクターなんですよね。声優でない方が二人いらっしゃって、私も女の子をやったことがない、ひかる役の水原リンさんも女の子をやったことがない。みんなそれぞれ苦しんでいるというか・・・。でも、最初は拒否反応があるかもしれないんですけど、そのうち、「あ、これしか考えられないな」って納得できるところまで持っていけたら、認めてもらえたら最高ですね。従来通りのイメージで見ている人たちがいて、「これはイメージ通り」というのではない、いい意味での裏切りがあったら成功だな、と思っています。

　確かに、ある部分では非難ゴウゴウみたいなところがあると思うんですよね。でも、あえて私たちに挑戦させてくれてるということですから、甘えないでいいものを作っていきたいと思っています。

　「〇〇くんになあれ」などのセリフは、音響の方と相談してお決めになるんですか。それともご自分で・・・。

大谷　それは指示がありましたね。はじめ「〇〇くんになあれ」と言ったら、もう少し「れ」を伸ばしてください、って言われたんですけど、納得が行かなくって、「なあれ」「なあれ」「なあれ！」（笑）とか言っちゃって。何度も練習させていただいて。それでも「もうちょっとね、高いトーンで伸ばしてください」。ぐっちゃぐちゃになってわからなくなって。

声優インタビュー

「いけいけゴーゴージャンプ！」も研究なさったんですか。
大谷　あ、あれはね、自然にできちゃったというか。(身振りをつけて)こうでしたっけ。こないだ打ち入りをしたときのことですが、池水通洋さんが「来る途中の電車の中で、小っちゃい男の子が『いけいけゴーゴー』ってやってましたから、これはいけると思います」とおっしゃっていました。
うちの母親も、一回聞いて耳についちゃったらしくって、朝、「やだわ」って言うからどうしたのって聞くと、「朝起きたら、『いけいけゴーゴージャーンプ！』ってずーっと頭の中を巡ってるのよ」(笑)。ふっと気を緩ますと口ずさんじゃうんですって。「いけいけ・・・」、いけない！　まわり見ちゃったりとか(笑)。よし、これはしめしめって思いまして。クセになってくれれば・・・。
先ほどから聞いていて気がついたのですが、テンションが上がってくると、『ガンバルガー』に出てくる哲哉くんの声がどうしても耳に入ってきますね。アニメでは一オクターブくらい高めに聞こえるのですが。
大谷　落ち着いているときは低いんですけど、テンションが上がってくると果てしなく高くなっていく。エリカや哲哉も、ああいうのが普通だと思っているんですけどね、自分では。
高い声と言えば、『21エモン』でモンガーをやっていたときのことですが、次回予告が、佐々木望さんのあとに「テイク・オーフ！」と言って終わりになるんですよね。そのときに何度もとり直しになって、「テイク・オーフ！」「テイク・オーフ！」「テイク・オーフ！」って、やり直すごとにどんどん上がっちゃって(笑)、マイクをオンにしなくても向こうのブースがギンギンになるくらいに。「うるさい」って言われまして。
本人はパッチンと切れちゃうと、どういう声を出しているのかわからなくなって・・・(笑)。
役柄に合った声を作るのではなくて、自分でなりきるというようなことでしょうか。
大谷　画面を見ないと出せない部分って、やっぱりあるんですけど、どう出るかも、どうやって出そうと考えてないし、どう出るかも、自分が声を出すまでわからないんですよ、最初って。どう出るのかなあ、まあいいや、出たとこ勝負で(笑)っていう感じですけどね。
絵を見て自然に出てくるようにして

声優インタビュー

になるんですね。

〈パーソナリティー・・・アニメ、趣味〉

もともと声優になろうとはお考えにならなかったということですが、アニメーションなども、もともとご覧にならなかったほうなんですか。

大谷　いいえ、小っちゃい頃は見てました。妹と弟がいるんですよ。で、弟が二つ違いなものですから、だいたいケンカする世代というか、番組争いで必ず負けてしまって（笑）。こっちは普通のドラマとかが見たいのに、弟は・・・っていう。

弟の影響が強くてずいぶん見てましたよ。必ず最初はいやだって言うんですけど、見ると病みつきになっちゃって。一番最初で負けてしまって、なんかゾッコンになってしまったのが、『機動戦士ガンダム』ですか。「ガンダム始まるから見る」「くっだらない、そんなの見たかないわよ。デデデとかやって終わりなんでしょ」。ギャーギャーケンカして、ジャンケンしたら負けちゃって（笑）。見てみると内容が濃かったので、雑誌を買ってきて研究する。予習復習しておかないとわからないんですね、人間関係が（笑）。

ご趣味については。

大谷　趣味になるかどうかわからないんですけど、スキューバ・ダイビングを始めたんですよ。子供の頃から、海や水が怖いって思ったことは一度もなかったんです。小っちゃい頃、ボートかなんかで沖へ行って、「育江ちゃん飛びおりておいで」。「はぁーい！」ドーッと飛びこんで（笑）、父親のほうが勢いに怖くなるくらいだったんですけど。

でも、初めて潜ったときに、この世にない恐怖を味わいました、私は。まわりが全部水で、十何メートルも潜っているときに、すぐに水面に上がろうとすると、内蔵が水圧で圧縮されているぶん、肺がポーンと破裂してしまって死んでしまうんですね。怖いって思っても、すぐには上がれない、すぐに空気のあるところには行けない、って言われて、顔面にサーッと縦線が入るような思いでした。

でもその前にトレーニングで、鼻から息を飲んじゃって、もう怖くって怖くって・・・。あの、命の洗濯になるかな（笑）とか思って。

魚が怖いんですよ、私。魚の姿が見られないくらい怖くて。海に潜ってると、魚が

いらっしゃるんですか。

大谷　作っちゃうと、喜怒哀楽が難しくなっちゃうんですよね。例えば、子供をやるときは、子供の視点から見るようにって心がけるんですよ。目の前の灰皿を指して「これなあに」って聞くときでも、（これが灰皿だと）わかってる大谷がいて、役柄が「これなあに」って聞いちゃうといやらしくなっちゃうんですね。純粋に何だろうって気持ちが入らないと子供にならないから、その気持ちというか、今まで知ってることをすべて取り去る作業から入って・・・、そういう感じでいくと、ああいうしゃべり方

声優インタビュー

この辺（顔の前方）泳ぐんですよね。でも、パニックを起こして死んじゃうのもバカバカしいから、「ひいー、魚だ」と思いつつ見るようにして。さっきもそこにコイがいましたよね。またぐときに「ひいー」とか思いつつ（笑）。気持ち悪いんですよ。魚ならヘビの方が好きですね。

お食事のときはどうなさるんですか。

大谷　魚料理の中では、お造りなんかありますよね。そういうときは、「ナプキンない？」ってまわりの人に聞いて、ナプキンをかけちゃう（笑）。魚がきらいだからといって、おいしいもの食べない手はないでしょう、みたいな。そういうところで意地を張りたくないなんて思って、食べることは食べます。

姿がダメなんですよ。どうしてかわからないんですけど。インストラクターの先生も、「魚が怖いんじゃなぁ（笑）。それでパニック起こされて死なれた日にゃあ」みたいな感じで。でも、魚よりも水が怖くなっちゃったから、魚を怖がっている余裕がなくなってしまいました。

魚に慣れるために、餌付けもやったんです。魚用のソーセージをこうやって（手のひらに広げる）パラパラパラってやると、魚がドォーッって来るんですよ。ヒエーッと心の中で思いつつ、ここに（頭の斜め上方を指して）フキダシが「ヒエーッ」って出るような感覚で（笑）。でも、魚より水が怖いぞと思いつつ。魚リハビリのためにもいいかな（笑）とか思って。

自由に楽しめるところまでは、まだいっていないというわけなんですね。

大谷　まだ体のコントロールがなかなかつかなくって、海のもずくになっちゃうんですよ。海のもくずじゃなくって（笑）。（もずくのように海中でゆれている格好をして）まあ、岸から少しは脱出したかなって感じですか。

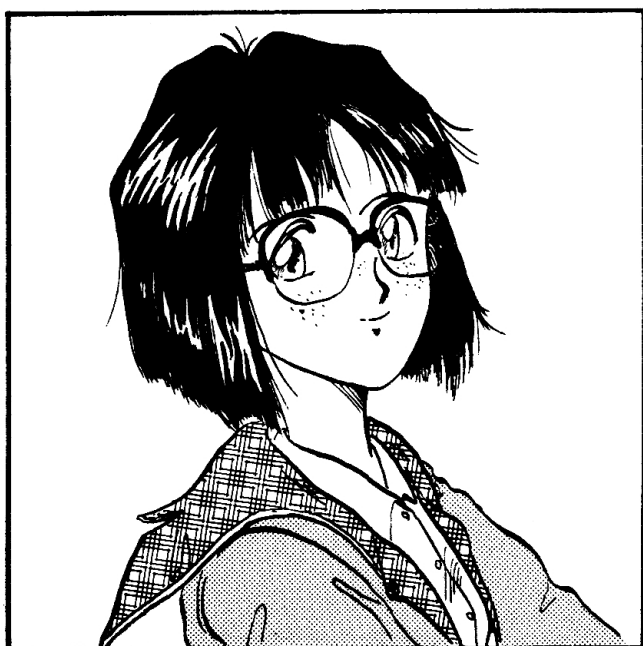
〈将来のこと〉

これからの目標についてお話し願います。

大谷　これは変なんですけどね、S．スピルバーグに、「大谷育江って役者がいるけど、すごいね」って言わせてみたいなって（一同どよめくのを受けて笑）。

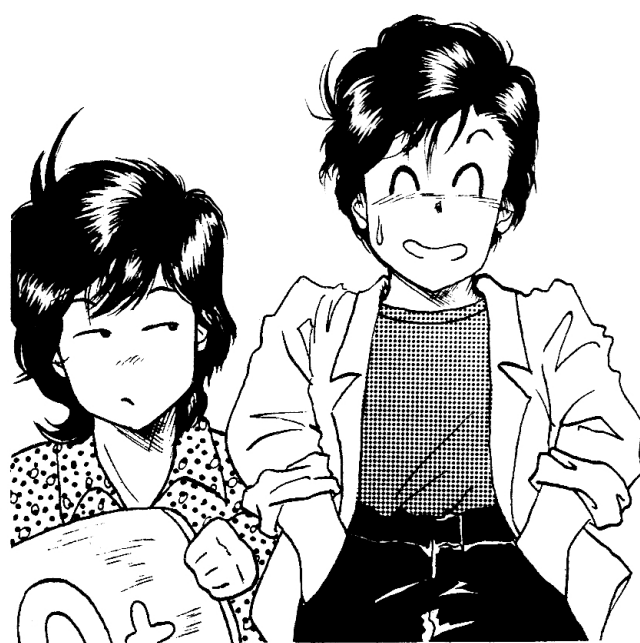
でも、それは自分でアプローチしてそうなるのではなく、ランダムに作品を見ていてそう思われるようになるには、すごく頑張らなきゃならないっていう自分への戒めなんですね。声優の名前なんてチェックしないでしょうし、でも、いろんなすごい人を見つけて来るじゃないですか。そういう人に認められるようになりたいなっていうのが、一応目標で。そうすれば、まだまだ頑張んなきゃって自分にムチ打てるっていうか（笑）。です。

本日はどうもありがとうございました。

（一九九二年十一月九日　談話室滝沢・新宿東口店にて）

PROFILE

大谷　育江

本名　　同じ
誕生日　８月１８日
所属　　江崎プロダクション
＜主要キャラクター＞
１９８６年 ＴＶ　『がんばれ！キッカーズ』はらきよし
　　９０年 ＴＶ　『コボちゃん』コボちゃん
　　９１年 ＴＶ　『２１エモン』モンガー
　　　　　 ＴＶ　『ゲンジ通信あげだま』平家こだま
　　９２年 ＴＶ　『元気爆発ガンバルガー』流崎哲哉
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　小牧百合香
　　　　　 ＴＶ　『姫ちゃんのリボン』野々原姫子
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　エリカ
　　　　　 ＴＶ　『南国少年パプワくん』コタロー
　　９３年 ＴＶ　『熱血最強ゴウザウラー』小島尊子
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　水原結花
　　９５年 ＴＶ　『ガリバーボーイ』エジソン
その他　　 ＯＶＡ『ああっ女神さまっ』長谷川空
　　　　　 ＣＤ　『影技』キュオ
　　　　　 ＣＤ　『レジェンドオブクリスタニア』
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　ライファン

洋画ドラマ、『フルハウス』のステファニー役は絶品。この番組は好評を博し、４年以上にわたって放映されており、今後も続くであろう。この作品が、彼女の代表作になることは間違いない。

声優がいっぱい
―その1―
CITY HUNTER

少し古い話をしよう。

今から五年くらい前、当時売出し中の女性声優さんと話をしていた時のこと——

「どんな役をやってみたいですか」

という問いに、

「『シティーハンター』のゲストがいいな。あれに出ると、美人役として、なんか〃認められた〃って感じがするじゃないですか」

——八七年から放送開始の『シティーハンター』には、毎週毎週次から次へと、女性声優のおいしいところがゲストで声をアテていて、私も「来週は誰がでるのかな」とワクワクしていた記憶がある。若手の声優さんにとって、登竜門、もしくはステータスになっても不思議じゃないな——そう思ったものである。

どういう声優がでていたか——新人から超ベテラン、美少女からアダルトグラマーまでいろんな人がいたけど——、知りたい向きには、CD〃シティーハンター・ドラマティックマスターII〃に、九〇年一月までの放映分のオールリストがついているし、最近では、〃ニュータイプ〃九五年七月号にも特集記事が載っている。ま、再放送で見るのが早いかもしれない。

印象に残っているといえば、一四話の「絶世の美女と思いきや、実はオカマのギャングのボス」役をやらされた井上遥や、二七話・二八話の「ぼけと絶叫をしまくるバイオリニスト」役の島本須美などなど、数えればきりがない。

そういえば、八九年九月、二か月程ブランクを置いて再開した『シティーハンターIII』の一番最初のゲストは、当時「昇り始めた太陽」だった林原めぐみだったし、二番目は、『魔女の宅急便』直後の高山みなみだった。たしか、冒頭の声優さんの話を聞いたのがこの時期だったから、「なんか〃認められた〃って感じ…」というコメントにも実感が湧いてくる。

また、忘れられないのが、多くの回で端役をやっていた当時売出し中の山寺宏一。「殺し屋」「やくざ1」「部下A」等々、ウッとかギャーとかやっていた人が、数年を経ずして、九〇年代を代表するマルチヴォイスプレイヤーになるとはね。

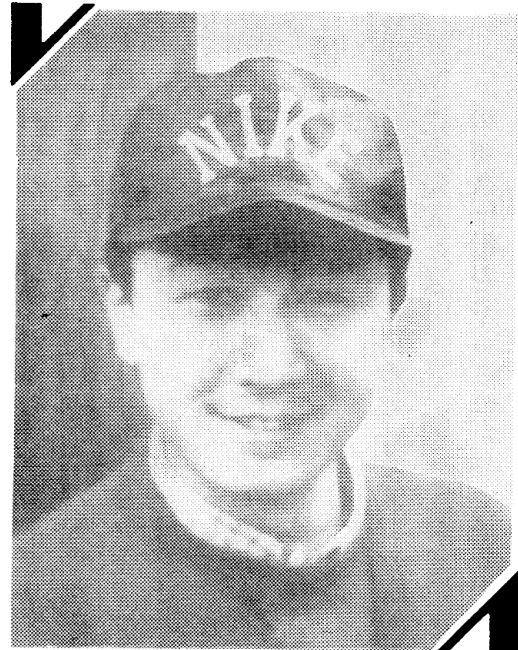
さらに言えば、茶風林、田原アルノ、林玉緒、水原リンなど今のアニメ界を陰で支えている名脇役が揃っていた。

おっと、レギュラーの伊倉一恵を忘れてはいけない。男の子役の多い彼女にとって、数少ない女性役のレギュラーだろうから（もっとも、役どころからいって、男の子と同じような演技が多かったけどね）。

むろん、主人公・神谷明の絶妙な演技が、こうした声優陣の魅力を十二分に引き出したことは言うに及ばず。

こういう女性ゲストが毎回豪華版、レギュラー・脇役も充実、という番組をまた見てみたい。

（邦）

[きっかけ]

芸能界に入ったきっかけや，プロフィールをお聞かせ下さい。

金丸　声優の存在を余り良く知らなかったのですが、皆さんと同じ大学生の、一年の時に、新宿の丸井ファッション館のブロッコリーというFMのボックスで、日本語と英語両方使うDJをやっていて、それで今の事務所のマネージャーに、「来ないか」っていう事で。で、最初にやり始めたのが「うる星やつら」なんですよ。本当に「生徒1」みたいな感じで。監督が斯波さんで、その後「ハイスクール奇面組」のレギュラーがいきなり来たんですよ。全然声優の勉強も何もしなかったですね。

　御芝居とかも全然やっていらっしゃらなかったのですか。

金丸　児童劇団に少し居た事はあったんですけど。

　同人誌でちらっと見たのですが、昔、FENで仕事をやっていらしゃったそうですが。

金丸　そうですね、メリーランド大学の教授がいて、本当に内緒なんだけどFENでアルバイトさせて貰って。レコード整理と

声優インタビュー

か色々とやったんですよ。

高校生くらいのときですか。

金丸　いえ、大学生の時です。だから、そのＦＥＮのバイトが終ってすぐ丸井でＤＪの仕事に入ったのかな。

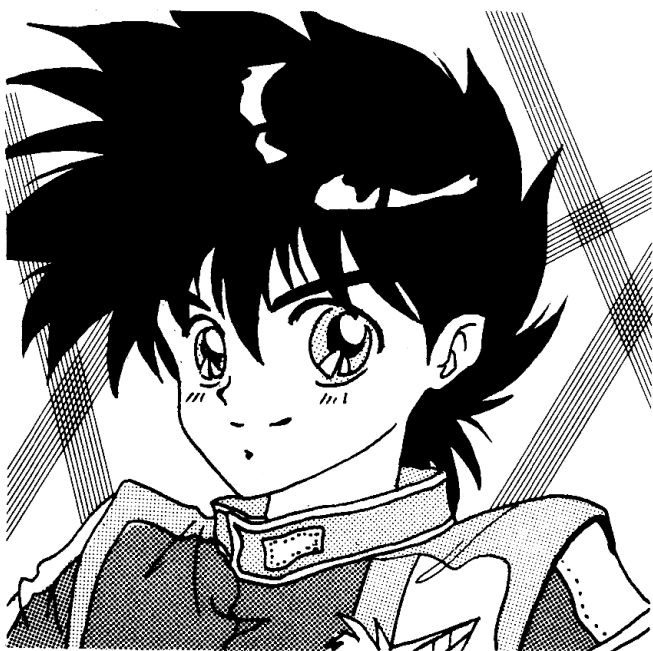
芸能界に入ろうとかいうのはなかったのですか。

金丸　僕、昔は凄い引込み思案で（笑）、近所でみんな劇団とか通い始めたブームがあって、その時、「あんたも行ってみない」って母親に勧められて行ったのが最初だったのかな。だから最初はみんなの前で発表するって事がすごく嫌で、段々それが慣れてくると、「あ、面白いな」っていうのがあって。それからですね。中学，高校とずっとバスケとか水泳をやっていたんですけど、その他に、ちょっと、演劇とか放送とか、放送劇みたいな形が凄く好きになって。で，高校一年の時に、ＤＪのバイトをさせて貰って。たまたまその時に、うちの高校の先輩が宣伝会社に勤めていて、「化粧品のＣＭがあるんだけどやってみないか」という話があって、それで、一番最初、ＴＶのＣＭから僕は入ったんですよ。だから、アニメの声優っていう存在が、自分の中で明確になったのは、本当に、「うる星やつら」を演った頃ですね。で、最初、「なんでこんな所で口が合うんだろう」と（笑）思ってて。だから、あれは本当に「習うより慣れろ」っていうのが早かったんでしょうね。

［アニメ界の作品］

ハヤトの前までに演った作品についてですけど、私としてはトンチンカンが一番記憶に残っているのですが。私が金丸さんの名前を最初に知ったのがトンチンカンで、それは僕の個人的意見なんですが、金丸さん御自身としては、今まで演ったキャラクターで思い出が残っているとか、思い入れがあるとかいうのはありますか。

金丸　僕はみんなキャラクター自体は大好きなんですけれども、凄く勉強になったっていうのはつるぴかハゲ丸君かなあ。本当に、台本にはちょっとしか書いてなくて、あとはアドリブで作らなきゃならないっていう世界なんですよ。それで、ハゲ丸のおとうちゃん役で共演してた緒方賢一さんに、もう凄く絞られまして。それが一番いい勉強になりましたね。途中で主役の人が替わるっていう凄くショッキングな事件もあったんですけど。ギャグ物って最初は「やだなあ」と思ってたんですよ。「ギャグ物って苦手だなあ、出来ないなあ」って。演って最初は合わせるのが大変だったんですけど、ボルテージが上がって、ノって来ると、それが面白いというか。だから、そういう意味では、アドリブの面白さとか、呼吸の大切さとか勉強になりますよねえ。見てる方としては、テンポが良くないとあんまり面白くないじゃないですか、ああいうギャグって。だからあれが一番良かったかなあって。結構インパクトも強かったですしね。

一番話題になったのが、さんまさんの息子さんが「つるぴかハゲ丸君になりたい」

とか言った事ですか。だから、あれは僕としては結構印象に残っているかなあって。でも、他の事もみんな覚えてますよ、そのときの光景とか。再放送なんかたまにやってると「あったあった、こういうのが」という感じで、スタジオの中の風景とか思い出しますけど。

ハゲ丸君の他には何かありますか。

金丸　やっぱり、一番初めにアフレコとしてマイクに向かった「うる星やつら」ですね。失敗談がありましてね。僕は「生徒1」だったんですけど、駆けて来て、「ああ、お腹空いたね。」って言うのをやって。で、マイクの前で本当に駆け足をしてしまった。この大きい体だから、監督の斯波さんが「金丸君。声だけでいいから。身体はいいんだよ。」って。（笑）で、今考えると本当に先輩に恵まれてるなって思うのは、古川登志夫さんとか神谷明さんとか千葉繁さんとか、みんなに凄く大事にしてもらっちゃって。神谷さんが体を押えて「このままでいい、大丈夫だ」って。（笑）

でも、そこでいい人に巡り合えて、今みんな第一線で活躍している人達に大事にして貰えたんですね。考えてみたら、今は土曜のフジテレビのアニメは夕方に移っちゃいましたけど、僕は、土曜の七時台っていうゴールデンタイムに、「ハイスクール奇面組」「ついでにトンチンカン」「名門第三野球部」と延べ4年半か5年位レギュラーでいたんですよ。

ニュージャパンスタジオでですか。

金丸　そうです。それが結構ラッキーだったかなって。考えたら、あの移り変わりの中にいたのは唯一僕だけなんです。

ずっと斯波さんですか。

金丸　いや、斯波さんから山崎さんに移って。

ずっと同じ時間帯っていうのは貴重ですね。番組が代わっても。

金丸　そうですね。「そういえば、金丸君だけなんだよな。」ってこの前ニュージャパンの方がおっしゃって。どれも本当に印象に残っています。

今のレギュラーは「ママは小学4年生」ですよね。マリオ役で。

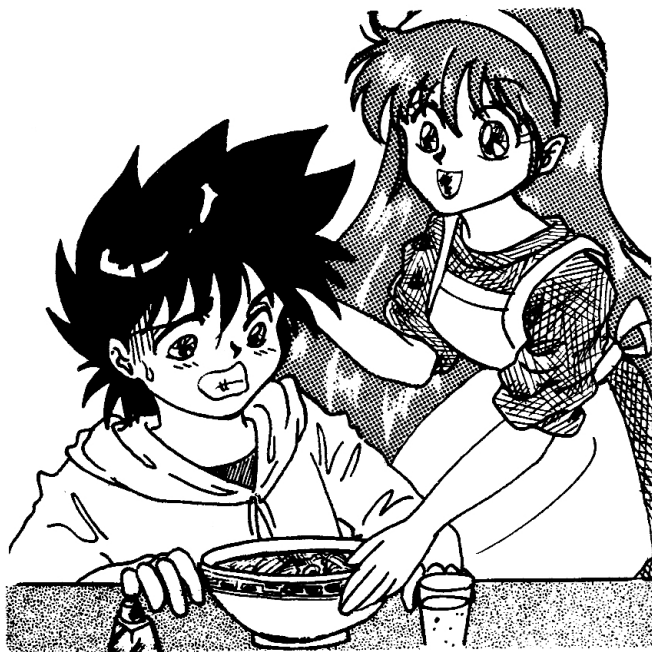
金丸　あの役も作るのは大変でしたね。とにかく、日本語を喋ってるけどスピリットは日本人じゃない。地中海型の陽気な感覚で言ってくれって。泣き叫ぶときも笑うときも、それから愛情表現もぜーんぶ海洋型で。ヨーロピアンで地中海のさんさんとした感じでいてくれって。結構大変な思いをしたんです。仲間に言わせると「金丸君だからできるんだよ。」って。（笑）

でも、はまってますね。

金丸　ええ、そうですね。あと、ブッシュベイビーなんかは、外人ものなんですけれども、割と、やっぱりちょっとかげりのある14歳というか。作り始めるときに一番苦労しますけども、その甲斐がありますよね。なんて言うんでしょう、まだ心が出来上がってない、思春期の男の子。

「おーい！竜馬」については。

金丸　竜馬については、最初NHKのオー

声優インタビュー

デイションがあった時に、僕は土佐の出身ではないんですが、昔、朝の番組で土佐弁を使っている番組があって。たまたま、結構良く観ていたので、そんなに違和感が無かったんですよ。で、土佐弁で喋るシーンがあった時に、NHKの人が、「四国の出身なんですか。」って。「いえ、違います。」「土佐弁御上手ですね。」（笑）とか言って。何か、それで採って貰ったっていうのがあって。（笑）それで、顔の雰囲気とかで、「じゃあ、金丸さんは板垣退介お願いします。」という事で。（笑）

　顔の雰囲気、ですか。

金丸　なんなんだろう。（笑）少年時代は乾退介っていうんですが、乾退介をみてると「顔とか似てるね」とか言われちゃって。（笑）ただ、退介は、少年時代は、土佐弁もちょっと喋ったんですけど、上士、郷士とあって、上士は標準語を喋るんですよ。僕はそれで救われたかなって。結構面白いですよ、ああいう時代劇物もね。

　「フランダースの犬」にもゲストで出たんですよ。山田監督なんですが、洋画でよく使って貰っていて。本当に一言二言位で、殆ど林原めぐみちゃんとダベリングをして帰って来て（笑）

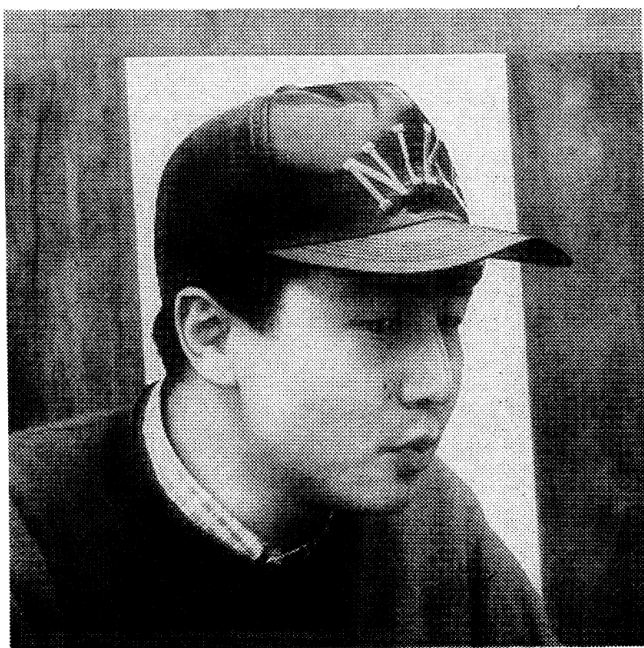
　メグは「チンプイ」で一緒だったんですよ。あの時僕は小政というスネ夫タイプの声を演っていて。ガキ大将の太鼓持ちみたいな感じで。ガキ大将は中村大樹君が演っていたのかな。ジャイアンみたいな奴とスネ夫の様な奴と。（笑）チンプイは、鼠だったけど。でも結構面白かったですね、あれは。

　やっぱり少年役が多いですか。

金丸　多いですね。ただ、声の世界って独特で、声何如に関わらず、例えば、物凄く太った役や、年取った役もまわって来たり、「通行人Aをダブリでやって」って言われたり。でも、やっぱりさすがにピアノがコントラバスの音を出せないのと同様に、無理なものも多々有って。ただ、色々な物に挑戦したいな…とは思っています。でも、本当に、この声からすると、十代の声が多いですね。よく言うんですよ、「それサギだよ」って。（笑）青少年をだます所が。

　男性の方で十代の役って、他は余りないですよね。

金丸　そうですね。設定は十代でも声や芝居がやたら大人びちゃって、それが普通になっちゃうのが、僕はどうしても許せない所があって。だから、実年齢が近い人がや

声優インタビュー

るか、本当に凄く自然に聞こえる様な感じでやらなきゃって思うんです。だから、そういうアニメーションはやって行きたいですね。やっぱり、名作劇場とか、ああいう名作物っていいですよね。凄く芝居がしっかりしてないと出来ないでしょ。そういった意味で自分にプラスになるかなっていうのがあって。サイバーなんかも本当にそうですよね。一見ロボット物、メカ物という分野に入りそうなんだけど、良く観ると凄く人間ドラマが有って。ああいった所が魅力の秘訣なのかな、と思いますし。

　話の内容が厚いものをやっていきたいのと同時に、はげ丸君みたいな、ギャグの凄い軽いノリも一方では要求される所もあります。新条役の緑川光君が、「南国少年パプワ君」のシンタロー役を演っているんですが、電話で相談して来て。今迄割とシリアスな役が多かったのに、いきなり、パパパパッと喋る掛け合いとかがあって、「難しいですよね」とか言っていて。

　芸暦はかなり長いですか。

金丸　やっと、7、8年位になるのかな。

　「うる星やつら」はかなり前ですからね。

金丸　そうですね。でも、僕が出始めた頃ってもう終りに近かったのかな、きっと。考えてみたら、恵まれていたのかも。主役こそ今回が初めてだったんですが、主役よりも、バイ・プレーヤーとして頑張っている方が、凄く面白いし、役も沢山作り易いですよね。だから、そういった意味で好きなんですけど。だから、良い作品に出させて貰ってよかったなあ、と思っています。

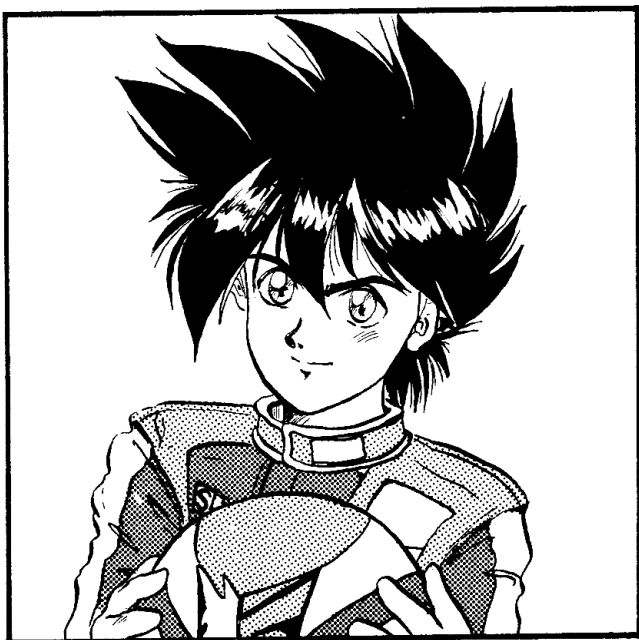
[サイバーフォーミュラ]

　サイバーフォーミュラについて御伺いしたいのですが、ハヤト役を演る様になった経緯というのは。オーディションですか。

金丸　そうですね。声の仕事っていうのは、割と理路整然としていて、ずっと今迄主役を演って来たから引続き主役、という事はなくて。サイバーはテープ審査だったんですよ。全部がテープ審査で、公平な立場で聞いて貰って。あの時間帯のサンライズの主役っていうのは女性の声優って相場が決っていて、男の子のキャラクターでも割と女の人が多くて。だから、最初は女の方が演るって事だったらしいですね。ただ、14歳で、変声期でもあるし、ギリギリの所だからどうだろうって事で、その時たままま僕が受けてみたら、「じゃあ、その声でいきましょう。」という事で。「あまり作らないでいいから、そのままでいいよ」という事だったんですよ。だから、殆ど地声で演ってますね。

　今聞いていますと、地声の方がちょっと低いかな、という感じがしますが。

金丸　そうですね、御芝居演っている時とは、どうしてもテンションの違いが有るんじゃないかな、と思うんですけど。

　特に作ろうとして演っている訳ではない、と。

声優インタビュー

金丸　そうですね。ただ、全然作らないでいると、役者じゃなくなっちゃうんで。それから、本当に、１４歳なりの色々なリアクションとかを頭に入れて、凄く自然に演ろうと思ったんです。僕、デフォルメして演るのが、凄く嫌いなんですよ。ギャグ物、ハゲ丸君とか、とんちんかんとか、ああいう感じの物だったら話は別ですけど、割とナチュラルな芝居を要求される物って最近凄く増えてるんですよ。そういった意味で、今演っている「ブッシュベイビー」なんかも監督さんがサイバーと同じ方なんですけれども、「ああいう、本当に自然な芝居が出来るっていうのが大切だよ。」ってよく僕達出演者に仰ってるんで、それがきっと、年齢制限無く、割と広い年齢層の人達に愛されている要因なのかなあ、とも思うんですけどね。子供でも、結構自然な感じでやろうかなあ、と思って。そんな感じでテープ審査で決まったんです。

　特に最近、女の子達の間で急にサイバーの人気が上がってきて。ビデオでも又出ていらっしゃいますね。

金丸　そうですね。最初の頃は、やっぱりレース物だから男の子達のファンが凄く多くて、まあ今でもそうなんですけど、それ以上に女の人のファンが多くって。

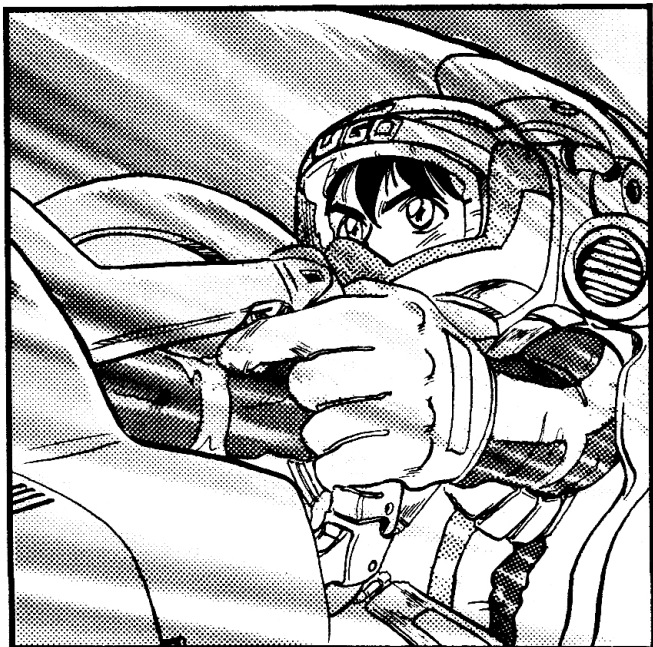
　御自分ではこういうのを予想していらっしゃいましたか。

金丸　いやいや。ただ、作り方としては凄く面白いな、て思ったんです。何か、みんなが主役みたいな感じですよね、キャラクターを大事に作っていて。きっとそういった所も要因じゃないでしょうかねえ。あと、男だけの、女の子が入って行けない様な、そういう世界に、きっと女の子が憧れるじゃないかって。ミキ役の安達忍ちゃんもそんな事を言っていたんですけど、成程なあってうなずけますよね。

［サイバーのＣＤ］

　作品だけでなく、かなり音楽的なＣＤが出ていますよね。ああいう方向は、人気が出たから作った、とかいうのではなく、最初からああいう風に、歌でいこうという事だったのですか。

金丸　実は、サイバーは、始まってしばらくしてからうちわでパーティーがあったんですよ、「これからみんなで頑張って行こう」って。その時、みんなでカラオケを歌いに行ったら「なかなか歌えるじゃないか」「じゃあＣＤを出そうよ」って事で。（笑）だから、結構歌心がある人が多かった、という事もあるし、僕は僕で、元々、歌は出そうかな、と考えていた時に、たまたまサイバーがあって、作家の方も凄くいい方で揃ってたんですよね。だから、「じゃあ、こういう曲だったら歌いたい。」っていう事で。ビックリしました、オリコン初登場１７位！で、その下がチャゲアスだった。「え？チャゲアスを追い越した？」って。（笑）アニメーション関係のＣＤって近年稀にセールスが良いんだそうです。ただ、「売れたから良い、売れなかったから悪い」と

声優インタビュー

一概には言えないらしくって。売れるにこした事はないんですけど、本当に良い歌を歌って行きたいなって思ってます。結構僕があちこちのイベント会場で歌ったりプロモーションしたりしているという事もあるんじゃないか、とも言われたんですが、ただのアニメの歌じゃなくて、本当に自分の歌として、振付けも考えて貰ったり、衣装もしっかりした物をコーディネートして貰ったりしたので、そういった意味では凄く恵まれているな、と思いました。

　私もアレーナホールに行かせて頂いて、非常に良かったので、「これからああいう方向性で行かれるのかな、アニメだけじゃないな、」と思いまして。

金丸　元々あの企画は、アニメの枠を離れて、アーティスト感覚で行く、という事で。段々変わって行ければいいですね、きっと変わりつつあるんじゃないかと思うんですが。今、アイドルが冬の時代で、それでレコード会社も、とにかく声優が売れ筋だっていうのがあって。ブームに便乗するのは嫌なんだけどね。

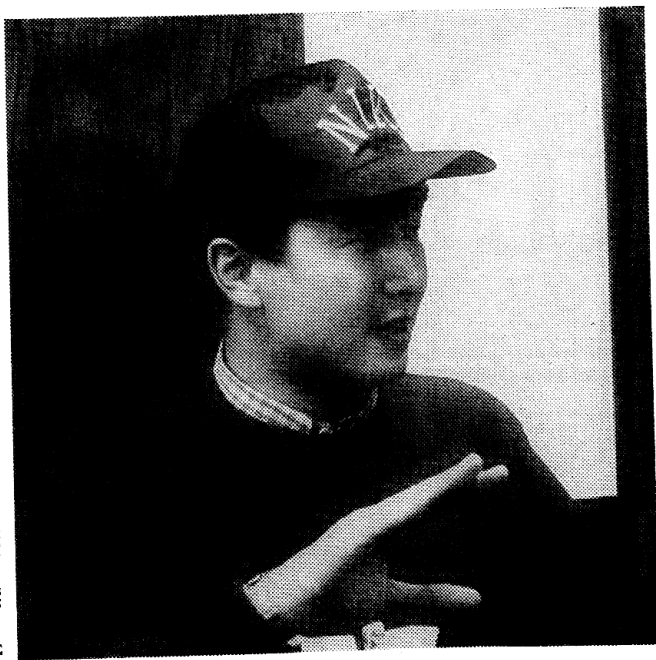
　CDだと、ハヤト以外のキャラは、本編とは少し違ってギャグで売ってる感じがありますよね、ナイトシューマッハの速水奨さんとか。でも、ハヤトはまず崩れないですよね。

金丸　あれは監督の「ハヤトだけは崩れない」という思い入れがあるらしいですよ。(笑)そういう事もやってみよう、という話はあるみたいですけど。あと、同人誌のノリで男と男がくっつくみたいな感じの物をちょっと面白くやってみようか、というのも。一応ファンの欲求もそれで少しは満たして上げよう、という事で。ただ、やり過ぎるとイメージが崩れるんじゃないかって心配する声もあったんですけど、CDはCD、本編は本編と、今の子はちゃんと区別してくれているから大丈夫だって思っています。だから、お遊びとして、「もしも」という想定で何かCDを作ったら面白いんじゃないかって。まあ、中にはそうでない人もいて、「シューマッハはあんな三枚目じゃない」とか手紙が殺到してるらしいですよ。(笑)

　速水さんが最初結構嫌がっちゃって。「イメージ変えちゃうと悪いんじゃないかなあ」って。でも、ある日「どうせやるなら中途半端でなく徹底的に面白くやっちゃった方が絶対いい」って。そうしたから結構人気が出て。ハヤトも面白いのがあったらやってみたいな、と思っているんですが。(笑)僕、基本的にギャグも嫌いではないので。

　あと、イベントでも、いつも僕達が一方的にやるんじゃ無くって、会場で何人かピックアップしてアフレコ大会とかやったら面白いんじゃないかなあ。男の子を呼んだら琴乃ちゃんの相手でハヤト役とか、女の子だったら、あすか役で、とか。自主的に色々やってみようかな、という話をしています。「大学を回るのも面白いかもしれないねえ」って。(笑)

　御自分でラジオ番組を持ちたい、と

声優インタビュー

いう事はありませんか。

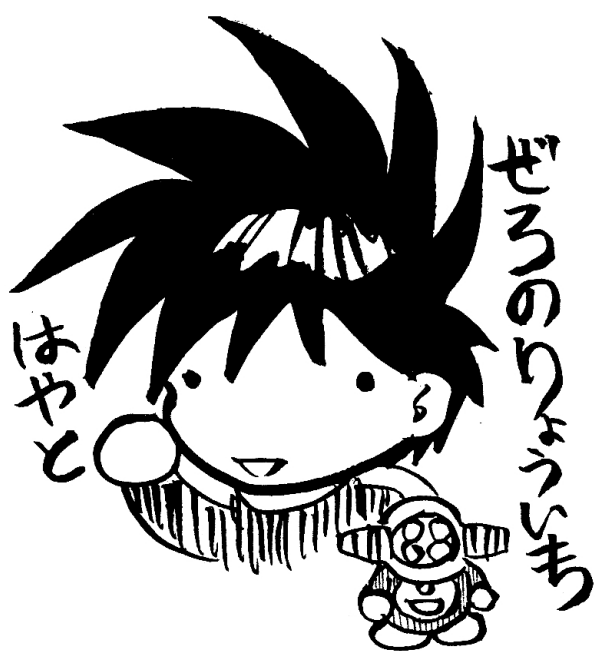
金丸　話は良く来るんですが。ただ、ラジオ番組を持っちゃうと絶対一週間に一回はそこに必ず出なきゃいけないでしょ。僕は年に何回かは日本を出たい方なので。（笑）ちょっとエネルギーを補給したいっていう単純な理由があって。今、レギュラーが4本近くあって全然東京を離れられないんで、「ラジオはちょっと…」って思うんですね。今の所はまだ考えてないんですが。でも、もしかしたら、その内、持たせてもらうのかもしれませんけど。

ファンとしては「是非とも」って感じですよね。これから、声優としてでも、歌手としてでもいいですが、金丸淳一が、こうして行きたい、という方向は。

金丸　元々、僕は、声の仕事よりも、歌の方が長いんです。両親がアマのジャズバンドをやっていて。サイバーが元で歌が出せる事になったんですけど、今後はもうちょっと歌を広げて行きたいです。だから、スタンダードジャズとか歌う機会があったら実現させてみたいなあ、と思っています。

これからは、どんどん良いアニメーションをやっていきたいし、歌もやっていきたいし、うちの事務所は外画系列なので、外画もやっていこうかなって。この前「わんぱく戦争」という、モノクロのフランス映画の主役をやったんですが、結構面白くて泣かせる映画なので、そういう外画なんかももっとやっていきたいですね。あんまり声優としてだけクローズアップされるよりも、本当に思い出に残る様な良いアニメーションに参加していく…という姿勢で行きたいです。

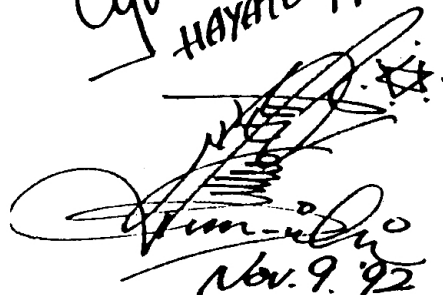
小さい子が観ていて「あの番組は良かったね」と言われる様な。

金丸　そうですね、何年経っても「あれは良かった」とか「良く覚えてる」とか言ってくれる様な、そういうアニメーション作りを一緒にして行きたいと思ってます。

本日はどうも有難う御座居ました。

ぜろのりょういち
はやと

PROFILE

金丸　淳一

本名　　同じ
誕生日　１０月２７日
所属　　同人舎プロダクション
＜主要キャラクター＞
１９８７年　ＴＶ　『ついでにとんちんかん』珍平
　　８８年　ＴＶ　『つるぴかハゲ丸くん』近藤
　　８９年　ＴＶ　『チンプイ』小政
　　９１年　ＴＶ　『サイバーフォーミュラ』風見ハヤト
　　９２年　ＴＶ　『おーい！竜馬』乾（板垣）退助
　　　　　　ＴＶ　『ママは小学４年生』マリオ
　　　　　　ＴＶ　『ブッシュベイビー』ジャッキーの兄
　　９４年　ＴＶ　『ママレードボーイ』須王銀太
　　９５年　ＴＶ　『魔法騎士レイアース』ザズ・トルク

最近流行りの、バイリンガル声優の先駆者であり、第一人者でもある。某英会話学校で講師をなさっており、声優業と二束のわらじを履いている。

早ア同さんへ
CyberFormula
HAYATO-17
Nov. 9. '92

声優がいっぱい
—その2—
銀河英雄伝説

男性声優の豪華版というと、ＯＶＡであるが、『銀河英雄伝説』であろう。

メインキャラクターだけを拾ってみても、ラインハルトの帝国側が堀川亮、森功至、若本規夫、塩沢兼人、水島裕宇等々、ヤンの同盟側が富山敬、佐々木望、古川登志夫、羽佐間道夫、井上和彦、納谷悟郎等々、ベテランのラインアップを見ると、まるで八〇年代初頭の作品を見るようだ。

が、この作品のすごいのは、端役がまた豪華なことである。

前述の『シティーハンター』の主人公、天心爛漫（？）スケベヒーローの役をやっていた神谷明が、どちらかというと嫌われ役の情報将校役をやっている。が、準レギュラーで出ているだけまだましで、出番もあまりなく爆死する山寺宏一、病人役の三ツ矢雄二、狂人役の古谷徹など、豪華というよりもったいないというべきキャスティングが、これまた数えきれない。（第三期の古谷徹は、唸り声少々と「なぜだぁ」というセリフ一つで終わり。もったいなさすぎる！）

数少ない女性キャラクターにしても、潘恵子、勝生真砂子、榊原良子、山本百合子等、やはり芸達者が多い。特にフェザーンの領主とその愛人の、小林清志と平野文の絡みは、洋画でもなかなかお目にかかれないない燻し銀のとりあわせといえよう。

絡みといえば、小山芙美と田中秀幸。富山敬と微妙な関係で絡む役どころで出演しているが、第一期の最初の方で死んでしまう。物語展開上しかたないとはいえもったいない。

他のレギュラーからゲストまでざっとみても、キートン山田・青野武・鈴置洋孝・屋良有作・柴田秀勝・大木民夫・阪修・速水奨・仁内建之・永井一郎・堀勝之祐・田中亮一・家弓家正・肝付兼太・富田耕生・大塚明夫・安原義人…、書き出すときりが無い。

そういえば、第一期を見返していると、帝国宰相の老貴族役で宮内幸平が出ていた。味のあるじい様役の多かった、今は亡き名声優の冥福を祈り、合掌。

話は少しずれるが、ＯＶＡ『ジャイアントロボ』の最初のアフレコの時、主人公役の山口勝平が、スタジオに集まった豪華なベテラン声優陣に驚いて、唯一面識のあった島本須美に「すごい人ばっかし、どうしよう」と泣きついた、というエピソードがある。

これは想像だが、『Ｇロボ』以上にベテラン声優の揃った『銀河英雄伝説』でも、若手の声優、例えば佐々木望や三石琴乃などは、初めてのアフレコのときに「Ｇロボの山口勝平」状態を味わったのでは——とも思う。

第三期に入ると、檜山修之など今売出中の若手も出てくるようになった。一方で物語も終盤になり、ヤンを始め主だったキャラクターが次々と死んでいく局面を迎え、物語同様声優陣にも寂寥の感が強くなっている。

ま、ＴＶシリーズでは、製作費の関係上なかなかこんな贅沢なキャスティングはできないので、その点でも『銀河英雄伝説』はおもしろいのである。

（邦）

［略歴］

昔、ムーミンの歌をお歌いになっていたそうですが。
玉川　歌ってました。レコードだけですけど。レコード大賞で昔童謡賞ってあったんですよ。それで私賞を頂いちゃって。大晦日にあの舞台に立ったんですよ。
小学校入学と同時に児童劇団に入りました。歌の仕事もその関係でやってたんです。

では、芸歴はずっと長いですね。
玉川　「掘れば出るぞ」という感じ（笑）
ムーミンを歌っていらっしゃったので驚いていたのですが。
玉川　コマーシャルソングとかも結構昔は歌ってたんですよ。
歌だけでなく、お芝居とかもやっていらっしゃったのですか。
玉川　ええ、”その他大勢”とかね。それと、「少年ドラマシリーズ」って昔NHKでありましたよね。それとかをやっていたんです。だから、「少年ドラマシリーズ」の”通”の方は、ひょんな事で結構知ってらしたりするんですよね。「その街を消せ」っていうのと「巣立つ日まで」

声優インタビュー

っていうのと。あとはずっと昔のなんですけどね。

でも、中学からは私立に通っていたので、あんまり表だって活動が出来なくなっちゃって。それに、歯を矯正してたりしてたので、やっぱり画面には出なくって。だからその関係で声の方に自然に移っていったんですね。

だから、声の仕事を始めたのがいつ頃かっていうのは、なんかスライドしててよく分からないんですよ。洋画の吹き替えが最初でしたね。子供が「わー！」とか「お母さーん」とか、そういう一言しかしゃべらない役もやっていたらしくて。それでマイクの前に立つ意識もないままに。アニメをテレビシリーズでやり始めたのは最近なんですよ。

アニメのデビューがいつ頃かもよく覚えていないんですよ。「鉄腕アトム」のリメイク版かな、とか思っているんですが。あと、「冒険コロボックル」とかも、共演者を覚えているので、やったんじゃないかな、という気がします。「フーセンのドラ太郎」はレギュラーだったので多分やったんじゃないかな。よくわからないんですよ。フェイド・アウトって事で。(笑)

最近で大きな役柄というと、「ラムネ」「あげだま」「フリーキック」等ですね。

玉川　そうですね。この流れを作ったのは、やっぱり「ラムネ」ですね。キングレコードということで。歌もしばらく休んでて、また歌わせてもらったのは「ラムネ」だったんじゃないかな。その前に「オラトリオスケープ」のイメージアルバムで一曲歌わせてもらったのが最初かな。キングレコードの大月俊倫さんがそのドラマシリーズを見ていて、私の事を知ってらしたんですよ。それで何か話しやすかったみたいで。でも大月さんには本当に感謝してます。

[バーストマン]

「バーストマン」に創立時から所属していらっしゃるそうですが。どういう経緯でお入りになったのですか。

玉川　7、8年前になるかなあ。児童劇団の「こまどり」っていう所で、冨永み～ながそのお芝居に出る事になっていて、それで冨永と一緒に出ている人が、どうも仕事の都合でダブルキャストしなくちゃならないっていうので。それで「こまどり」の先生のターバン西村さんが声をかけてくださって。そのお芝居をやったらとっても楽しかったんで、その流れで、「じゃあ、このメンツでお芝居をやろう」って事になったんですよ。

歌をやりたい人もいれば、お芝居をやりたい人もいて、いろんな人がいたので、ライブもやったり、コントもやったり、普通のお芝居もやったりという、とらわれない劇団でした。千葉さんはビジュアルをやりたかったから、ゆくゆくは映画をとりたいとか思っていらしたようです。

声優インタビュー

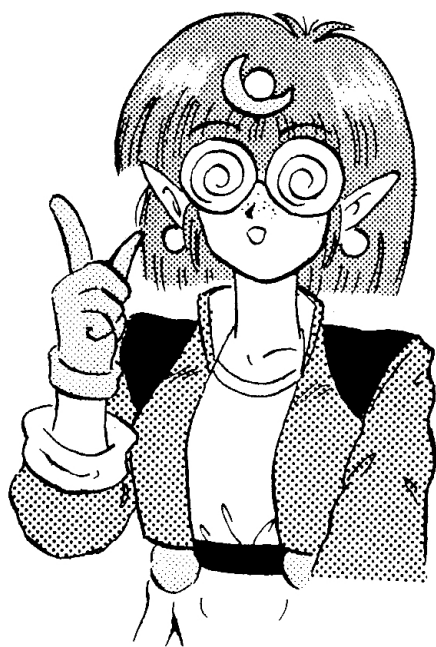
私は、去年の夏の「ツインピーチク」っていうお芝居を最後に、一応やめたんですよ。でも、定期的にはやらないっていうだけで、やりたくなったらやるんですが。自分の中で区切りをつけたかったんですよ。何かこうだらだらさせるのはいけないって思って。

［ラムネ&40］

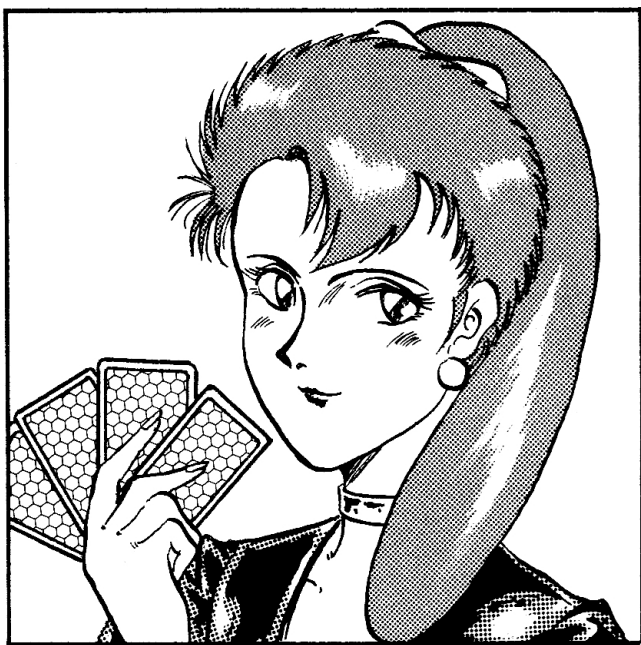
「ラムネ」についてですが、前半と後半では随分ガラリと演技が変わっているなと思ったのですが。最初は普通に喋ってらして、途中からあの間延びした調子に変わっていったような印象がするのですが、意図的なものだったのですか。

セリフと絵の人達のみんなの考えだと思うんですよ。「これを、この尺に合わせて」っていうことで、「これ、セリフ足して下さいよ」って言ったんですけど、「それでいきましょう」って。みんな模索しながら、育っていったと、やってる本人達もみんな感じてて。途中でOPが変わったんですが、あれを機会にみんな何故かしら力を持ち始めたっていうか。段々エスカレートして、最後の方は「これでもか」っていう感じで。

私だけの考えじゃなくて、何かトータル的な動きだった気がするんですよね。ココアはやっぱり、こういう感じを強く突出させていかせたっていうか。やっぱり、やっててしっくりいきだしたのもその頃からじゃないかなあと思います。

最初にどういうココアをやるのか、大体のコンセプトを決める時に、私は、お笑いの色が強いのかなって思ったんです。グルグルメガネだったし、お嬢様なんだけど、なんか変だぞっていう。今でも変なんですけど（笑）それはやっぱり音響監督さんが、あの、もう少しかわいらしい感じのとぼけた感じがいいって考えてああなっちゃったんですけどね。

オーディションはなく、直接お話が来たんですよ。キャスティングをして下さった方が、何かそういうイメージだったみたいで。私も意外だったし、まわりもみんな「へっ?」っていう感じだったので、逆にすごく新鮮で、今までにない物が出来たんじゃないかなって気がします。それまでは、「エリア８８」の涼子ですとか、「ルーシー」のクララの様に、お姉さまタイプというか、長女とか、そういう感じの役が多かったですよね。あのイメージがあったものですから、私だという事が全然わかってもらえなかったんですよ。かなりガラリと変わって。今でも、林原かなんかに「わかりませんでしたよ、あれは」とか言われて。（笑）でも同業者の人から、「良かったよ、あれは」って言われると嬉しいですね。

考えてやったというよりも、口をついて先に出てしまったというか。タイミングの問題とかね。あれ以来、思考が変わって来たと思います。あかほりさんが「ラムネ」の文庫本を出してて、そのあとが

声優インタビュー

きを書かせてもらった時に触れたんですが、「笑われるのが楽しい」って気づき始めたのはあれのおかげじゃないかしら。それまでは、とてもそんな回路は無かったんです。バーストマンとかやっているくせに何を言う、って言われちゃいそうですけど。(笑)なんかおかしいなと思いつつ、魅かれてはいたんですけど、なんか、カチッとハマッたぞ、というのがありますね。

［あげだま］

玉川　「ココア」がなかったら「九鬼麗」は無かったかもしれない。

「ラムネ」を見て、その後で「あげだま」を見て、全然分からなかったんですよ。ああいう、九鬼麗の演技というのは、どの様になさったのですか。

玉川　あれも、第一話はあんな笑い方はしてなくて。とにかく「テンションを上げてくれ」って言われて。あれもオーディションは無かったですね。

「やりなさい」って言われているような流れを感じずにはいられないんです。段々みんなとも馴れてきたし、音響監督さんが「とにかく自由にやってくれ」ということだったので。「自由に」って言われても自由の定義が各々違いますよね。「こんなに?」「もうちょっと?」「え?これもいいの?」っていう感じでどんどんエスカレートさせてもらって。あれはやっぱりのびのびさせてもらったたまものだと思いますね。

林原さんが最後の方に出てきて、自分の本役以外に、校内放送をダブリでやったのね。その時に、なんでもありだから、「バカボンでやりなよ、バカボンで」(笑)「(バカボンの声で)校内の皆様」ってやって、最後に「これでいいの、パパ?」っていうの、やっちゃいなよ、て言って。林原さんは、「え?いいの?」と言ってたんですが、その日初めて来たのでわからないし、佐々木望も「やっちゃえやっちゃえ」とか言っていたので、本番にやったんですよ。そうしたら音響監督さんに「それはちょっと」と言われて。(笑)みんなも「本当にやるとは思わなかった」って。私は採用になると思ってたんですけど。そのくらいくだけた雰囲気で。

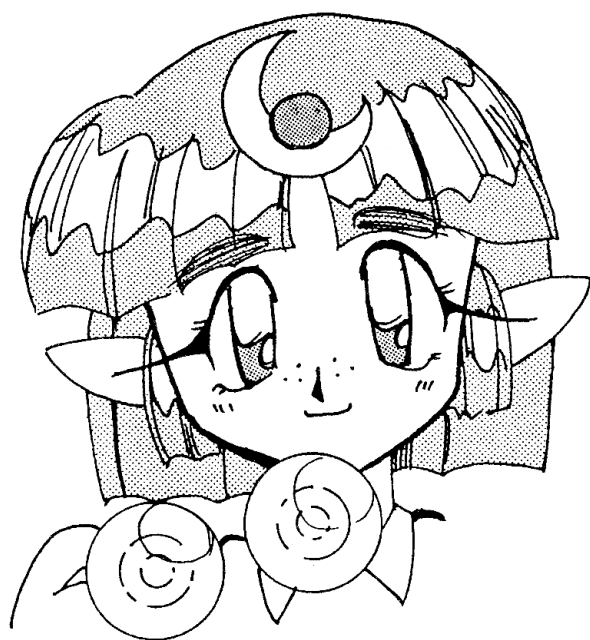
色々な方の発想の面白さとエネルギーにみんなのせられて来ちゃった感じです。そういう意味では「ラムネ」と似たような経緯をたどってますが、もっと激しくて。「ラムネ」は各々のキャラクターのアクの強さの戦いで、「こう来る!?」っていう感じで(笑)、それに対して「あげだま」は個々というより全体の和という感じがします。

麗様が超うけまくっていた感じがしていましたが。

玉川　そうですか。(笑)

後期EDにも驚いたのですが。あれは一度聴くと病みつきになってしまいます。

声優インタビュー

玉川　（笑）自分でも気に入っているんです。でも、風邪で体調が良くなくて、あんまり歌えなかったんです。凄く危ない橋を渡ったんですけど、それが良かったみたいで。アドリブってセリフの所も全くのアドリブで、最後の「救急車来ました」っていうのも高木渉のアドリブで。それにちゃんと絵を合わせて貰って。「いいの？救急車？」って思いました。（笑）
　最後の方は内容がシリアスになってきたんですが、その中でも、のびのびとしていて、どうやって遊ぶか考えてましたね。

[おにいさまへ…]

　「おにいさまへ…」は凄く話題になりましたが。衛星放送にしちゃってもったいないですね。
玉川　原作をマーガレットで連載時に読んでいて、やっぱりナナ子よりもマリ子が印象深くて。だからマリ子をやれて嬉しかったですね。
　共演の方が、小山茉美さん、島本須美さん、戸田恵子さん、鈴木弘子さん…外画のゴールデンタイムの様な顔ぶれで。だから、そういう空気に触れているだけで刺激された感じでした。それに、笠原弘子ちゃんは「こまどり」で後輩だったし。だから最近作品に恵まれているなって凄く思います。
　マリ子の役は凄かったですね。みんなで「マリちゃんたらあ」っていう（笑）
　　口にするのも恥ずかしい。（笑）原作を読んでらしたという事は、そんなに抵抗は無かったという事ですか。
玉川　そうですね。でも、「本当にアニメでここまでやるんだなあ」って思って。だけど、出崎さんが凄く綺麗にやって下さって。ただ、アフレコに絵が間に合わない時があって、それが少し残念です。
　お風呂場でのからみとか。（笑）あれはやっていてどう思ってらっしゃるのかな、と。（笑）
玉川　絵は全然無いですよ。だから、イマジネーションの世界で。だから探るのに精一杯で。それもへのへのもへじの様なマリ子とナナ子で。でも、普通のみんなとなかなか出来ない世界なんで面白かったですね。マリ子一人が声を張り上げて、後はみんな淡淡と…狂乱して。（笑）
　男の方があまりいらっしゃらなくて。凄く珍しいんですよ。堀内賢雄さんとか玄田哲章さんとかがたまに一人でいらっしゃると、居場所が無いって感じで。「もう帰ろうかな」ってそわそわしちゃって、「いいじゃないですか、こんなチャンス滅多にないんですから」って言うと、「いやあ、やっぱり居にくいよ」って。

[フリーキック]

　「フリーキック」で香苗さんをやっていらっしゃったんですが、打ち切りになっちゃいましたね。（注・東京では放

声優インタビュー

映が途中で打ち切られた）あれについてはどうお考えですか。

玉川　上の方では色々な思惑があって、きっと難しい事がからんでるんでしょうね。色々賛否両論ありますが、ああいうものを作りたかったアミノテツローさんの気持ちが凄くよく分かるんですよ。何ごともなく淡々と過ぎていく、汗をかかない、爽やかな、ああいう世界をもっと普通に受け入れられる時代が早く来ればなあって気がします。だから、今の時代には合わなかったことはしょうがないかもしれないけど、一石を投じたと思います。Ｊリーグも始まったという事で狙っていたんでしょうけどね。アニメーションに望むものっていう既成概念があるのかしら。

　やはりスポンサーサイドの問題があるのでしょうか。確かに、殆ど３０分エピソードが無くて、淡淡と、という回があったんですが、私はあれはあれで凄くいいなと思っていたのですが。

玉川　観終わった後、「へ?」っていう。（笑）フランス映画でもあるように、聴いているだけで「あ、いいな」って思うような、役者としても存在感がもっと出せたら良かったかなあと反省したりとかしますよ。

　もう全部録音は終わってまして、このまま淡々と最後までいっちゃうんですよ。謎は謎のまま、あの関係はあの関係のまま。何も解明されずに。

［歌について］

　アニメーションから派生して、キングレコードが結構多いですが、歌をお歌いになっていらっしゃいますね。歌を歌う事に対してどういう考えをお持ちなのか、今後どういう活動をしていきたいかをお聞きしたいのですが。

玉川　歌は、凄く好き！　昔子どもの頃歌っていた時はそんなに思っていなかったんですが、一回歌わない時期があって、その後歌わせて貰うようになってそう感じる様になりました。

　レコーディングの時のスタジオが凄く好きなんですよ。「今夜は絶対カーニバル」っていうイベントの時も本番よりもリハーサルが凄く好きで、スタジオの中で本多知恵子さんとああでもない、こうでもないとか言ってて。あれは三人で歌っていたんですが、練習する時に、矢尾さんが見学に来て、あんまり楽しそうなんで「紗己子ちゃん別の世界に行っちゃってる」って言われました。（笑）本番は、段取りとか立つ位置の制約があるので、イントレのガーンとかとぶつかっちゃったりとか色々あって入れなかったんですが。音楽は凄く好きですね。歌に限らず、人のライブのリハーサルとかを見るのも好きだし。

　でも、舞台でライブやコンサートをするのも好きですよ。一人で歌うのも好きですが、「艶姿渚娘」をイベントで林原さ

声優インタビュー

んと二人で歌ってても凄く楽しくて。浴衣着て、頭にぴよーんとした飾りをつけて。お客さんが受け入れてくれるって雰囲気で分かる時はやっぱり自分の力以上の物が出ている様な気がして。そういう瞬間は「幸せだな」って思いますね。だからライブも凄く好き。

[今後]

今後のご希望は。

玉川　好きな方向といいますか、その人らしいものっていうのがやはりいちばん強いと思うんですよ。だから、その時私が興味ある事をやって行きたいです。今凄く興味があるのは、SE、例えばせせらぎ、風の音、牛の声とかいった物と、音楽と、声とが、声だけ立つのでも、サウンドだけ立つのでもなく、一体化させる事なんです。今回出したCD「さよならの忘れもの」は、時間がなくて、なかなか突っ込んだり出来なかったんだけど、初めて出す自分のCDっていう事で、随分お話とかはしたんですよね。それで、曲と曲との間のものを書かせて貰って、そういう感じは何とか出ているんじゃないかって気に入ってはいるんですけれど。

歌がお上手なので、私共としては、ライブ等をどんどんして頂けたらなあと思うのですが。

玉川　ええ、やりたいですね。

[イメージ]

ジャンケンママの役、非常に気に入っていました。

玉川　お母さん役は、昔から結構ターゲットとしては力強くあったんですよ。子供心に「早くお母さん役やりたいな」って。ジャンケンママは、レギュラーものでは初めてだったので。

声質としては、お母さん役に十分と感じたのですが。

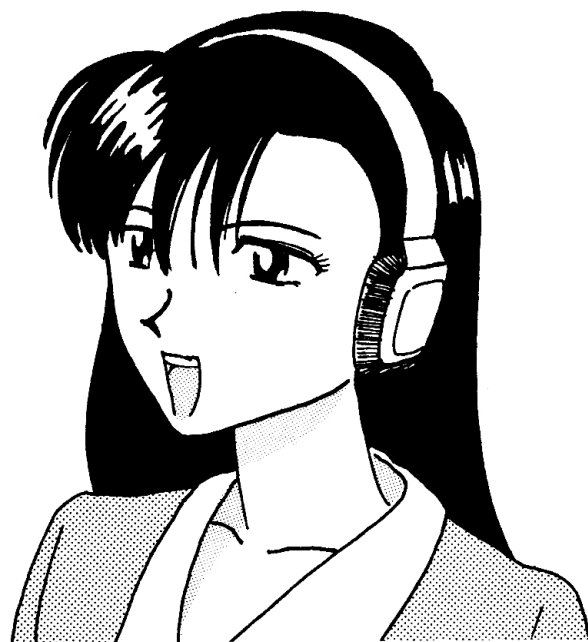
玉川　でも、お母さん役だけになっちゃうのもさみしいし。色々やるんですよ。色々な面があるじゃないですか、人間って。だから、全部、私は作っている気持ちはないんですよ。全部自分のなかで、「こういうシチュエーションだったらこうなるよな」っていう感じで。パーっとやったり、のんびりとやったり。だから、画一されて、イメージを固定されるのが一番嫌かな。でも、そういうイメージを自分で持っていなければ、他の人にも持たれないと思うんですけど。勝手にさせといて貰うのが一番嬉しいというか。

玉川さんの声は、とても印象に残る良い声なんですが、区別がつかないと言いますか、「え?これも玉川さんなの?」というイメージがあるのですが。ふわふわしていて、イメージが掴めなくて。普通なら、パッと声を聞くと「あ、あの声優さんだ」とすぐ分かるのですが、玉川さんだと、ワンテンポツーテンポ位遅れて「ああ、そうだな」って。今でも、

声優インタビュー

初めてキャラクターの声を聞いても一発で玉川さんだと分かるのは無いですね。
玉川　そう言われると凄く嬉しい。そういう世界が凄く好きかも知れない。洋画でも、声のイメージが強くて、それで引っ張って行くというやり方もあるけれど、私はやっぱり役者さんのイメージを一番大切にしたいです。それで、知らない所でプラスアルファ出来たらいいですね。わたしはそれが好きなんです。

他に印象に残っているのは「コール・ミー・トゥナイト」の夏見ルミ役なんです。色っぽい声で。ビデオの特典のカセットテープを聞いて、とろけてしまいました。(笑) その印象が強かったので、逆にココアとかびっくりしちゃって。夏見ルミとか、メロウリンクのルルシー等のちょっと謎めいた、色っぽい声という思い込みがあったんですよ。
玉川　ルルシーも、今やったら、また違う感じになるんじゃないかって気がします。

[趣味―ネパール―]

趣味であるとか、熱中していらっしゃるものは。
玉川　去年の暮れにPCエンジンを貰って、人間失格状態です。(笑) ドキュメンタリー番組を見るのが結構好きです。本では、銀色夏生さんのエッセイや、詩人の高村光太郎とかが好きですね。何でそういう詩を書いたのか、偉人伝といいますか、例えば宮沢賢治とか、その人に突っ込んだ物が。調べるのが嫌だから、それを調べた詳しい人の話を聞いて、後は自分で考えるとか、ボーッとしているのが好きなんです。

去年の暮れ、結構長くネパールへ観光に行ってきたんです。山を歩くのに、全然運動していなかったので、体力をつけようと思って、去年の暮れから、スタジオからスタジオまで歩く様にしてたんです。

都内だから歩けない事もないですね。
玉川　時間が空いたら、喫茶店でお茶を飲んでもいいんですが、歩いてみようかなって思って、歩いてみると、結構色々な発見があって面白くて。車と、自転車とは速さは違うし、歩くのだったらもっと違うでしょ。車でも、自転車でも気付かない様な物に気付いたりとか。自転車でしか分からない様な物もきっとあると思うし。そういうのが新鮮で面白くて、今でも時間があればやっています。だから、履く物がパンプスからスニーカーへ、ニューヨーカーの様に、「ちょっとこれアンバランスじゃないの」って感じる位に変わっちゃって。ネパールに行くって事で、同業者の方からも、「だめだよ、鍛えなきゃ」って言われて、歩いてないと、「だめじゃない、この靴じゃ。歩いてないでしょ」ってチェックが入って。みなさんの御協力をもとに。(笑)

声優インタビュー

レギュラーものは、迷惑掛けるといけないので、終わるのを一年前から決めて。ため録りして頂いたのもあったんですが。すごく良かったです。

海外旅行は、色々とされているのですか。

玉川　いえ。その前にアラスカへいったので、ネパールが二回目ですね。

アラスカ、ネパールと、玉川さん位の女性の方が行かれる様な所では、あまりないと思いますが。

玉川　そうですか？アラスカも、冬に行ったので、オーロラが見れて。そういう、綺麗な自然を見に行ったんです。

ネパールを転々としたんですが、エベレストを見に行った日が丁度満月で、夜中に頂上がくっきり見えて。夜だったので神々しいと言いますか、それよりもうちょっと恐い、「人間が入ってすいませんん」っていう感じがして。

人も凄く素朴で。高度によって人種が全く違うんですよ。だから山の方の人達は日本人に凄く感覚が近くて楽でしたね。普通にしていても放っておいてくれるし、何か尋ねたら気持ち良く答えてくれるし。

海外に限らず自然に触れているのが好きなんです。学生時代に北海道に二十日間一人旅をした時も、やっぱり、感覚的に、「いいな」って思ったのかもしれませんね。でも、東京生まれの東京育ちなんです。だからこそ余計に憧れるのかな。

やっぱり一か月離れると、行く前とは大事にする物が変わったような気がしますね。夜、電車に乗るとき、前に座った、疲れている青年とかを見ると、「ネパール行けば？」って感じがして。（笑）

だからこういう環境に凄く感謝してます。向こうで、仕事関係で来ている日本人と話したら、「そんなによく休めましたね」って。（笑）「こつ教えて下さいよ」って言われて、「まあ、人徳ですかぁ？」って言って。（笑）行かせて貰ったので、「良かったな」って思われる様にならなきゃなって思っているんですが、果たして、それは。（笑）

[交流]

仲の良い声優さんは。

玉川　深見梨加ちゃんとは凄い近所、スープの冷めない距離で。昨日カラオケに行ったのも彼女となんです。あとは、松井菜桜子さん、勝生真沙子さんは、会ったら話をする感じで、尊敬してるし、一緒にずっと居たいなって感覚に襲われる人です。林原めぐみとも楽しいし。佐々木望も共通項みたいな物がありますね。

[これから]

アニメーションに限らず、顔出しとかはなさらないのですか？

玉川　いやいや、とんでもない。

では、お芝居よりは、声の方に。

玉川　いえ、舞台とかはやりますが、あんまり、マスメディアに顔は、どっちかというと、のせたくない方かも知れません。気楽が一番。（笑）アイドルさんとか、大変だと思いますね。

声を出すのが好きなんです。歌も、セリフもそうなんですが、顔で表現するよりも、声や音といった物に興味があって、ビジュアルには余り興味がないのかもしれません。

これからの目標、チャレンジしたい事は。

玉川　気楽に、楽しく、来るものは拒まず、ふわふわしていたいな。（笑）

声優インタビュー

役柄のイメージが強いせいか、もうちょっとはきはきした方かな、と思っていたのですが、むしろココア寄りの、ふわあっとした方ですね。

玉川　そうですね。でも、私、人に凄く影響されるみたいで、あなたがたが穏やかな方だからだと思いますよ。ピシピシって言う時もあるし。自分でコントロール出来ないんですね。ナチュラルにその場の雰囲気にとけ込んで、「こうなっちゃったら、こうなっちゃったわあ」って感じで。本当に影響され易いんですよ。周りの人が大事で。

役者むけなんでしょうね。本日はどうも有り難うございました

PROFILE

玉川　紗己子

出身　　東京都
誕生日　１月２０日
血液型　Ａ型
所属　　シグマ・セブン
<主要キャラクター>
１９８５年　ＯＶＡ『エリア８８』津雲涼子
　　８６年　ＯＶＡ『コールミートゥナイト』夏見ルミ
　　８８年　ＴＶ　『Ｆーエフ』小森純子
　　　　　　ＯＶＡ『機甲猟兵メロウリンク』ルルシー
　　９０年　ＴＶ　『ＮＧ騎士ラムネ＆４０』ココア
　　　　　　ＴＶ　『チンプイ』ジャラシー
　　　　　　ＴＶ　『ロードス島戦記』ピロテース
　　９１年　ＴＶ　『ジャンケンマン』ジャンケンママ
　　　　　　ＴＶ　『おにいさまへ…』信夫マリ子
　　　　　　ＴＶ　『ゲンジ通信あげだま』九鬼麗
　　９２年　ＴＶ　『あしたへフリーキック』伍代香苗
　　９３年　ＯＶＡ『流星機ガクセイバー』スーザン
　　　　　　ＯＶＡ『ハミングバード』取石神無
　　９４年　ＴＶ　『ＢＬＵＥ　ＳＥＥＤ』山崎桜
　　　　　　ＯＶＡ『逮捕しちゃうぞ』辻本夏美

最近結婚なさり、その魅力にますます磨きがかかったようだ。今後の活躍に期待したい。

声優大辞典

菅原章吾

阿佐美達也

編

あ行

赤土眞弓（あかど　まゆみ）
【芦川事務所】
出身・福島県
昭和四十年六月二十八日生まれ

「赤ずきんチャチャ」でもうすっかりお馴染みのやっこちゃんである。ところが彼女の場合、デビュー作自体がもしかしたら最後の声優作品になるかもしれないとのこと。寂しい事にこれ以後の声の仕事は未定。「チャチャ」の中でも、主役チャチャをも凌ぐカルトな人気をが得る事が出来たのは、ひとえに彼女のインパクトのある、それでいて優しさあふれるダミ声のおかげだと思われる。あの声がやっこちゃんの魅力を200％引き出したと言える。それにしてもデビュー作でこれ程の味を出せる彼女、実は役者歴がとても長いのだ。かつて某テレビ番組の再現ドラマをお笑いの方々とレギュラーで演じていたこともあり、そんな人だからこそ「チャチャ」でも桜井　智などに演技指導ができるのだろう。桜井さんもそんな赤土さんと気が合ったようで、朝倉薫演劇団「ミッドナイトフラワーレイン」で共演し、互いに息の合った演技を見せてくれた。彼女は今後、舞台・ドラマ等で活動していく予定。

麻見順子（あさみ　じゅんこ）
本名・町田順子
【ぷろだくしょんバオバブ】
出身・神奈川県
？年九月二十四日生まれ

彼女のことを知っている人はそう多くないと思われるが、「ああっ女神さまっ」三嶋沙夜子、「少年アシベ」安西先生＆リコが代表的な所で、最近では、「とんでぶーりん」日高薫、「黄金勇者ゴルドラン」シャランラ＆ミチル先生などがある。（「ゴルドラン」16話のシャランラと17話のミチル先生はなかなかの見物である。）主役はまだ演った事はないが、「クレヨンしんちゃん」などいろいろな番組にちょこちょこでています。洋画にもたまにでており、目立たないが実力派の声優の一人である。

天野由梨（あまの　ゆり）
本名・吉川知子
【アーツビジョン】
出身・京都府（愛知県育ち）
昭和四一年一月五日生まれ

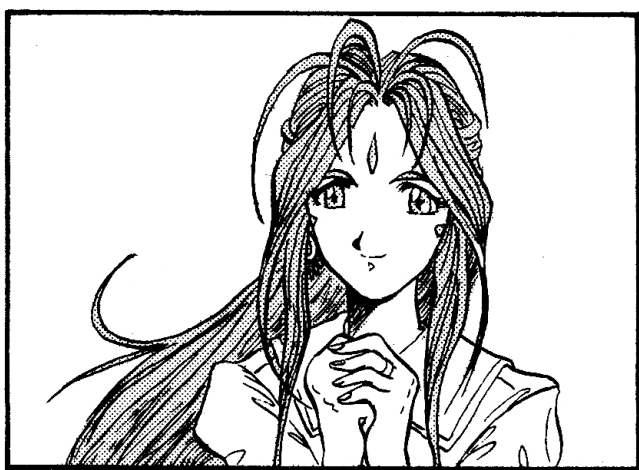
最近では「Gガンダム」レイン・ミカムラ、「ジュラトリッパー」タイガー、「ハミングバード」鳥石弥生、「レイアース」アルシオーネ、「天地無用」清音など気の強いキャラを得意としているが、実は自分を上手く表せず、ツッ張ってしまうけれど心の中は優しい、といった性格のキャラが多い。それとは逆に、由梨さん本人は見た目は優しい感じだが、ズバズバはっきりと物を言う人である。噂によるとこの人は、朝っぱらから赤ワインを飲むという、なかなかの強者?らしい。趣味といえば、ハープの演奏が有名であるが、「エルティナ」と名付けたハープは、23万円もするらしい。彼女が最近演じた変わった役といえば、「クレヨンしんちゃん」でみさえの友達のケイコの子供（赤ちゃんのひとし君）というのがある。

荒木香恵（あらき　かえ）
本名・阿倍香恵
【アーツビジョン】
出身・大阪府（北海道育ち）
昭和四一年一一月六日生まれ

彼女の名を一躍世に知らしめたのはやはり、盲腸の三石琴乃の代役として演じた「セーラームーン」であろう。最初聞いた時はあまり違和感なかったもんね。今ではもうちびうさがピッタリのハマリ役だけど。たまには「セーラームーンR」ブラックレディ、「Gガンダム」キャス・

ロナリー、「女神天国」マハラジャなど大人の役も演じるが、「不思議遊戯」夕城未朱のようなかわいい女の子が得意な人だと思う。本人の地に近いからかも知れないけど（笑）。ちょい役では、「クレヨンしんちゃん」セーラームフーン、「Ｖガンダム」ペギー、「レイアース」女子Ｂ（第1話・２０話）などがある。

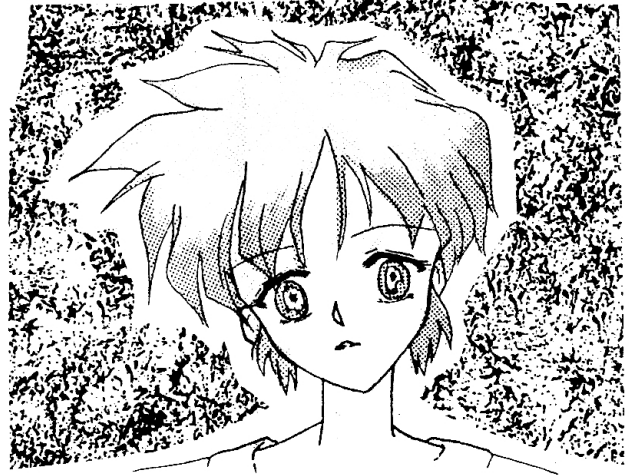
井上喜久子（いのうえ　きくこ）
本名・井之上喜久子
【江崎プロダクション】
出身・神奈川県
昭和三九年九月二五日生まれ

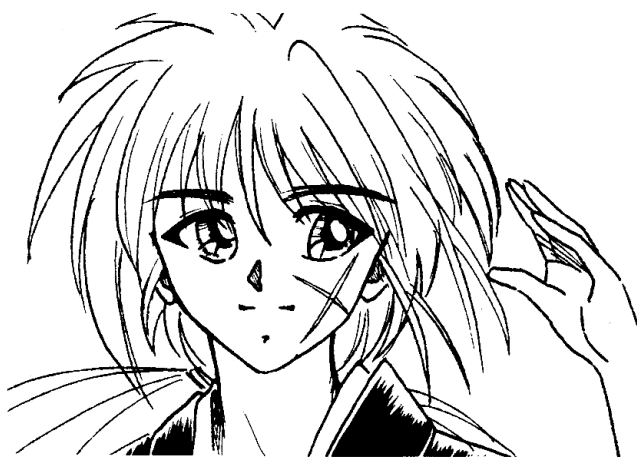
彼女は本当に〝マンボウ〟のような人である。あのボケが作り物ではなく正真正銘、モノホンの彼女であるというから、よくぞ今まで世間の荒波に耐えてこられたなあとつくづく感心してしまう。彼女の素顔を聴きたいという人には是非彼女がパーソナリティーをつとめている「井上喜久子のトワイライトシンドローム」（１１３４文化放送・金夜２６時半）をお薦めする。必ずや、至福の時間を提供してくれることだろう。そのナチュラルボケは「らんま１／２」や「ああっ女神さまっ」のＣＤでも伺えるのでファンは必聴。またそのボケさ加減とは反対に、彼女は中学校国語教諭、図書館司書、華道池坊師範などの資格を持っているそうな。外見は大人っぽく、おっとりした感じのお嬢様だが、いざしゃべり出すと、「あれ、何か違うな？」と誰もが思うはずだ。でも、「ふしぎの海のナディア」のエレクトラと「らんま１／２」のかすみお姉ちゃんを演じ分けられるのだから、役者としてはけっして低いレベルではない。最近の役では、「ああっ女神さまっ」ベルダンディー、「ママレードボーイ」北原杏樹、「セイバーマリオネットＲ」ブリット（必ず聴くべし！）、「飛べイサミ」花丘玲子、「プリンセス・ミネルバ」ブルーモリスなど徐々に役の幅を広げている。彼女自身のＣＤとしては「優美なおさかな」、「ただいま」の二枚をリリース。それ以外では「新おしゃれ秘セッション・イリーガルブロードキャスト」はファンとしては必須アイテム。今後は〝おさかなペンギン〟（岩男潤子の欄参照）でライブ活動を行う予定だが、彼女もポニーキャニオンの須賀さんに見出されて花開いた声優である。

今井由香（いまい　ゆか）
本名・同じ
【劇団ムーンライト】

「セイバーマリオネットＲ」のヴィレイＪｒ．様が一番有名な役であろう。その他に「レイアース」ミラ（８話・２５話）、ＯＶＡ「はるかぜ戦隊Ｖフォース」美月、「きらめき森のヤンタくん」ヤマリンなどがある。最近では「ガンダムＷ」でヒロイン・リリーナの学友Ｄ（ロングの茶髪にソバカスの女の子）などを演っている。彼女は劇団ムーンライト（野沢雅子主宰）に所属する舞台女優であり、最近の公演「一人二役」では色っぽい大人の女性を見事に演じ、可愛らしい素顔とは全く違う一面を見せてくれた。

岩男潤子（いわお　じゅんこ）
本名・同じ
【８１プロデュース】
出身・大分県別府市
昭和四五年二月一八日生まれ

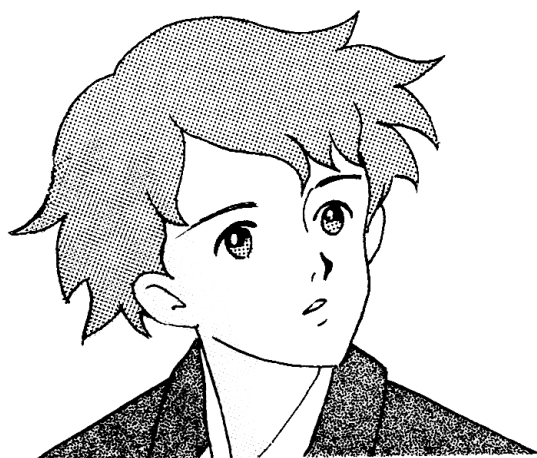
「モンタナ・ジョーンズ」メリッサがデビュー作と言われているが、１９歳の時に演ったＣＤドラマ「宇宙英雄物語」のステラ皇女役が本当

のデビュー作である。このCDはジャケットのアフレコ風景の写真の中に本人がちゃんと写っているのだ。彼女は声優になる前、セイント・フォーというアイドル・グループの後期メンバー（病気で辞めたメンバーの代役）として活躍していた。大分から13歳（中学2年）の頃上京して、社長宅に住みながらレッスンをしていたらしい。グループ解散後、舞台やミュージカル、歌のお姉さん、童謡歌手、その他様々な活動をしていたところをポニーキャニオンの須賀さんに見出され、現在の彼女がある。声優としては「KEY」己真兎季子、「マクロス7」サリー・S・フォード（セイント・フォーにひっかけているのはスタッフのちゃめっ気らしい）「キャプテン翼J」キーパー森&青葉弥生、「プリンセス・ミネルバ」トウア、「ジーンダイバー」ティル、「新キューティーハニー」夏子、「アリス探偵局」準レギュラー、「超くせになりそう」守野ちとせ、「カラオケ戦士マイク次郎」海、OVA「ガッチャマン」女ジュピター、「ちびまるこちゃん」けんた、CDブック「るろうに剣心」男の子、など数多くの役をこなしている。彼女の夢はディズニーや名作劇場に出る事。また彼女はお酒を飲むと笑い上戸になるらしい。井上喜久子さんとは姉・妹のような間柄で、二人が初めて会ったの喜久子さんが「モンタナ」にゲストで来た時で、その日にもう仲良しになってしまったとか。それが縁（須賀さんの企み）で"おさかなペンギン"なるデュオを結成。名前の由来は、喜久子さん＝おさかなはいいとして、岩男さんのマイクの前に立つと、手がペンギンのようになるクセから来ているそうな。御本人は大人しめで、とっても可愛らしく、礼儀正しい方で、今後の活躍が非常に楽しみな声優さんの一人である。

緒方恵美（おがた　めぐみ）
【青二プロダクション】
出身・東京都
？年六月六日生まれ

"声優業界の宝塚"と呼ばれる程、女の子に絶大なる人気を誇る（男で彼女のファンというのは聞いた事がない）。もともとはミュージカル女優だったが、腰を痛めたため劇団を辞め、声優に転向した。デビューは言わずと知れた「幽遊白書」の蔵馬（最初は超不評でボロクソに言われてたっけ）。結局、蔵馬で人気を不動のものとした訳だが、その後は「ツヨシしっかりしなさい」シズオ、「ヤマトタケル」ロカ、「セーラームーンR」ペッツ、「セーラームーンS」天王はるか、「ジャングルの王者ターちゃん」シーマ、「銀河戦国群雄伝ライ」飛竜、「レイアース」エメロード姫、イーグル、「キャプテン翼J」三杉淳、「鬼神童子ZENKI」アンジュ、「タイトロード」キックスなどを立て続けに演じた。2枚目の男の子から、か弱い美少女、果ては色っぽい大人の女性と幅広い役柄を見事に演じ分けており、演技力も抜群で、声優としては超一流である。蔵馬とエメロード姫とロカとシーマが同一人物だって誰が聞き分けられる？ただ、惜しむらくは昨年の公演「夏の夜の夢」における舞台女優としての彼女には、あまり惹かれるものはなかった。今後に期待することにしよう。彼女自身は中性的な感じで、女の子に人気がでるのもうなずける。チョイ役では「クレヨンしんちゃん」135話のケロケロが面白かった。現在ではまだCDブックの段階だが超人気漫画「るろうに剣心」の主役・剣心役を射止めており、TVになったら、またまた人気沸騰間違いなし！

岡村明美（おかむら　あけみ）
【江崎プロダクション】
?年六月六日生まれ

映画「紅の豚」のフィオ・ピッコロ役でデビュー。以前は洋画の方がメインだったが、最近アニメの仕事が増えつつある。演じた役にCDドラマ「ガイア・ギア」、「カリメロ」プリシラ、CDドラマ「ワースジード」リーシュ、「ヤマトタケル」シラヌイ、「ガルキーバ」ミレイア、火浦麻由、「ロミオの青い空」ビアンカ、「ファイベルの冒険」主人公・ファイベル（せっかく主役だったのにわずか12回で終了してしまって残念）などがある。最近では「魔法陣グルグル」のチュリカという妖精がイチ押し。チョイ役では「ZENKI」さやか、「モンタナジョーンズ」オリンピア、「超くせになりそう」タマ子、海外TVドラマ「ブロッサム」ステファニー他がある。今後の活躍に期待大の若手声優の一人。

小野寺麻里子（おのでら　まりこ）
本名・同じ
【青二プロダクション】
出身・大阪府
昭和四八年二月二二日生まれ

アニメデビューは映画「ろくでなしブルース」のチョイ役。「メタルファイターMIKU」ナナ、「ママレードボーイ」麻里（光希のクラスメート）が代表作。顔出しの仕事も多く、フジTVドラマ「指輪」ウェイトレス、TVドラマ「三件目の誘惑」、TVドラマ「クニさんちの魔女たち」TVCM「コロナ石油ファンヒーター」、カラオケビデオ「夢想花」、ケーブルTV「横浜職人探訪」レポーターなどがあり、ラジオCMでは「野田クルゼ」、「コロコロコミック」など。あと、「メタルファイターMIKU」ビデオ巻末特典映像にも出演している。彼女は声優になるため母親と大ゲンカをして実家を飛び出し、東京で単身赴任している父親の所へ来てしまったというくらい、気合いの入った人らしい。以前は長かった髪を今ではバッサリ切ってしまい（ちょっと後悔しているらしい）、さらに、ジーパンフリークなのでいつもジーンズをはいているためボーイッシュなお姉さんという感じの人である。

折笠愛（おりかさ　あい）
本名・折笠きく江
【ぷろだくしょんバオバブ】
出身・東京都
?年一二月一二日生まれ

お色気たっぷりの美女から熱血少年まで、実に何でも上手くこなす実力派声優。「小公女セディ」の主役・セディでデビュー。最近では「リューナイト」ハグハグ、「ブルーシード」竹内涼子、「青空少女隊」三鷹ありさ、「天地無用TV版」魎呼、「ロミオの青い空」ロミオ、「ガンダムW」カトル・R・ウィナーなどがある。その他にCDドラマ「イザナギ」オカマのイシス、「ちびまるこちゃん」えびすくん、加藤くんなどチョイ役でも出演。洋画にも数多く出演し、「ホームアローン」のケビン少年が有名。最近話題になったのが警視庁のマスコットキャラクター”ピーポくん”で、「ブルーシード」のドラマCDで冗談半分に演じたものが、本当にオーディションに受かってしまったのだそうだ。まだ聴いた事のない人は必聴。オリジナルCDもリリースしており、「淑女超特急」というタイトルもスゴイが、収録曲もなかなか渋い。（”浪花男に手をやいて”とか”鬼に乳房”etc…）彼女自身は、江戸っ子の粋な姐さんって感じの人である。

か行

笠原留美（かさはら　るみ）
【青二プロダクション】
出身・新潟県
?年三月八日生まれ

代表作は「フォーチュンクエスト」パステル・6・キング、「ジュラトリッパー」ガチャ（アイーダ）、チョイ役では、「セーラームーンS」プチロル（ウィッチズ5の一人）、「アンパンマン」カレン、「七つの海のティコ」、「スラムダンク」など。声の仕事だけでなく、TVでの顔出しもけっこうあって、フジTV「おはようナイスデイ」の食べ歩きのコーナーのレポーターをやった事もあった。現在は、横浜ケーブルテレビの釣り情報番組のレポーターや、新宿アルタビルで毎週日曜日、音楽番組の司会を生でやっているので、本人の顔を見ることも可能。また、田中真弓と共に「電撃大作戦」というラジオ番組のパーソナリティーをつとめているが、田中真弓の影響か、あるいはもとから本人に素養があったのか、完全にお笑い声優と化している。オリジナルCDもリリースし歌もけっこうイケることを証明。今後の活躍に期待したい。

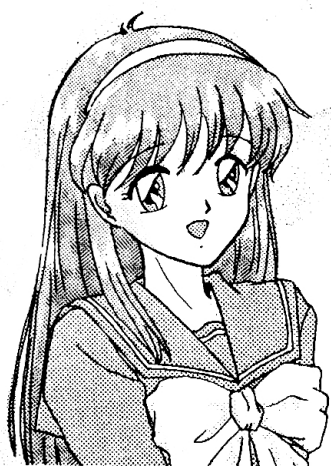
金丸日向子（かねまる　ひなこ）
【青二プロダクション】
出身・東京都
？年八月一七日生まれ

最近はあまりアニメの仕事はしていない。「ビックリマン」クロスエンジェル、「タルるーとくん」玉みえ、「コボちゃん」ヒロ子、「学園七不思議」などに出演。代表作は何と言っても「卒業」の志村まみだろう。特徴的な声なので一度聞いたら忘れられないはず。面白い役では、「セーラームーンSS」第1部のカラクリ子ちゃんがある。アフレコの時、出演者一同大爆笑だったそうな（本人談）。最近では、アニメよりもラジオやTVCMのナレーションの方が多く、わかりやすい所では、「楽しい幼稚園」、「ジャスコ」など。「20日はジャスコ！」とか聞いたことない？

亀井芳子（かめい　よしこ）
本名・田中芳子
【江崎プロダクション】
出身・山形県
昭和四二年五月二五日生まれ

この人も最近あまり名前を見かけない。代表作は「ヤマトタケル」主人公ヤマトタケル、「幽遊白書」ゲームマスター天沼、「クッキングパパ」ヒロシ、「エトレンジャー」モンクなど。元気な男の子多いが本人は大人しそう感じの方である。

川田妙子（かわだ　たえこ）
本名・同じ
出身・東京都
【81プロデュース】
昭和四〇年三月二〇日生まれ

「あれ、山田じゃなかったっけ!?」と思う人もいるかもしれないが、最近川田と改名されたそうである。代表作は、海外TVドラマ「フルハウス」のミシェル・タナーでキマり、この役は赤ちゃんの頃から声をアテており、現在は五歳、その間ずっと成長に合わせて声を変えているという大役である。最近では、「セーラームーン」桃原桃子、「ファイベルの冒険」ヤーシャ、「ちびまるこちゃん」とも子、「魔法陣グルグル」イルクなどがあるが、一番のハマリ役は「あずきちゃん」のかおるちゃんである。いい雰囲気出してるんだこれが。あと変わった役では、「新キューティハニー」ブラックメイドンがある。可愛い女の子役が多いが、本人も小柄で声も顔も可愛く、まさに”かおるちゃん”って感じの人である。

金月真美（きんげつ　まみ）
本名・同じ
【大沢事務所】
出身・兵庫県
昭和四〇年四月二日生まれ

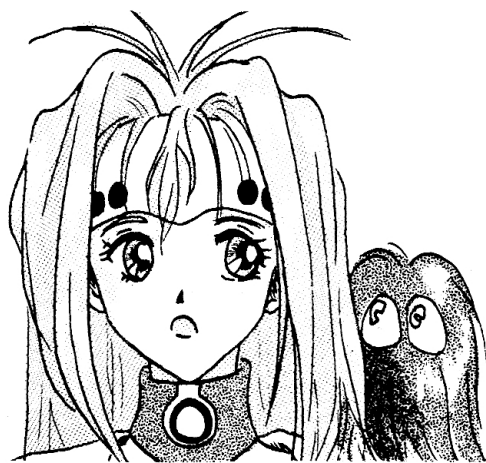
一応、声優の人である。PCエンジンゲーム「ときめきメモリアル」ヒロイン、藤崎詩織の声をアテている。このゲームは大人気で、ラジオドラマなどにもなっている。他には「ブルーシード」神林礼子（第11話）くらいしかない。ナレーションでは、「ロッテパイの実」、「ロー

ト製薬涙ロート」、CNNキャスターのボイスオーバーなど。彼女の声は、落ちついた、上品な感じの声質で、現在は、アメリカのミシガン州に芝居の勉強のため留学中である。

黒田由美（くろだ　ゆみ）
本名・同じ
【青年座】
出身・静岡県
昭和四一年六月二七日生まれ

「Vガンダム」のシャクティー・カリンが代表作。あの「見てください」は有名。その他に、「平成イヌ物語バウ」かなえ、「平成狸合戦ぽんぽこ」小春、CDブック「エルフの若奥様」ミルファ、最近は「ガンダムW」女子学生B（ショートカットで後ろ髪が跳ね上がっている娘）を演っている。顔出しでは、TVCM「クノールのカップスープ」、企業の社員教育用ビデオなど。大人しめの、落ちついた感じの人である。

国府田マリ子（こうだ　まりこ）
本名・同じ
【青二プロダクション】
出身・埼玉県
昭和四四年九月五日生まれ

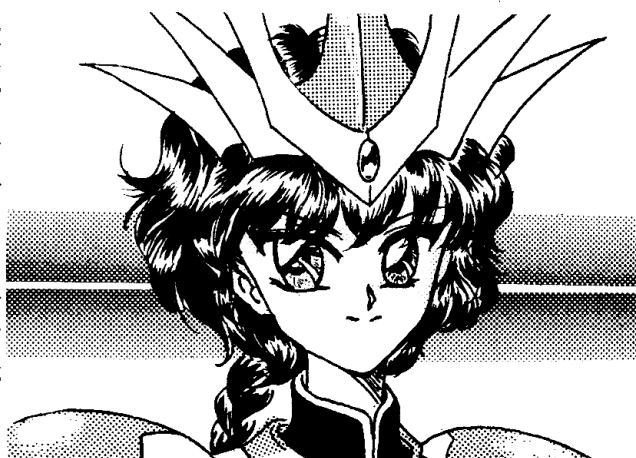
さて、今では知らないアニメファンはいない？というくらい有名な人であるが、代表作は「GS美神」おキヌ、「ママレードボーイ」小石川光希、「テッカマンブレードII」ユミ・フランソワ、「ダーティーペア・フラッシュ」ユリ、「スペースオズの冒険」ドロシーといった所である。最初の声の仕事はCDドラマ「しあわせの王子」のマッチを売る少女役、初めて役名をもらったレギュラーは、「きんぎょ注意報！」の朱子。彼女自身は、とても元気でしゃべり出したら止まらない。いつ息をしているのかわからない？というぐらいの人である（なんと肺活量が3900もあったとか）。合言葉は”Bee”で有名な「ツインビーパラダイス」「ゲームミュージアム」などを聞いているとよくわかるはず。彼女はイラストなども描くが、その中によく出てくる”猿のウッキー”（ぬいぐるみ）&”犬のハッピー”（飼っているロングコートチワワ）が大のお気に入りらしい。また、子供の頃から車も好きで、最近のお気に入りはホンダのホライズン（いすずのビッグホーンと同じもの）というRVらしい。（単に名前が好きだからだと思うが…）。その他、ナレーションでは「丸正食品」、「マクドナルドホームメイド編」、某クレジットカードや事務機器メーカーの椅子などにも出ていたらしい。彼女はアニメ、歌、ラジオ、イベントetc…何をやっている時もとても元気に輝いている。みんなそこに惹かれて彼女のファンになるのだと思う。これまではカワイイ女の子役しかやっていないので、今後は様々な役に挑戦して、自分を磨いていって欲しい。

さ行

桜井智（さくらい　とも）
本名・八田友江
【エルスタッフプロモーション】
出身・千葉県
昭和四六年九月一〇日生まれ

アニメ「レモンエンジェル」桜井智役でデビュー。同時にアイドルとしての活動も開始。それ以前から持ち前の可愛らしさと歌唱力でオーディション荒らしとして有名であった。”サブリナ”という三人グループにいたこともある。どこをどうして今の彼女があるのかは不明。はっきり言えるのは「赤ずきんチャチャ」マリン、「マクロス7」ミレーヌ・ジーナスの二役でアイドル声優の地位を手に入れたという事である。その他の役では、「ドラゴンリーグ」ウィナ姫（ウィル）、劇場版「餓狼伝説」スーリア・ゴーダマス、CDドラマ「るろうに剣心」神谷薫、OVA「神秘の世界エルハザード」シェーラ・シェーラ、CDドラマ「イザナギ」イザナミ、ゲーム「リスキージュエル」花椿花子、などがある。ラジオでは「アニメエクスプレス」「スーパーアニマガパラディ」の一

コーナー、「桜井智のともだちラジオ」、舞台では「ミュージカル赤ずきんチャチャ」マリン、朝倉薫演劇団「ミッドナイトフラワートレイン」弁天マリア（ストリッパー役）、「ミュージカル夢のタイムリミット」などに出演、精力的に活動を行っている。また、歌の方ではリン・ミンメイ（飯島真理）のカバーアルバム、「ミレーヌ・ジーナス シングス リン・ミンメイ」をリリース、オリコンの上位にくい込み、我々を驚かせた。今後の飛躍を期待させる声優の一人である。

椎名へきる（しいな へきる）
本名・椎名牧子
【アーツビジョン】
出身・東京都
昭和四九年三月一二日生まれ

中二の時、劇場アニメ「アリオン」を観たのが声優になるきっかけ。高校に行きながら日本ナレーション演技研究所で声優の勉強をした。その頃からちょこちょこ仕事はしていた。「精霊使い」の一般オーディションに受かってデビュー、その頃にはもうアーツビジョンに所属していたらしい。アニメのデビューは「アイドル防衛隊ハミングバード」の鳥石水無。代表的な役として「精霊使い」千華、「3丁目のタマ」モモ「D・N・A2」高梨ことみ、「プラスチックリトル」イリーズ、「ツインビーパラダイス」パステルなどを経て、「魔法騎士レイアース」では主人公獅堂光役をつとめる。男の子役は、ゲーム「ロックマン」ロックマン、CDドラマ「イザナギ」イザナギのミコトなどがある。顔出しでは、名古屋地方で流れた生活倉庫、新潟ビジネス専門学校のTVCMや、サイレントメビウス外伝のビデオで町娘役をやっている。オリジナルCDは「Sheina」、「Respiration」の二枚をリリース。本人は、とにかく一風変わった、とらえどころのない人柄（ラジオ番組「へきらーずRADIO」や「アニメスクランブル」を聴けばわかる）である。ニックネームが”地球外生物”というのもうなずける。彼女の分身キャラとして”へき子”がいるそうで、本人曰く、”へき子”は地球外生物で、謎の宇宙生命体EXπrと科学生命団体からDNAを狙われているらしい。時空間さえ予測もつかない星の生物で、趣味も変わっており、”怪しいものを探す事”だそうな。大好物は”味のり”とのこと。やっぱり普通じゃヤ、へきるちゃんは。

嶋方淳子（しまかた じゅんこ）
本名・同じ
【青二プロダクション】
出身・神奈川県
？年八月一二日生まれ

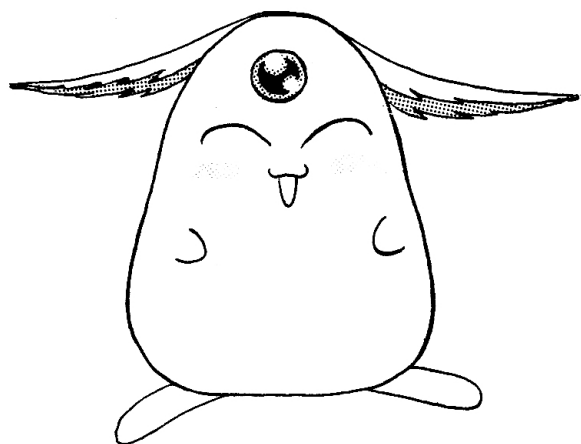
代表作は、「卒業」の加藤美夏役。きっぷのいい、さっぱりとした江戸っ子的な女の子を見事に演じている。その他には、「ドラゴンクエスト」カカ（スライム）、「も〜れっつア太郎」スダ子、「美しいウィロータウン」モーシー、「GS美神」チヨイ役（窓口ギャルズ・一ツ目小僧・白雪姫他）などがある。最近では「ロミオの青い空」カルロ（ロミオの双子の弟の一人）、「ガリバーボーイ」メガネをかけた妖精（17〜18話）を演った。近頃は、アニメよりもラジオやTVCMのナレーションの方が多いようで、TOKYO FMのCMや、TV番組「でたMONO勝負」でOLの声の吹き替えをやっている。

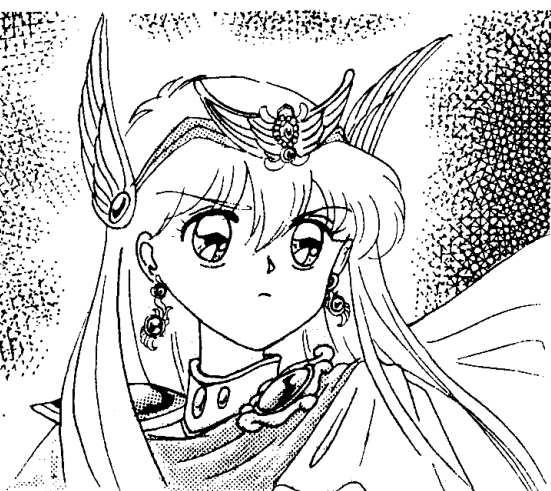
嶋村薫（しまむら かおる）
本名・米倉浩子
【81プロデュース】
出身・神奈川県
？年四月一五日生まれ

演じた役は「ガルフォース新世紀編」ダイア、「ジェノサイバー」ラット、「モルダイバー」ナスターシヤ、「ジーンダイバー」フラウ、「ミュータントタートルズ」アルマなど。最近では、「キャプテン翼J」井沢守、「マクロス7」レックス（暴走族のリーダー）、「稲中卓球部」番組レギュラーなどを演っているが、まだ「これはっ！」という役がないのは残念。洋画にも出ているが、今後の活躍に期待したい。本人は、け

っこう色っぽいお姉様である。

白鳥由里（しらとり　ゆり）
本名・同じ
【アーツビジョン】
出身・神奈川県
昭和四三年八月二〇日生まれ

可憐な美少女役をやらせれば右に出る者はいな…くはないが、かなりのものであることは確か。「トラップ一家物語」小さいマリア、「伝説の勇者ダ・ガーン」桜小路蛍、「姫ちゃんのリボン」野々原愛子、「幽遊白書」雪菜、「ぼくの地球を守って」坂口亜梨子、といった所が可愛いキャラの代表。最近増えてきた活発な役では、「イクセリオン」霞渚、「ガンバルガー」結城千夏、CDブック「バスタード」ティア・ノート・ヨーコ、CDドラマ「新春香伝」春香、そして彼女の代表作となった「とんでぶーりん」国分果林などがある。さらに人間以外の役も多く、「ブッシュベイビー」マーフィー、「南国少年パプワくん」テヅカくん、「平成イヌ物語バウ」ツチノコ（ゲスト）、「とんでぶーりん」ぶーりん、「魔法騎士レイアース」モコナなど、多岐にわたっている。本人はとても可愛らしい人ですが、性格はけっこう活発なようで、趣味でパラグライダーをやったりあちこちにふらっと旅行に行ったり、写真を撮ったりするとのこと。また大の西武ライオンズファンなのは有名。ナレーションの仕事は少ないようだが、「カバヤセボンスターチョコレート」、「赤ずきんチャチャガム」のTVCMや「ジャクティ」「アービル横浜」のラジオCM、そして今はケーブルTVで、ショッカー中野と「おたっくビーム」という顔出しの仕事をしている。彼女の演った役で最近面白かったのは、「レイアース」でのモコナとプリメーラ（妖精）との掛け合い漫才だね。

鈴木真仁（すずき　まさみ）
【フリーアトム】
出身・神奈川県茅ヶ崎市（育ちは静岡県熱海市）
昭和四七年七月一四日生まれ

御存知"まじんちゃん"である。蟹座のO型。声優にならなかったら、今頃熱海市役所に勤めていたらしい。さすが三ツ矢雄二、先見の明があったようだ。代々木アニメーション学院ひがし校声優アテレコ科（当時）を卒業と同時にフリーアトムに所属。現在に至る。アルバイトをしながら、二年間芝居の勉強をした後、「赤ずきんチャチャ」のチャチャ役（いきなり主役）でデビュー。最近は「H2」古賀春華、「スレイヤーズ」アメリアと「チャチャ」終了後も立て続けにレギュラーを獲得し、一発屋でないことを証明した。その他マイナーなところでは、パソコンゲーム「リスキージュエル」リスキールビー（天乃めぐみ）、PCエンジン「天地無用!」白亜、代アニ卒業制作アニメ「赤ずきんちゃんリターンズ」赤ずきん、などけっこう多くの役をやっている。また、フリーアトムの舞台公演でも活躍しており、「プレイアソング」などでなかなか良い演技を見せてくれた。「チャチャ」のミュージカル（再演）でもお鈴ちゃん役で並木のり子とダブルキャストで出演。歌の方では、九四年八月に「チャチャ」のED"チャチャにおまかせ"（桜井智・赤土真弓と共に）でCDデビュー。その後も「チャチャ」のCDで"マイディアー"、「ようこそマジカルスクールへ」などを歌い、九五年三月には、オリジナルミニアルバム「おはよう」をリリース。なかなかの歌唱力をみせてくれている。七月にはファーストコンサートを開いた。日高のり子に「踊る声優」という呼び名をもらった彼女、スタジオではグルグル暴れながら(?)アフレコを

やっているとか。大好物はハンバーグ、お茶はミルクティーが好きとのこと。現在のところ、実力的にはまだまだだが、今後の飛躍を大いに期待させる若手声優の一人である。

関根章恵（せきね　あきえ）
【劇団ムーンライト】
？年一月七日生まれ

「関根章恵？えっ！誰それ!?」ってな感じの人がほとんどだと思われるが、デビューである「Gガンダム」ジャネット・スミス（チボデーギャルズの一人の金髪の娘）や「ガンダムW」女子学生C（リリーナの学友で三ツ編みの黒髪の娘）を演っている。どちらも、静かな中に活発さを感じさせる声である。他に、「きらめき森のヤンタくん」でリリーというリスの女の子を演じている。劇団ムーンライトに所属し、舞台で彼女の姿を見ることができる。前回の公演「一人二役」では過激で賢い悪女を演じていた。本人は、ひかえめな感じがするが、ハッキリと物を言うタイプの人である。

た行

高山みなみ（たかやま　みなみ）
【81プロデュース】
出身・東京都
？年五月五日生まれ

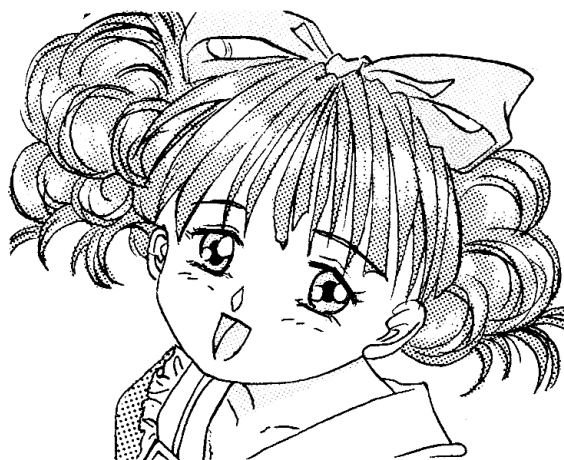
ボーイッシュな声で有名な彼女であるが、最近ではあまり新しい役はやっていない。「クッキングパパ」ケイコ、「剣勇伝説YAIBA」鉄刃、「忍たま乱太郎」乱太郎、「レイアース」アスコット、「カラオケ戦士マイク次郎」鈴木次郎などが有名。でも「ジャングルの王者ターちゃん」にリサ・コーガン役で出ていた時は緒方恵美と区別つかないんだな、これが。しかし何と言っても、我々を最も驚かせたのは、「新機動戦記ガンダムW」のOP”JUST COMMUNICATION”を彼女が歌っているという事実だろう。永野椎名という男性とコンビを組み、TWO MIXを結成、シンガー高山みなみとして活躍中。あの小室哲哉だかアクセスだかのような曲は番組の雰囲気にピタリとハマッて、大ヒット中である。

瀧本富士子（たきもと　ふじこ）
本名・同じ
【アーツビジョン】
出身・大阪府
？年一一月六日生まれ

「魔法陣グルグル」のニケくんである。あと、こっちはあまり知られていないが、「キャプテン翼J」で中沢早苗（通称あねご）も演っている。少し聞いただけでは、とても同一人物が演じているとはわからないはず。その他、サンリオのキャラクター「バットばつ丸」の声もアテている。彼女本人はと言えば、ニケの方に近いかも?けっこうボーイッシュな感じの人で、これからも様々な役に挑戦して欲しい。

丹下桜（たんげ　さくら）
【青二プロダクション】
出身・愛知県
？年三月二四日生まれ

最近の青二プロの中で国府田マリ子に次いで売れてきた人である。代表作である「ママレードボーイ」の佐久間すずを演ってからグーンと仕事が増えた。「忍たま乱太郎」ユキ（国府田マリ子の後任）、「ロミオの青い空」アニタ、「ガリバーボーイ」プリポン、「負けるな!魔剣道」マケンロー、ゲーム「スーパーリアル麻雀PV」早坂晶などで活躍中。しかし彼女のことを知りたいなら絶対に、彼女がパーソナリティーをつとめる「もっとときめきメモリアル」を聴くべきだ。”あなたのハートにときめきラブ”を聞いたなら、どんな男でもフニャフニャになってしまうこと間違いなし。コナミの後押しで、国府田マリ子の妹分のような感じである。彼女本人は佐久間すずのような可愛らしい人であるが、まだまだ芝居の幅が小さいので今後の飛躍を期待したい。

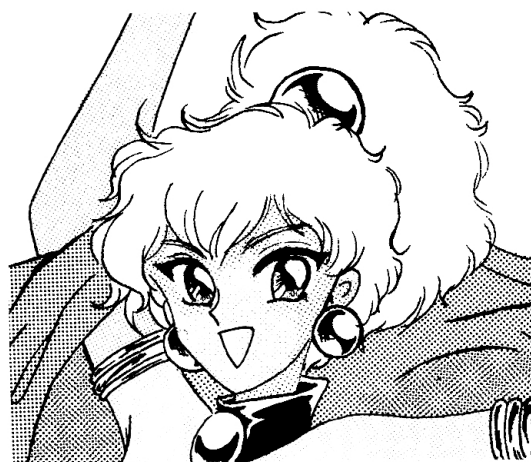
な行

富沢美智恵（とみざわ　みちえ）
本名・富澤美智恵
【青二プロダクション】
出身・長野県
?年一〇月二〇日生まれ

「セーラームーン」の火野レイ、「クレヨンしんちゃん」松坂うめ先生、「GS美神」小笠原エミなどでお馴染みの彼女であるが、最近演った役では、「ガリバーボーイ」ニキータ（第9話）、「アンパンマン」あめだまぼうや、などがある。近年アニメの仕事が減ってきているのは、噂によると、仕事の依頼があっても気に入ったものしかやらないからだとか。顔出しでは、「超力戦隊オーレンジャー」で一度だけ、”火野先生”という小学校の先生役で出演しているが、スタッフのお遊びであることは間違いない。彼女の素顔を知りたい人は、パワフルでセクシーな彼女のライブを生で観ることをお勧めする。

中川亜紀子（なかがわ　あきこ）
【フリー】
出身・北海道
?年一二月一日生まれ

「マクロス7」の花束の少女と言えばわかる?かな。ほとんど毎回出ているが、本人曰く、「ほとんどセリフはないけど、毎回同じにならないよう気を付けている。」とのこと。もし、彼女の声を聞きたいと思ったら、「マクロス7」のドラマCDを聴くべし。その中で、花束の少女が”ファイアーボンバー”の「突撃ラブハート」を歌っている。最近、歌の勉強も始めたそうだ。他には、田中真弓＆笠原留美がパーソナリティーをつとめている「電撃大作戦」でラジオドラマの冒頭に内容の紹介をしている。それにしても、田中真弓に無理矢理ガラナチョコを食べさせられた時は可哀想だったな（笑）。今後も様々なジャンルで活躍してもらいたい声優である。

永島由子（ながしま　ゆうこ）
本名・同じ
【青二プロダクション】
出身・大阪府
?年七月三日生まれ

関西弁声優としてお馴染み。「リユーナイト」カッツェ、「レイアース」カルディナ、「スラムダンク」相田弥生と本人が望んだかどうかは定かではないが、何故か関西弁のキャラが続いた。ラジオ「アニマガパラディ」のパーソナリティーとして突如我々の前に姿を現した彼女であるが、「ママレードボーイ」の千草くらいしか声の仕事はやっていなかったような気がするので、何故そんな大役に抜てきされたのか未だに不思議ではある。しかし彼女の実力は相当のもので、若手女性声優の中では演技力・歌唱力とも特Aクラスである。その他の役に「銀河お嬢様伝説ユナ」女王様ルミナーエフ、「稲中卓球部」第2話ゲスト・酒乱の教師たちばな（そういえば彼女本人もけっこうイケるとか…）などがある。顔出しでは、「クニさんちの魔女たち」で古本新之輔らと出演。ナレーションでは、「OH！エルくらぶ」など。彼女は、アニメをやる前は髪が長く、大人しめの人だと思ったのだが、髪を切ってからは（最近の「アニパラ」では本人もようやく自覚したようだが）大阪人そのまま、お笑い芸人になってしまった。

中村尚子（なかむら　なおこ）
本名・同じ
【青二プロダクション】
出身・大阪府
?年七月二八日生まれ

これといった代表作はないが、しいて挙げれば、CDドラマ「ロードス島戦記・風と炎の魔人」砂漠のナルディアという勇ましい敵の女ボス役であろうか。テレビのレギュラーはほとんどなく、今までに演ったものはOVA「超時空世紀オーガス02」ナタルマ、「ママレードボーイ」桂子（光希の友達三人組の一人）、CDドラマ「銀河お嬢様伝説ユナ」大地のジーナ、「ロミオの青い空」ピア、などである。ナレーシ

ヨンでは、クイズ番組「パンドラタイムス」など。本人は、ハキハキとした人で、もっと活躍して欲しい声優さんである。

中山真奈美（なかやま　まなみ）
【青二プロダクション】
出身・埼玉県
？年一月二九日生まれ

彼女は青二プロの新人なので、知っている人は少ないんじゃないかな。大役はまだないが、これから伸びてくること間違いなし。代表作は、ゲーム「スーパーリアル麻雀PV」遠野みづき役で、ボーイッシュな女の子を見事に演じている。本人も言っていることではあるが、あまりハッキリとした特徴がないので、声を聞いたことがある人でも、よくわからないんじゃないかな。最近では、「セーラームーンSS」の曲馬団子、チョイ役では、「蒼き伝説シュート」女の子（39話）、「セーラームーンS」ウェイトレス（103話）、女性（106話）、ウイッチーズのメンバー（117話）、「マーマレードボーイ」女の子（36・38話）、子供（50話）、「スラムダンク」女性徒（47〜49話）、「ガリバーボーイ」泣き女、など数多くこなしている。彼女本人は大人しい感じのする人である。

並木のり子（なみき　のりこ）
【フリーアトム】
出身・長野県
昭和四七年六月一九日生まれ

「赤ずきんチャチャ」のお鈴ちゃん（おすずちゃんではない！）役といえばわかるだろうか？これ以外では、お鈴ちゃんの声のイメージで芝居を観た人には、ちょっと驚きだったかも…。95年の夏には「チャチャ」のミュージカルに鈴木真仁とダブルキャストでお鈴ちゃん役として出演するとのこと。「チャチャ」は終わってしまったが、これからもどんどん活躍して欲しいものだ。

西原久美子（にしはら　くみこ）
本名・渡辺久美子
【劇団二一世紀FOX】
出身・神奈川県
？年四月二七日生まれ

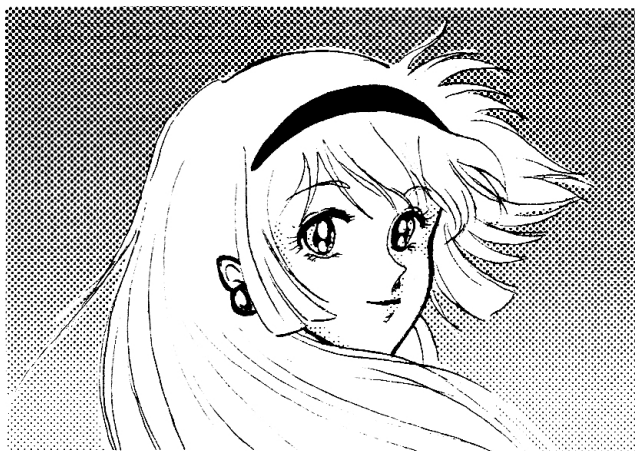
一声聞けば絶対忘れられない独特の声の持ち主。代表作は、「レディイリン」リン、「タルるーとくん」ミモラ、「GS美神」六道冥子、「パプワくん」クリコ、「スーパービックリマン」リトルミノス、など。最近はレギュラーが少なく、「セーラームーンSS」ダイアナ（ルナとアルテミスの子供）、NHK教育「わいわいドンブリ」ぐらいである。単発では、「ウエディングピーチ」しずか（6話）、「飛べイサミ」かきつばた桜子（4話）、「ピットザキューピッド」レダ（5話）、CDドラマ「女神パラダイス」プチメガのピンク、他。特に面白かった役は、「セーラームーンS」のう・トモダチ（115話）で、これは大爆笑ものだった。彼女の演るキャラは、周囲を巻き込みどちらかというと迷惑？なお嬢様役が多いようだ。彼女自身も一風変わった雰囲気をもつひとである（超美人）。

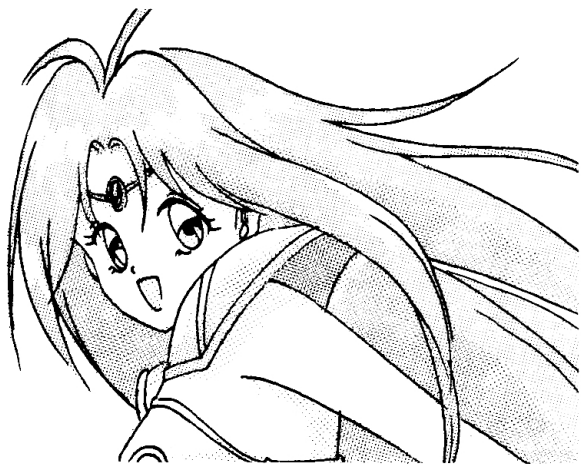
西村ちなみ（にしむら　ちなみ）
本名・同じ
【81プロデュース】
出身・千葉県
昭和四五年一一月一八日生まれ

知る人ぞ知るBSアニメ「超くせになりそう」の白鳥なぎさ嬢である。明るく、元気なアイドル歌手の女の子に彼女の声がピッタリハマっていた。最近では、「レイアース」アスカ、「ピットザキューピッド」トウインカ、「グルグル」妖精、などレギュラーが増え始めた。これまで演じた役では、「グルグル」チクリ魔、OVA「イクセリオン」飯島きいろ（これまたアイドル歌手）、OVA「天地無用・番外編銀河大冒険」アナウンサー、「モンタナジョーンズ」パトミ、OVA「なつきクライシス」校内アナウンサー、「月刊ぽんぱでぽんぱ」（お子さま向けアニメ）、などがある。洋画では、私の知る限りでは、「新クライムストーリー」で一度だけ、不良っぽい女の子を演じている。彼女の声はとっても可愛らしく、一度聞けばすぐわかる特徴のある声である。彼女本人は大人しい方なのに、よくこんな

高い声が出るかなって感じ。趣味が小唄と三味線というのも渋い！今後の活躍が楽しみである。

根谷美智子（ねや　みちこ）
本名・同じ
【アーツビジョン】
出身・福井県
昭和四十年十月四日生まれ

以前から色々やってるんだけど、今一つ目立たない人。OVA「新キューティーハニー」如月ハニー（昔は増山江威子）やOVA「ガッチャマン」白鳥のジュン（昔は杉山佳寿子）といった大役を大御所の後をうけて頑張っているのだが…。その他代表的な役では、「メタルファイターMIKU」サヤカ、「勇者警察ジェイデッカー」友永くるみ、OVA「バウンティドッグ」ヤヨイ・オキナ、などがある。最近は、「ガルキーバ」舞原このは、「ジュラトリッパー」ハカセ（本名スターチ）、「ガンダムW」女子学生A（リリーナの学友の金髪でショートカットの娘）、などを演っている。見た目には大人しそうだが、実は元気な女の子、こんな役が得意のようだ。彼女の顔を見たい人は、「メタルファイターMIKU」のビデオの巻末特典映像を見るか、彼女が所属する"劇団あかぺら倶楽部"の公演を観ることをお勧めする。彼女本人は明るく優しい人で、噂によると笑い上戸とか。

野上ゆかな（のがみ　ゆかな）
本名・同じ
【アーツビジョン】
出身・千葉県
昭和五十年一月六日生まれ

メジャー声優の中では一番の若手、若干二十歳。つい最近まで学生だった。彼女が演じている作品の中で「あずきちゃん」のあずき（野山あずさ）は必見。これを観ずして彼女は語れない、という位彼女のために存在しているようなキャラである。代表作は、「モルダイバー」大宇宙未来、「青空少女隊」下連雀ようこ、「愛天使ウェディングピーチ」谷間ゆり（エンジェルリリィ）など。デビュー当初は、彼女本人の性格を反映してか、元気でインパクトのある役を演っていたが、「あずきちゃん」や「ウェディングピーチ」は彼女のイメージを変えると共に、声優としての実力が相当高いことを証明した作品となった。最初聞いた時は、彼女が演ってるなんて全くわからなかったもんね。また彼女は、多趣味で有名で、入浴（これが最大の趣味らしい）、パソコン（マック）、演奏（ピアノ・フルート・バイオリン・シンセサイザー）、お菓子作り、などが主なものらしい。特技は、ウーロン茶を飲んでそのメーカーを当てられる事だとか。最近大学を卒業したので急に仕事が増えた。彼女本人は、本当に現代っ子という感じのお姉さんである。

は行

馬場澄江（ばば　すみえ）
【81プロデュース】
出身・東京都
?年十二月十二日生まれ

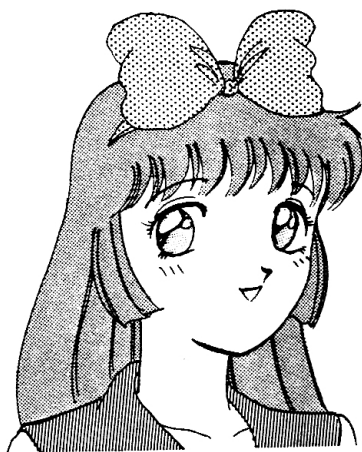
まだ仕事の数は少ないが、そのとっても可愛らしい声が印象的な声優さんである。代表作は「銀河戦国群雄伝ライ」の蘭々。とってもカワイイ小さな巫女さん役を見事に演

じている。チョイ役では「ポコニャン」、「おまかせスクラッパーズ」などにに出演。最近では、「ちびまる子ちゃん」で冬田さんというまる子のクラスメートを演っているが、その顔と声のギャップがスゴイんだこれが。一見の価値アリ。彼女本人は、とても大人しめの人で、すぐ側を通ってもわからないような感じの人である。頑張って下さい澄江さん！

林原めぐみ（はやしばら　めぐみ）
本名・同じ
【アーツビジョン】
出身・東京都
昭和四十二年三月三十日生まれ

声優界の第一人者。彼女のおとろえる所を知らない、安定した人気の秘密は、女性からも男性からも好かれるあのハッキリとした明るい人柄にあるのだろう。頂点まで登りつめた今でも、次々に新しいキャラクターに挑戦し、ますます役者としての幅を広げている。歌の方では、他の人気声優らが矢継ぎ早にCDを出し、粗製濫造の感を否めないのに対し、一年に一枚のペースを守り（オリジナルはたったの三枚！）、かなりクオリティーの高い物を提供している。オリコン初登場の順位がついに6位にまで上昇したとか、プレス枚数が十万枚を越えた、というのも十分頷ける話だ。つまりは、彼女のファンが年々増え続けているだけでなく、彼女の純粋なファンでなくても彼女のCDを買っているという事を物語っている。これは実はとてつもない事なのだ。

最近の主な役は、「ブルーシード」藤宮紅葉、「DNA2」倫子、「七つの海のティコ」ナナミ、「バウンティドック」ショーコ・ウズキ、「忍空」里穂子、「スレイヤーズ」リナ・インバース、CDドラマ「爆れつハンター」ティラ・ミス、「セイバーマリオネットR」ライム、「エヴァンゲリオン」綾波レイ、など。今まではほとんどなかった単発（ゲスト）ものも演りはじめ、劇場版「セーラームーンS」名夜竹姫子（珍しく現実的な女性役だった）、「ドラゴンボールZ」盲目の男の子（249話）、「ゴルドラン」菊姫（6話）、「ガリバーボーイ」スチールバット（14話）、など意外な面を見せてくれた。洋画はまだ少なく、「バニシングレッド」ヒロインの婦警など。TVCMでナレーションの仕事もたまにやっている。顔出しも増えてきており、「なるほどザワールド・秋の祭典」、「うるとら7：00」、NHK衛星「夏休みアニメ特選」司会のお姉さん、NHK「おはよう日本」などに出演。

彼女の趣味といえば、これももう有名になったアロマテラピー（芳香療法）。食べるのが好きというのも有名な話だし（焼いたレバー以外なんでも食べる）、でも最近ハマってる音楽が宗次郎のオカリナの曲というのはちょっと渋いかも。彼女は自分が声優であることをしっかりと認識し、それに喜びと充実感を覚えているので、舞台やコンサート活動などは今の所考えていないとの事。ファンとしては、本当に心の底から残念でならない。

柊美冬（ひいらぎ　みふゆ）
【ゆーりんプロダクション】
出身・神奈川県
？年二月二十四日生まれ

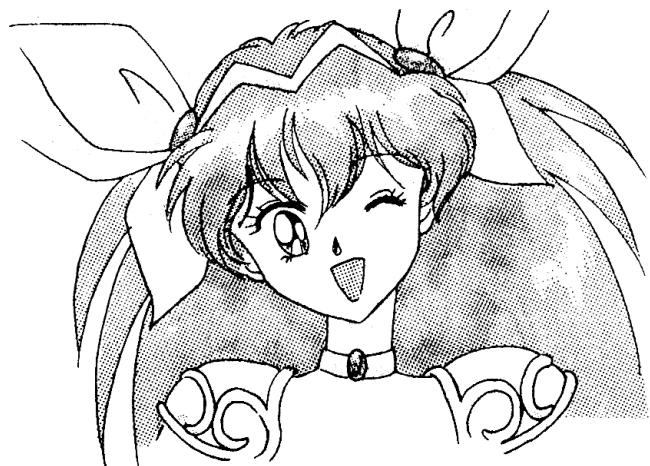
映画「飛べ！ペガサス」で主役のなおきを演っている。今までは小さな役が多く、「キャプテン翼J」沢田タケシ、「ロミオの青い空」ダンテ、など。チョイ役では、「クッキングパパ」、「ZENKI」人見、「DMA2」、CDドラマ「クリス・クロス」クラリス、「スレイヤーズ」、CDドラマ「黄龍の耳」、「ストリートファイターⅡV」、「ちびまる子ちゃん」とくちゃん、など。初の主役で頑張っている、今年期待の新人である。

氷上恭子（ひかみ　きょうこ）
本名・同じ
【江崎プロダクション】
出身・兵庫県
昭和四十四年一月十一日生まれ

山羊座のA型、趣味は料理・美術館めぐり、特技は関西弁とか。今でこそ「愛天使ウエディングピーチ」花咲ももこ役として御存知の方も多いかと思われるが、この役は実に

70人もの声優がオーディションを受け、その中から彼女が獲得したものなのだ。この「ウェディングピーチ」では、主役の3人の声優（氷上恭子、野上ゆかな、宮村優子）が"フリル"というグループを結成し、OP・EDを歌っている。

彼女は新人と見られているが、本格的にデビューしてもう3年近くなる。主な役では、「コボちゃん」白川、アキラ、「ラッキーマン」目立真千子（本人曰く、この役は名前が名前なだけに印象に残っているそうな）、など。他にチョイ役では、「ふしぎ遊戯」娘娘、「クッキングパパ」、「ストリートファイターII V」、「行け稲中卓球部」、「忍たま乱太郎」、「クレヨンしんちゃん」、ゲームでは、セガサターン「制服伝説プリティファイターX」マリン、などがある。と、このようにアニメばかり演っているように思われている彼女であるが、テレビ朝日系ドラマ「さんかくはあと」で山本耕史が演じた、二重人格の智雄の女版・智美の声を演じ、これが彼女の代表作となっている。彼女の声はどちらかと言えば少女役よりも大人っぽい役にその魅力を感じさせてくれるタイプなので、「ウエディングピーチ」の花咲ももこ役はそういう意味では新境地といった所であろう。

声優としてのデビューは、洋画「マネキン2」の女性2役。現在に至るまで、「マーフィーブラウン」、「フルハウス」、「ブロッサム」、「ヤングライダーズ」、「ファイベル」etc…、洋画には頻繁に出演している。本当のデビュー（この業界に入っての初仕事）は、すかいらーくの新入社員教育ビデオに顔出しで出演。そんな彼女は、大層な動物好きで、ヘビやトカゲなどのハ虫類までOKという程らしい。

日高奈留美（ひだか　なるみ）
本名・石田奈留美
【青年座】
出身・東京都
？年二月二十五日生まれ

さーてみなさんお待ちかね！「Gガンダム」アレンビー・ビアズリーの登場だ。大抵の人は、この役で彼女を知った事と思う。ヴォーカルアルバムでは"アレンビーの初恋"という歌で美声を聞かせてくれている。今までに演った役は、「楽しいウイローターン」ラッツとリール、「Vガンダム」シュラク隊の一人のミリエラ・カタン（青い髪のショートカットの娘）、「スペースオズの冒険」テディベア、「金髪のジェニー」フランシーヌ、など。洋画では、NHKのドラマ「天才少年ドギーハウザー」のキム、顔出しでは、映画「学校」などがある。彼女は青年座所属ということで、アニメの仕事はあまりやっていないが、今後も声優として頑張って欲しい。

深見梨加（ふかみ　りか）
【同人舎プロダクション】
出身・埼玉県
昭和三十八年八月八日生まれ

「セーラームーン」セーラーヴィーナスこと愛野美奈子役ですっかりお馴染み。声優としてのキャリアは長いが美奈子役で初めて脚光を浴びた。もともとアナウンサーの仕事から声優の方もやり始めたため、今でもアニメよりナレーションや洋画の仕事の方が多いようだ。最近、アニメも増え始め、OVA「マクロスプラス」ミュン・ファン・ローン、OVA「鬼切丸」節子、「忍空」晴香（15話）、「ウェディングピーチ」水魔アクエルダ、などがある。洋画は、現在のレギュラー「ヤングライダーズ」ルイーズ・マクラウド役で美奈子とはまた違ったボーイッシュな女性を演じている。美奈子のイメージでしか彼女を知らない人には是非お勧めする。ナレーションの方ではNHKの番組紹介、日テレ「ズームイン朝！」セブンティーンの宣伝（毎月15分）、ラジオ横浜・FMヨコハマで三菱自動車とそごうのCMなど。最近ではゲームの仕事も増えつつある。

彼女は今、Jリーグ・ジュビロ磐田のゴン中山の大ファンで、彼がやっていたスクーターのCMを見て、実際にそのスクーターを買ってしまったというエピソードがある。変わった特技では、米国公認のヒプノセラピスト（姓名判断）の資格を持

っているそうな（いつ取ったのかな）。彼女は本人も言っている通りアニメよりも洋画の方が得意であり、合っているようだ。今後も、アニメ、洋画、ナレーションと幅広く活躍していくであろうマルチ声優の一人である。

ま行

松熊　明子（まつくま　あきこ）
本名・井上明子
【青年座】
出身・福岡県
？年二月十日生まれ

　洋画には色々出ているが、アニメは１つしか演っていないので、彼女を知っている人は少ないいんじゃないかな。「Ｇガンダム」チボデーギャルズのリーダー的存在シャリー・レーン（赤茶の髪でツンツン頭の女性）を演っていた。３１話ではチボデーギャルズ４人（松熊明子・荒木香恵・関根章恵・山崎和佳奈）で歌を歌っていた。

松本　美和（まつもとみわ）
【フリーアトム】
出身・福岡県
？年１０月１５日生まれ

　この人の名前を知っている人もまずいないんじゃないかな。現在、「ウェディング・ピーチ」でじゃ魔ピーの声をアテている。実はこれが彼女のデビューなのである。代々木アニメーション学園の「未来を育てるオーディション」福岡地区で最優秀賞を受賞し、代アニ原宿校声優タレント科を平成７年３月に卒業したばかりの新人だったりする。現在のレギュラーは「ウェディング・ピーチ」だけだが、劇団フリーアトムにしょぞくして、いくつかの舞台にも出演している。本人曰く、番組の尾最初の方に出ていた"わるい子じゃ魔ピー"の方が、今の"よい子じゃ魔ピー"よりも好きだとか・・・。彼女の姿を見たい人は、フリーアトムの舞台をご覧になることをお勧めする。

まるたまり
本名・丸田麻里
【アーツビジョン】
出身・東京都
昭和三十六年四月二十五日生まれ

　最近めっきりアニメの仕事が減ってしまった。「絶対無敵ライジンオー」の星山吼児役で一躍有名になった彼女だが、最近ではチョイ役が多く、「セーラームーンＳ」う・タヒメー（１１４話）「Ｇガンダム」子供Ｂ（２７話）、「新忍たま乱太郎」茶屋のバアさん（３８話）「稲中卓球部」大神麗子（１６話）など幅広い役を演じている。ナレーションでは、２月の節分の頃にでんろく豆のＣＭをやっていた。また彼女は漫画家声優としてもしられており、現在はボイスアニメージュで声優漫画を描いたりもしている。舞台芸術家の父と舞台女優の母の血を引いているためか、多方面で芸術的才能を開花させている。ジャズを歌う趣味もあり、ジャズのコンテストに出たり、ジャズバーでライブ活動をしたりもするらしい。これは、とても"声優"というワクではくくれない、マルチアーティストとでも呼ぼうか。でも、もっと声優としても活躍してほしい。彼女本人は、明るいほんわかした感じの人である。

水谷優子
本名・同じ
【ぷろだくしょんバオバブ】
出身・愛知県
昭和三十九年十一月四日生まれ

　最近めっきり脇役が板についてしまった感のある彼女だが、昔は美少女ヒロイン専門だったんだぞ。まあ、このままいけば近い将来、名バイプレーヤーとか呼ばれるようになるんだろうなあ。ちょっと残念。この人の演じるアイドルキャラは天下一品で、「ドテラマン」サイコーユ鬼、「キャッ党忍伝てやんでえ」おミツ、「ようこそようこ」星花京子、「星くずパラダイス」伊集

院ありす、「ガクセイバー」安藤新菜、といった一連の役は彼女の最も得意とするところ。一方では「ちびまる子ちゃん」まる子の姉、「ＹＡＷＡＲＡ！」テレシコワ、「爆れつハンター」ショコラ・ミス、「セイバーマリオネットＲ」キャニー、など前記のキャピキャピ系とは対照的に低い声で落ち着いた演技をしている。

代表作は「マシンロボ・クロノスの大逆襲」レイナ・ストール、「赤い光弾ジリオン」アップル、「エースをねらえ２」岡ひろみ（必見！）、「天空戦記シュラト」（ラクシュ）「エリアル」岸田綾、「ふしぎの海のナディア」マリー、「コンパイラ」アセンブラ、「天地無用」美星（彼女の最高傑作！）、「ブラックジャック」ピノコ、「七つの海のティコ」シェリルなど。以上ここまでに挙げたキャラの１つでも見逃して（聞き逃して）いるものがあれば、本当の水谷優子ファンとは言えない。（うそうそ）

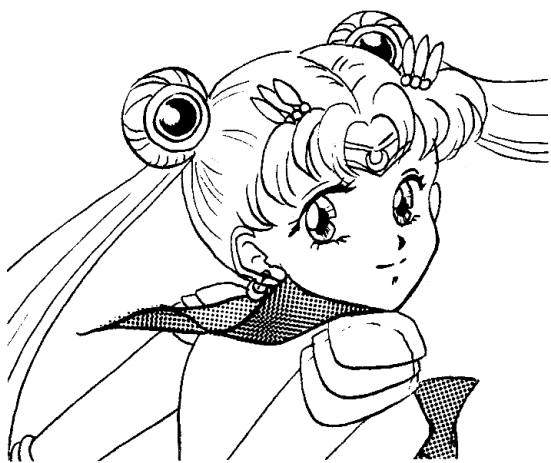
最近の役では「ハミングバード」中條仁美、「幽々白書」涙、「リューナイト」イオリ、「Ｇガンダム」ブラックジョーカー、「ジュラトリッパー」姫（本名ウェンディ）、「とんでぶーりん」国分リカコ（急病の引田有美の代役）、「ピンクパンサー」ハイジ（17話）、「忍空」緑（13話）、ＣＤドラマ「影技」フオウリー、ＣＤドラマ「ユナ２」プリンセス・ミラージュ、など（ホント脇役ばっかりやな）がある。洋画では、レギュラーでＮＨＫ衛生第２「ビバリーヒルズ青春白書」アンドレア役を演っている。ナレーションはフジＴＶの番組宣伝、日興証券のＴＶＣＭなど。ミッキーマウスのガールフレンドのミニーの声でもお馴染みで、ディズニーランドなどで彼女の声を聞くことができる。こうしてみても、演じる役の多彩さにはホント感心する。まじめな役、悪女、優しいお母さん、お嬢様など、本当に声優としての幅の広さを見せてくれている。

次から次へと新人が現れ、現在では中堅俳優（おいおい、あの水谷優子が中堅だって、マジかよ！）となった彼女だが、活動の幅を多方面に広げつつある。まずは音楽活動。「ＡＰＰＡＬＥ」、「ＹＯＵＭＩＸ」、「元気ドキドキしたい」、「ＶＩＢＩＴ」、「さらさら」の合計５枚のオリジナルＣＤをリリース。その他では、「勇気プリプリまっぷりま」（大龍界収録）、「走れタクシー」（山本正之とのデュエット）は絶対聴くべし。ラジオの方は「アニメ探偵団」、「のわぁんちゃってＳＡＹＹＯＵ」などのパーソナリティーでお馴染み（しかし・ケロリン・と言う愛称は彼女に失礼だと思うぞ、本人も嫌がっているみたいだし）。最後に小説家として、自分の体験をもとに書いた「声優シンデレラ」全３巻は絶賛発売中です。

声優界の・地味な天才・水谷優子をみんなで応援しよう。それにしても美星は最高だよなあ。

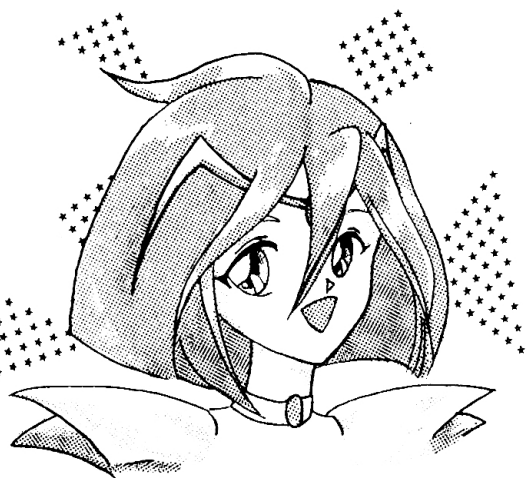
三石琴乃
本名・同じ
【アーツビジョン】
出身・東京都
昭和四十二年十二月八日生まれ

「月に代わっておしおきよ！」で巷に一大センセーションを巻き起こした彼女であるが、そのパワーは衰えを知らず、次々と新しい役に挑戦している。「ブルーシード」沢口小梅、ＯＶＡ「ＹＡＭＡＴＯ２５２０」マキのような不良っぽい役から、ＣＤドラマ「幼稚園戦記マダラ」サクヤママという母親役まで、年々演技の幅が広がっているようだ。代表作は「サイバーフォーミュラ」菅生あすか、「あげだま」平家いぶき、「タイラー」キム中尉、「ＹＡＩＢＡ」峰さやか、「餓狼伝説２」不知火舞、「ターちゃん」ヘレン、「ラムネ＆４０」シルバー・マウンテン、「ハミングバード」取石皐月、「アルスラーン戦記」エトワール、「ライ」紫紋、「銀河英雄伝説」カリンなど。やっぱり、月野うさぎと沢口小梅と取石皐月（カセットブック１は必聴）が出来るんだから声優としての実力は相当のものである。ただ、歌の方はからっきしなのは残念。オリジナルＣＤを５枚も出していることが今でも信じられない（ファンの方ゴメンナサイ）。

その他、ＮＨＫ教育ＴＶ「なぞなぞＱ（むしむしＱ）」で、ナビゲーターのお姉さんと蝶の声をやっている。この番組ではエレベーターガール風の声が聞けたりと、なかなか

の見ものである」。洋画はほとんどなく、ナレーションは「セラムン」系CMと、「楽珍スポーツ共和国」のペコちゃん（TVCM）などをやっていた。ラジオのパーソナリティーでは、「三石琴乃・部活しよ！」、「流星野郎のゲーム業界裏情報」（アシスタント、この本が出る頃には終わっている）をやっている。「流ゲー」の方が彼女が活き活きとしており、「部活しよ！」ははがきを読むのに精一杯で、あまり楽しく感じられないのはちょっと悲しい。イラストを描くのが得意で月刊コミックドラゴン・琴ちゃわんのいつも一緒懸命・で琴ちゃわんというキャラクターの4コマ漫画を連載中（ちなみに、この漫画に出てくるバニラという宇宙人のキャラの名付け親は私です！本当だよ！）。

一時期、虫垂炎と腹膜炎を併発して入院したり（このエピソードについては、エッセイ集「月・星・太陽」を参照）、様々なイベントや、ハミングバードのコンサート活動などで、なにかと忙しい彼女だが、今後も新しい役にどんどん挑戦して、役者としての幅を広げ、私たちにまた違った面を見せて欲しい。

宮村優子（みやむら　ゆうこ）
本名・同じ
【アーツビジョン】
出身・兵庫県
昭和四十七年十二月四日生まれ

代表作は「愛天使ウェディングピーチ」の珠野ひなぎく（エンジェルデイジー）。彼女はかねてより必殺技を叫ぶようなキャラクターを演じたかったそうで、エンジェルデイジーはまさに念願達成といえる。彼女は「ウエディングピーチ」のOP、EDを歌っている・フリル・のメンバーの一人でもある。デビューは、「勇者警察ジェイデッカー」のゲスト・妖精のフェイ。後に同番組でレジーナ役を演じ、レギュラーとなる。最近では「黄金勇者ゴルドラン」のゲスト・クリス（5話）、OVA「セイバーマリオネットR」セイバー・ルン（1巻）などに出演。アニメ以外では、ゲームセンターなどにある「ストリートファイターII」のモグラたたきの春麗、ガンダムキャンペーンのTVCM、FM富士のパーソナリティー、「ストリートファイターZERO」春麗とローズ（新キャラ）、などを演っている。現在は、ひなぎくの他に、「十二戦支爆烈エトレンジャー」スコレ、「新世紀エヴァンゲリオン」惣流・アスカ・ラングレー、OVA「美少女遊撃隊バトルスキッパー」榊志保子、ラジオドラマ「ぼくのマリー」マリー、などで活躍中。

や行

山崎和佳奈（やまざき　わかな）
本名・同じ
【青二プロダクション】
出身・神奈川県横浜市
昭和四十年三月二十一日生まれ

初レギュラーは「緊急発進セイバーキッズ」の天神林ラン。デビューは、「新魔法使いサリー」の女生徒役。洋画等はあまりなく、アニメ作品主体で、演じた役は数多い。主なものを挙げると、「ママレードボーイ」秋月茗子のような普通の恋する女の子、「ママは小学4年生」高橋ちぐさや、「ミラクルガールズ」マリエのような我がままで高飛車なお嬢様、ゲーム「スーパーリアル麻雀PV」藤原綾のような清楚可憐で病弱な少女、「ガリバーボーイ」妖精フィービーや「Gガンダム」バニー・ヒギンズのような活発で元気な娘、「ゲンジ通信あげだま」吉良々ひとみ先生や「真拳伝説タイトロード」サラ・ジョーンズのような大人の女性、「スーパービックリマン」の

アマゾアムルや「セーラームーンR」コーアンといった悪役から、「GS美神」マリアのようなアンドロイドまで実に多彩である。最近のゲストでは「セーラームーンSS」シスターマリア（133話）、「ゴルドラン」保母さん（13話）で、どちらも心優しく清純無垢な女性を演じている。

この中でも特筆すべきは、「スーパービックリマン」のアムルと月光聖アマゾアムル（同一キャラクター）で、天使の少女が悪魔の女戦士に豹変する様（可愛らしい少女の声から凄味のきいた悪女の声に変わる様）は、見る者（聴く者）を感嘆させるものがある。彼女は、幅広い芸域をもった方で、またその透き通るような美しい声はとても印象的だ。まだ主役こそもっていないが、脇役でもその存在感は人一倍光る声優さんである。その他「おはようナイスディ」のナレーションでも活躍中。

弥生みつき（やよい　みつき）
本名・井上弥生
【青年座映画放送】
出身・東京都
昭和三十八年三月十五日生まれ

声優というよりは女優の方が本業のようである。声の仕事はあまり多くなく、代表的な役では、OVA「ふぁんたじあ」マロン、「レジェンドオブクリスタニア」アデリシア、「ブルーシード」藤宮楓、「機動戦士ガンダム逆襲のシャア」チェーン・アギ、「オネアミスの翼」リイクニ、CDドラマ「ガイア・ギア」クリシュナ、などがある。最近では、「ZENKI」で光陰（千明の先祖・千早の侍女）というまじめな女性を演っていた。女優の仕事は、声優を始める4年位前からやっていたそうである。確認できたものでは、映画「釣りバカ日誌5」以降の作品、火曜サスペンス劇場「まりえの客」三宅裕司演じる柴山元の愛人・一条聡子役（病院で寝たきりの女性で回想シーンに登場）、平成6年の年末時代劇、NHK時代劇ドラマ、などに出演していた。女優をやっている人なので、アフレコの時には、つい体を動かしてしまうとか、（本人はとても落ち着いた感じの人なんだけど）。声優としては、楓のような大人しい役から、マロンのように元気一杯の女の子まで、幅広く演じているが、まだまだ実力不足といった所である。今後も、アニメだけでなく、TVドラマなどの顔出しで彼女を見ることができるだろう。

行

渡辺久美子（わたなべ　くみこ）
【アーツビジョン】
出身・千葉県
？年十月七日生まれ

この人もう中堅声優と呼ばれるんだろうなぁ。あまり目立たないが、少年役の上手さには定評がある。「サムライトルーパー」山野純、「勇者エクスカイザー」星川コウタ、「あげだま」ワープ郎、などは有名。最近は女性役も演じるようになり、「アルスラーン戦記」アルフリード、「ムカムカパラダイス」主役・鹿谷初葉、などは彼女の新たな代表作となった。しかし、大人の女性に初めて本格的に挑戦（?）した「機動戦士Vガンダム」のカテジナ・ルースが今一つだったのはちょっと残念。ゲストでは、「セーラームーンSS」着ぐるみ子ちゃん、「ドラえもん」のちょっとした役などその多彩さには驚くべきものがある。現在、「ぼのぼの」ぼのぼの（ラッコ）役で活躍中。

彼女は、養成所時代、林原めぐみ、佐々木望、天野由梨らと共に学んでおり、この4人は私生活でもとても仲がいいそうな。彼女は、これら3人の声優諸氏と比べるとやはり派手さに欠けるかと思われるが、それはもしかしたら、決まった声質を持たない彼女の演技が、ファンに固定したキャラのイメージを抱かせず、彼女に自由な立ち回りを約束することの代償なのかもしれない。彼女はこれからも淡々と演じていくのだろう。

元祖「オールマイティ声優」松島みのりの魅力

一九七六年一〇月からの二年半、少女たちの胸をときめかしたアニメがありました。そう、みなさんご存じの「キャンディ・キャンディ」です。あの主人公キャンディの「おてんば」で「かわいらしい」キャラクターは、一五年以上たった今でも忘れられない人は多いと思います。
　この主人公を演じていたのが、松島みのりさんです。
　松島さんはTVアニメ草創期から活躍されていて、現在でも「世界丸見え・TV特捜部」のナレーションや「超力戦隊オーレンジャー」の皇妃役、「小学校四年・理科」のマッキー役などで活躍中です。
　松島さんは、芸幅が広いのが特徴で、女の子役と男の子役をまんべんなく、しかも完璧にこなせる数少ない声優の一人です。いわば「オールマイティタイプ」といえます。
　一般に女性声優は、男性声優に比べて、低音から高音と声域が広いため、女性役の声だけでなく、少年みたいな声を出すことができます。
　しかし「演技」とはまた別問題です。「声が出せる」のと、「演技ができる」のとは決してイコールではないのです。実際、今の声優で女の子役と男の子役を完璧にこなせる声優は、本当に少ないと思います。
　この「オールマイティータイプ」の最近の声優は、林原めぐみさんを始めとして、大谷育江さん、岩坪理江さん、吉田古奈美さんといったところで、希少価値の高い存在です。その草分けともいえる松島みのりさんは、したがって偉大な声優であるということができます。
　さて、松島さんの「声のタイプ」は、1．少年役　2．女性役（成年後）3．少女役の三つがあります。
　TVアニメでの代表的なキャラクターは、別表にあげた通りです。もちろん、この他にもいろいろな役を演じており、松島さんの演技力の豊かさがよくわかります。まったく頭が下がるばかりです。

1．少年役
どろろ（どろろ）
ヒロシ（怪物くん）
トト夫（ふしぎなメルモ）
ミート（キン肉マン）
晴海大五郎Jr（コンポラキッド）
ギョピ（きんぎょ注意報）

2．少女役（成年後）
響子の母（めぞん一刻）
ダリア（新メープルタウン物語～パームタウン編～）
ママ（21エモン）

3．少女役
水島カオル（スーパージェッター）
マリー（黄金バット）
上条茜（あかねちゃん）
洋子（キックの鬼）
浅井葉子／おチャラ（国松様のお通りだい）
弓さやか（マジンガーZ）
ひよ（てんとう虫の歌）
サチ子（ドカベン）
キャンディ（キャンディ・キャンディ）
松宮トシコ／トコ（魔法少女ララベル）
ルーシー・メイ（南の虹のルーシー）
菜々子（昭和アホ草子・あかぬけ一番）

　松島さんの役柄を分析すると、あることに気がつきます。「少女役」では、キャンディにみられるように「おてんばで、かわいくて、人情に厚い」少女を演じることが多いのに対し、「少年役」ではミートに代表されるように「品行方正な」少年を演じることが多いのです。この辺りは大変興味深いところでしょう。

☆　☆

　まず1の少年役から。
　この中では、何といってもミート（キン肉マン）でしょう。「キン肉マン」は周知の通り、八三年から四年ほど続いた人気アニメですが、神谷明さんの「豪快磊楽」なキン肉マンに対し、その対極ともいえる「品行方正」さでもって見事なバランスを作り出していました。
　またぎょぴちゃん（きんぎょ注意報）も忘れられません。「きんぎょ注意報」は、かないみかさん・高田由実さん・飛田展男さんといった実力のある声優さんがそろっていて、それだけでも興味深かったのですが（ちなみに国府田マリ子さんも出演していたんですよ）、その中でも松島さんは「燻銀」的な演技をみせ、番組全体を味のあるものにしたといえます。

☆　☆

　次に、2の女性役（成年後）について。
　ここで注目すべきは「パームタウン編」のダリヤ役です。
　この「新メープルタウン物語～パームタウン編」も「声優」という面では大変興味深い作品で、例えばあの「ガッチャマン」の森功至さんと杉山佳寿子さんが、なんと夫婦役で共演していたのです。
　またこの松島さんと杉山さんは、

「パームタウン編」では仲の良い友達として描かれていますが、後述の「あかねちゃん」では姉妹の役で出演していました。

というように、注目すべき点の多い作品でした。（ちなみにローリィ役の池本小百合さんの演技は素晴らしいですよ）

この作品では、松島さんは時々は恐いけど、根はとても夫や子供たち思いの母親を見事に演じています。

松島さんは、この作品以前だとそんなにこのような「成年後の女性役」「母親役」は多くなかったようなので、松島さんの新しい可能性を開いた作品として特筆すべきでしょう。

ちなみに今「世界まる見え・TV特捜部」のナレーションでは、この2のタイプの役柄が圧倒的に多く、毎回毎回違ったタイプの役柄を演じています。が、どれも味わい深い演技をしていて、筆者などは見る度に感動してしまいます。

☆　☆

そして、いよいよ松島さんの本流ともいうべき「少女役」です。

松島さんは、「少年役」も「成年後の女性役」も味わい深いのはもちろんのことです。が、やはり松島さんというと「少女役」でしょう。

別表のとおり、松島さんは数多くの「少女役」を演じています。

しかしやはり「キャンディ・キャンディ」が代表作であり、松島さんの「少女役」作品の最高傑作です。

キャンディは、常に笑顔を忘れない、「おてんばで、明るい」キャラクターです。

その声には「暖かみ」があり、冷たい氷を溶かすようです。

「キャンディ・キャンディ」は、作品全体でも素晴らしい出来で、動画や美術も高いレベルにあります。

しかし、この作品の魅力は「キャンディ」にあり、その「キャンディ」の魅力は松島さんが作りだしたのです。「アニメのキャラクター」は絵だけではなく、声が素晴らしくないと魅力的にはならない、という代表例です。

この「キャンディ・キャンディ」が当時の人気番組になったのも、一重に松島さんの力があってこそ、といえるでしょう。

☆　☆

このキャンディ役に代表されるように、松島さんの「少女役」は「おてんばで、かわいくて、人情味が厚い」役が多く、その愛にあふれた演技は、我々を元気づけてくれます。

その中でも、「国松さまのお通りだい」の「おチャラ」は特筆に値します。

「国松さまのお通りだい」は一九七一年一〇月から七二年九月の一年間、フジテレビ系（関東地区では水曜日七時）で放映された番組で、大山のぶ代さん演じる石田国松を主人公とする「学園スポーツ」アニメです。原作は巨匠ちばてつや氏。

この頃は、まさに高度経済成長期の真っ只中であり、日本の古き良き伝統——例えば「下町的人情」というような暖かみのある人間関係——が失われつつあった時代でした。

それ以降、日本人の多くは自分勝手になっていきます。例えば、「女性が強くなった」とよく言われますが、単に「わがまま」になっただけに思うのです。

アニメの世界でも、日本の古き良き時代を描写した作品も、キャラクターも皆無となりました。（例外として、近年では「元気爆発ガンバルガー」がありましたが）

そう、失われてしまった「日本の古き良き女性」とは、まさに、「おチャラ」のようなキャラクターをいうのです。

そういう意味で、「国松様…」放映から四半世紀を経てなお、その価値は光輝いているのです。

この「おチャラ」は、主人公石田国松を、ある時は叱咤し、またある時はその優しさで暖かく包むという女性です。まさしく、昔の日本人の女性の大多数を占めていた、「おてんば」で「かわいく」て「思いやりのある」女性そのものです。

当然、このキャラクターの演技にも、この「厳しさ」「優しさ」を表現する、相当の演技力が求められます。今の多くのアニメキャラクターのように、ただ気が強いというだけではないのです。

そしてまた原作が素晴らしいだけに、そのイメージをいかに守り、発展させるかという難題もあります。

その辺りを、松島さんは、同じ原作者の「あかねちゃん」などで培った演技力で、実に見事に演じています。そしてまた、この「おチャラ」での経験が、「キャンディ・キャンディ」で結実しているのです。

☆　☆

最近の松島さんは、前述の通りナレーション等で活躍中で、ますます演技に磨きがかかっています

これからのますますの活躍を期待しています。

（鎮）

はじめに

今や完璧にオヤジ声優ファン（注・「オヤジ声優」のファンではない）になってしまった私は、この本のスタッフから原稿の依頼を受け大いに悩んだ。

そして、「いやあ、もういまどきの声優さんの話には全然ついていけないからねえ。それを無理して書いてもさ、『知ったかぶりしてる』って笑われるだけだから…。」と正直に返答することにしたのであった。

ところが、そのスタッフであり後輩でもある彼は、私の答えに予想外の反応をみせた。「あ、それいいスね、そのことを書いていただければ…」。

ということで、話は決まった。

私はここで、「いかに私が最近の若手について知らないか」についてを書き、それを皆さんに笑ってもらうことになった訳である…。

ところで、私は普段（苦笑）どんなスタイルで「知ったかぶり」をしているかというと、タイトルにもあるとおり、ギャグの形式で行うことが圧倒的に多い。

そうしておくと、仮に事実と違うことを言ってしまっても、これはボケてるのだな、と善意に勘違いしてくれることもあるので都合がいいのだ。（えげつないやっちゃのう…）

おそらく、この原稿のなかでも一つや二つ、本物のボケをかましていることであろう。

そもそも（最近の若手声優かどうかという）選考基準からして、正直責任が持てない。

青二プロ版『赤ずきんチャチャ』ともいうべき番組『キテレツ大百科』（三ッ矢雄二や島本須美が出てるでしょ?）とかで一応新顔のチェックもしているのだが、知ったかぶりにもやはり限界はある。

とりあえず、このところロボットを操る少年役での出演作が続き、その内の一つ『ジャイアントロボ』の出演者の中では名実ともに「こっち来て肩もめ!」の立場の方、そう、山口勝平ちゃん（笑）。（実際、肩以外に「腰もめ!」とか「さあて勝平、膏薬貼り代えるの手伝ってくれんかのう?」の方もいらっしゃいそうだけど、それはさておき…）

既に異論はあるかもしれないが、彼は含めるが残りのメインキャラ役の方は含めない（ごめんなさい）、といったあたりで曖昧なボーダーを引かせてもらった。

そして60人ほど並べ、事典の体裁だけは整えたつもりでいる。

時事ネタや一発ネタばかりなので、もとより読み返しに耐える内容ではないが、本書の発行日から逆算される執筆日を想起しながらお読みいただきたい。

なお、ここに著わしたものは、無知もしくは知ってることだけの羅列から生まれ出たものであり、そして、あくまでこの私、この「しょうもないオヤジ声優ファン」を皆さんに笑っていただくためのものである。

決して（事典に入っている・いないも含め）その声優さんと彼等のファンの方々を笑うためのものではないことを、予めここでお断りしておきたい。

ギャグ版 声優小辞典

知ったかぶり野郎・編

★声優小事典

麻見順子
＊今後、ピンク髪の少女の役を独占して行くかもしれないので目が離せない。（日高薫とシャランラしか知らないくせに…）

麻生かほ里
＊しまった、まだ知ったかぶりも出来ない…。（じゃ、すんなよ！まあ、いきなりEDで歌っているけど、看護婦くずれ（笑）ではなさそうだ？）

天野由梨
＊そのシリーズの冒頭から登場してるプロパーなヒロインなのに、物語の展開上出番が少なかったりしてその結果途中参加組よりも影が薄くなる、という割りの合わない役が続いたらしい（涙）。そのせいだろうか、最近鬼のように芸風を広げまくっているように思えるのは？（単にイメチェンを図っているだけという噂もあるが）

荒木香恵
＊一部の新聞や情報誌のTV欄では、京田尚子が声の出演のトップだったり彼女だけしか載ってなかったりする。あれでは、「ふしぎ遊戯」は婆さん（失礼）が主役と思われてしまうぞ、だれか何とかしてくれ。（涙）

石川寛美
＊私に「ショタコンおじさん」の存在を教えてくれた人。もしかしたら、増やしてしまった人であるかもしれない。（しかし、その半分は石田敦子の責任だ!?）

石田彰
＊水野光一やフィッシュ・アイなど、その集団の中では比較的まともな奴だと思っていたら実は（少なくとも恋愛対象の点で）一番の変態だった、という役で有名らしい。そういえば、新スタートレックのウェスリーの初恋相手（声・三石琴乃）も、変身宇宙人で…。

井上喜久子
＊この方は、（イベントの時とかは、その役になって出てきているだけであって）けっして「天然」ではないと思う。（でも時々「半天然」ぐらいかな?と弱気にさせられることもある…）

岩男潤子
＊彼女が「ロックマン」の声だったらハマったのに。（名前ネタギャグは知ったかぶり野郎が使う最後の手段。いや、彼女については「昔の名前で出ていた」当時を意外によく知ってたりするのだが…）

岩永哲哉
＊某雑誌のアニメコーナーで「火曜日に新番組はない」なんて書かれた時（これは実話）「ちくしょう!こうなったら、そのことで目立ってやる～!」と前向きな発言をしたという噂は本当だろうか？

上田祐司
＊古川登志夫系の声だという人と青野武系の声だという人がいる。（私は後者）まあ、某番組によると元々一人の宇宙人（笑）だったらしいから（以下略）。

太田真一郎
＊「料理の鉄人」と「週刊スタミナ天国」しか見ていない視聴者だと、フジテレビの局アナだと思っている人もいるかもしれない。

大谷育江
＊この方がいなければ、私はSMAPをほとんど知らないまま今日まで来ていたかもしれない。また、外国テレビ映画に対する関心と興味を維持させてくれた大恩人でもある。（でも、本命はモンガー!）

緒方恵美
＊EDクレジットに『エメロード緒方恵美』とあったのを見て腰を抜かさんばかりに驚いたという蔵馬ファンは、（せっかくゲームマスター天沼の亀井芳子がタイトル

ロールなのに）「ヤマトタケル」を見てなかった人であろうから、「ゴルドラン」の面白さが8割方わからないという推論が成り立つ。（彼女にとっての『GS美神』は、林原めぐみにとっての『めぞん一刻』、三石琴乃にとっての『てやんでぇ』に相当するらしい）

置鮎龍太郎

＊『エルハザード』の陣内の「笑い」がえらく評判で、マニアの間では「これで佐々木功・神谷明ラインの後継者ができた」ともっぱらの噂だとか。

小野寺麻理子

＊私の場合、レスラーで麻理子ていうと彼女になってしまう。（プラムファンの人、許してね）

柿沼紫乃

＊「カウントダウンTV」のマネっ子という汚名を着せられ（泣）、たった一人でキクチ君たちCGキャラ三人に立ち向かう洋楽ファンの大阪なるちゃんだが、舞台の方ではセーラー戦士に勝るとも劣らない（芝居だから正真正銘の）コスプレしているらしい。（セラムンSSでは、演劇の世界への夢を持っていた彼女をホークス・アイが主催者に化けて襲う、という展開を期待していたのだが、それにしても劇団青杜の「ペガサス」って一体…）

笠原弘子

＊惜しい、主題歌の歌詞に「光」と「風」は出て来るのに…。あれが『ロミオの青い海』（「海へ…」）だったら良かったんだけど…。（何のこっちゃ。ところで、「亜美ちゃん」にしても、彼女の場合フォローができるんだよねえ?）

柏倉つとむ

＊私が調べた範囲では、「かしわくら」以外（の似たような読み）ではどのワープロも「柏倉」と変換してくれなかった。で、何が言いたいのかというと、『ぴあ』で、「MOTHER」の出演者が全滅していた誤植は変換ミスではないないな、ということ。『柏原つとむ、鶴ひとみ、三石琴之』となっていたのだ。（号泣）

金丸淳一

＊私みたいに『チンプイ』の「小政」を映画を含めて全部見た、というのは彼のファンの間でも少数派かもしれない。少なくとも、それで彼を一番知っているという人は絶対にいないだろう。あ、ついでに「チンペイ」も結構見てた方だな。（最近またクルマ関係のアニメ（NSXとかFTOとか登場してくるヤツね）に出てるそうで、今度はメカニックの役らしい?）

金月真実

＊PCエンジンの延命に貢献した人の内の一人。ご本人は、アメリカの大学で「卒業」にハマっているらしい。

草尾毅

＊『DBZ』にトランクス役で初めて参加したとき、周りが有名先輩声優ばっかりだったので、自然と（トランクスみたいに）言葉使いが丁寧になった、と誰かから聞いたことがある。

草地章江

＊（ジェフ）トレーシー家の息子兄弟について、一体どれくらい知識があるだろう?（椎名へきるも。でも、玉川紗己子の場合（笑）、知らないとは言わせない）

熊谷ニーナ

＊最初、富永みーなのニセ者だと思った。（いるか、そんなの!）

くればやしたくみ

＊私の知る限り（字数で）最長芸名の声優。（多分「こおろぎさとみ」「ならはしみき」等と同じ理由でだろう?）

國府田マリ子

＊「スペースオズ」の頃から注目してたのが、ちょっとだけ自慢。その後、夜のアニメで主役級の出演がないのが、ちょっとだけ不満（というより意外）。

こおろぎさとみ

＊堂々と飲酒・喫煙体験を語ってくれるあなどりがたい元幼稚園の先生。（ところで、一体どちらの姓を名乗っているのだろう?いや、「こおろぎは本名である」をクイズ（ひっかけ問題）にしたくて。）

★声優小事典

小桜エツ子
＊なぜじゃ〜。なぜ「ミャオ〜ン」の音域で喋ってくれんのじゃ〜。

子安武人
＊渋めの兄ちゃんとか好青年とか、とにかく善玉なんて、そんなの子安武人じゃない！（勝手なことを）

阪口大助
＊「知ったかぶりでいいんだったら、芝居がいい、面白い、て言ってれば十分通用しますよ。」と後輩にアドバイスされてしまった…。アリガト…。（なんだかなあ）

桜井智
＊この方も堂々と（?）過去を語っている以上、私も当時のことを知ったかぶりでなく知っていることを告白せねばならないだろう、と言いたいところだが、実はまるっきり見てなかったりする（本当）から世の中面白い。（ところで、岩男潤子と残党同志（あのね…）で本格的に組ませるって企画ってやっぱりあるんだろうね）

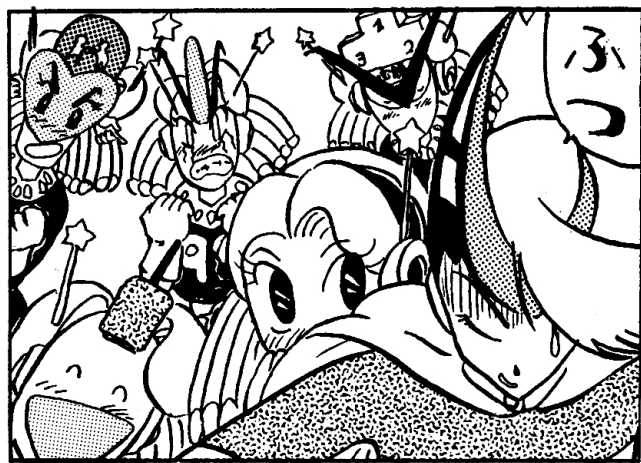
佐久間レイ
＊今だったら、メロディちゃんのまま堂々とマウンドに上ることも不可能ではないんだけど…。

佐々木望
＊私「幽白の舞台挨拶では、彼が『飛影』」友人A「レイアースなら、しっかり『クレフ』」友人B「でも隣にO嬢がいなければ…」（悪い仲間ばかりですみません）

椎名へきる
＊兄さまに花輪君と丸尾君がいるんじゃ、交換日記は遠慮させてもらう。（パパがバルログだったり、お姉さんが鷲羽ちゃんてのも…）

白鳥由里
＊UFOキャッチャーのマーフィーとモコナの縫いぐるみの隣に、今度ぶーりんが加わった私の枕元。（お前、歳幾つだよ…）

鈴木真仁
＊彼女が「南ちゃん的キャラ」を演じることについて、元共演者の方々のコメントをいただきたく思う。（再放送もやったことだし）

関智一
＊「ふっ、天才だから、カセットブックへの出演が、原作者をして

そのキャラを修正せしめてしまったな、別の赤ハチマキの男に」で、この先斎藤一から「だからお前はヒヨッコなのだ〜」て言われたりして？まあオーレンジャーでは二重の意味で子供扱いされているそうだが。（ところでガンダムシリーズの主役からC翼の若島津へと、ってお前『丸尾君』の役狙ってねえか？そして10年後、なおも続いている「ガンダム」に悪役として復帰する計画が…）

高木渉
＊どちらかというとジミー君だった彼（おいおい）も、「ぶーりん」のジミー君では結構目立ったんじゃないだろうか？

瀧本富士子
＊友人にかかると「高山みなみ系の人」で済まされてしまう。（緒方恵美とかもそう）でも、それって早苗のあねご役を意識した上での発言なので、案外彼もあなどれない。

丹下桜
＊皆、「夢千代日記」の早坂『あ

きら』の方も知ってるよね？

冬馬由美

＊どうせなら、「魔法騎士レイアース」のチゼータのお姫様をもう一人増やして三姉妹にし、彼女も出してもらいたかった（笑）。でも、そんなことよりも何よりも、「ダイの大冒険」が続いて欲しかった（泣）。（ところで、一年に描く『著作』の枚数が、まるたまり先生（当然の呼称）よりも多いという噂は本当だろうか？）

富永みーな

＊そういえば、あの『ちょっとだけドロシーちゃん』も、アニメになったら原作にはなかった変身能力が加わった少女漫画のヒロイン役で有名だったんですの～。今だったら、無表情でバトンをふりまわしたりして？（「大草小家」と略して呼んでた懐かしきあの頃…）

中川亜紀子

＊名前、おぼえています。

中嶋美智代

＊はたして「ピーターパン」は日高のり子と共通の話題になり得るのだろうか。（ところで、せっかく（？）ホーリーアップにさよならした『しいねちゃん』なのに、またもや残りの二人が手持ち無沙汰になるのが欠点の技（ソウシ談）の構成員になってしまったのね…）

永島由子

＊この方も、パッフィーとかエメロード姫とか赤木晴子のような役もやりたくて、この世界に入ってきたんだと思うけど…。（せめて大阪弁のお姫様さまとか、ってテレビ見ながらこれ書いてたら偶然にも…）

中山真奈美

＊友人に「流川親衛隊の子」の人で通じてしまった（通じるな！）。個人的には「4回勝つと（服も）クリアできる子」の方だが。（お父さんが羨ましい）

西原久美子

＊某麻雀ゲームで彼女が担当しているキャラクターだけ飛び抜けて評判がよろしくない。といっても、どうやら（バニーちゃんのくせに）負かしても露出度にほとんど変化がないからしい。だから、たとえその続編においても同じような状況（今度はウサギ型変身生物）であろうとも、私は何とも思ってませんよ、本当に。

西村ちなみ

＊言えぬッ、衛星放送の契約をする直接のきっかけになった番組がアレだったなんて…、言えぬッ！
（バレてまんがな…）

根谷美智子

＊先代ハニーの増山江威子といきなり比較するのは酷だと思うが、富田耕生は彼女との共演の方が楽しかったりして？（す、すみません。ところで、比べることができるっていうのは、もう若くはない証拠）

野上ゆかな

＊法学部の学生さんだそうだ。いずれは弁護士声優として日俳連で…。

林延年

＊「俺が歌ってるのを聞けっ！」

林原めぐみ

＊この方の場合、本当に別録りしてても「いや、林原だから」と思われてしまったりして？（アルバムの売り上げもスゴイが、「いきなり6位」だけで誰の何のことか分ってしまう声優ファンもスゴイ!?「アヒルのクワック」の頃、これは男の子役声優として今後が楽しみと思ったものだが、他の人々は歌の方により関心が行ってしまったのね）

柊美冬

＊寒い名前だと思わんか？（しかし、もはやこのフレーズも「はたして何人が…」だな、白石冬美も

★声優小事典

出てたなんて付け加えたところで）

氷上恭子

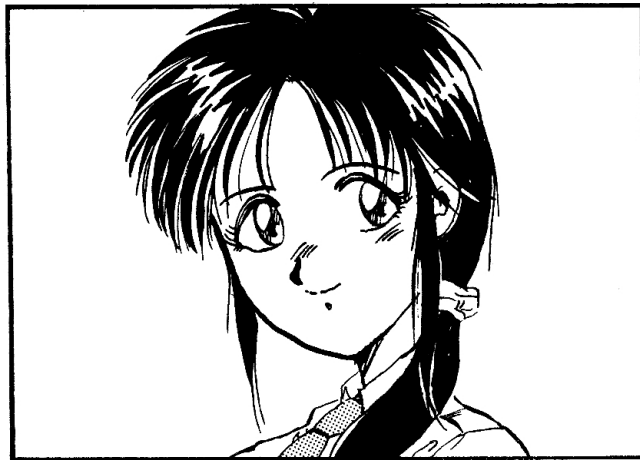
＊やっぱり、（たとえ声だけでも）ドラマで主役と『共演』していたほうが、世間一般の人から、より認知されるんだなあ。（ＴＶ情報誌のＱ＆Ａコーナーで、「あの声の人は誰？」とあるのを数回見た。そして、この方も「お金に目のない姉ちゃん役」ができる地方の出身ということを知った…）

久川綾

＊あんさんもテレビで堂々と大阪弁しゃべりとうて、うずうずしてはったんやねえ（笑）。ほかならぬ永島由子が出てる「平成＆女子中学生版『ムーの白鯨』」（古い…、ハズしたか？）に殴り込んできたのが何よりの証拠。（しかし、その初登場の際の話は一時「天地無用！」ところにより「青空少女隊」だった…）

日高奈留美

＊とりあえず、天野由梨より若いらしい。

檜山修之

＊岸谷五朗に、声優ファンの恐ろしさを間接的に思い知らせてしまった方。（ラジオで何か言うと、すぐ文句が来て「恐れ入りました！」させられてしまったノダ…）

平松晶子

＊私の場合、「詩織」ていうと彼女になってしまう。でも、麻雀ゲーム版「同級生」の「やよい」さんにその面影はない。（ひどいわ…。ところで、また別の某麻雀ゲームだが「検挙しちゃうぞ！」が決め台詞だった婦警さんのＣＶに彼女が…。いいのか？）

渕崎ゆり子

＊「ドテラマン」の『音多』オニゾウ君の台詞を何年周期かで知りたくなる私。（「料理バンザイ！」をこの方目当てで見てるのは日本で私だけだろう…）

古本新之輔

＊古田新太と混同されたりしたらちょっとイヤだなあ。（知らない人は知らなくていいです）

増村明美

＊タイミングが悪いせいで、まだ人間の役をやってるところを見たことがない私。（失礼ながら、ネズミやら妖精やらばっかりで）

松野太紀

＊高笑いをしながらムチを振り回す先生と、幼女が着替えるところを見て赤面するお馬さんの役の人。でも、これって（言い方はともかく）一般的な認識でもあるはず。（ところで、あのペガサスだが、まさか体が各パーツに分解してタキシード仮面の体に装着する、という設定ではあるまいな？）

松本梨香

＊子忍の隊長は俺でいッ！（落ちぶれた黒羽競子が見たい私）

三木眞一郎

＊売り出し中の頃（今も？）「今81プロデュースに依頼すると、もれなく三木眞一郎がついてきます」状態だった、という噂を聞いた。（「801の丁稚みたいなものだ」という台詞を間違えて「81の」と言ってしまったという噂も…）

三石琴乃

＊今の声優ブームの特集記事を組む際の「一般」マスコミの合い言葉。『とりあえず「三石琴乃の一日」おっかけとけ！』（でも、ファン必見のＮＨＫ教育「むしむしＱ」は取材対象からはずされがち）

緑川光

＊流川みたいな寡黙なキャラって、声優やそのファンにとっては善し悪しじゃないかと思うのだがどうだろう？（小さいころのあだ名が「グリーン・リバー・ライト」と「リョク・セン・コウ」、ということはアレ本名なのか、うぅむ…。

ところで、筐体買えるほど格闘ゲームにお金注ぎ込んだという噂は本当だろうか?)

皆口裕子

*この方がナレーションやっていると、心の準備ができるというか、いざ「ごめんなさい」や「グラウンドの土を袋に詰めて持ち帰る」シーンになっても悲惨な感じがしなくなっていい。(あれ?今日は何か声がヘンだなあ、と思ったら、そのコンビニはヤマザキデイリーストアだった…)

宮村優子

*佐々木優子・ちびまる子ちゃんのお婆さん、小林優子・山本シナ先生、水谷優子・ブラック・ジョーカー…。あなたも、その頃までにその域まで達せられるよう、老婆心ながら(笑)。

森川智之

*持ち役が「だんだんバカになっていくキャラ」から「最初からバカやってるキャラ」にシフトしつつある。(ひどいことを…)

矢島晶子

*『マイトガイン』で吉永サリーが「クレヨンしんちゃんショー」のバイトをするところ見たかったが、拝見できたのは『セラムンS』でだった。でも、もし(恒例プッツン姉ちゃんとして)『ガンダムW』でやったりしたら、妙にハマってしまってコワそうだなあ…。(ところで、しんちゃんの世界では、戸愚呂(弟)も仙水忍も軀も皆さん勝手が違うようで…)

梁田未夏

*私「実は、まだ顔知らないんだけど、もしかして梁田清之の妹とか親類の人なの?」後輩「いえ、奥さんです。へへへっ、ひと安心したでしょ?」私「……、うん!」(「バカモノが!」と殴られそうだな)

山崎和佳奈

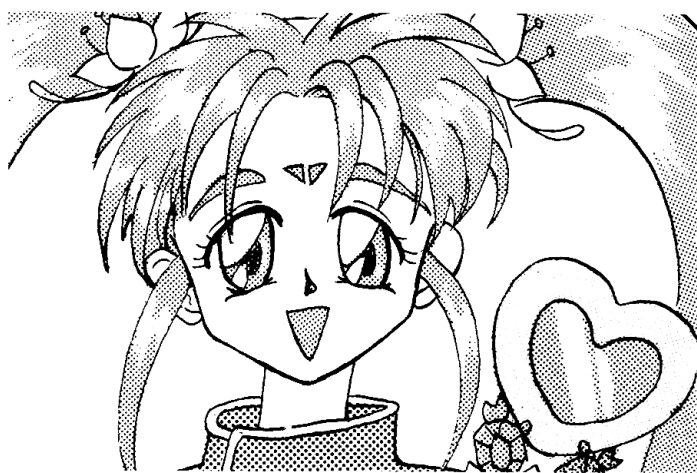
*日曜朝の同じワクで頑張ってきたのが報われつつあるようなので、某女子高校生トリオの二番目の子で変に人気が出ちゃったら、ちょっと複雑だな。(ところで、私はあくまで声優チェックのために麻雀ゲームをやっているのですよ…)

弥生みつき

*馬から落馬の様な名前だなあ、と思っていたら全くのハズレではないらしい。(ところでこの方も同僚と御結婚を?いや、なんか、青年座系の女性ってそういう傾向があるみたいだから…)

結城比呂

*アデューがアデューしてしまうと、この方ともアデューになってしまう私。(ごめんなさい)

横山智佐

*プリティサミーと役小明の区別がつかない人は、キックの一発もお見舞いされてしまうのだろうか?(♪僕は泣いちっち〜、横山無いチッチ〜、てJBSへの没ネタだが、同罪程度で済むだろうか?)

吉田古奈美

*ゲームやゲーム系アニメにもはや欠かせない存在(?)だが、その名に反して「ときめきメモリアル」等にはなぜか縁がない。(最近はゲームをする、いやゲーム雑誌を読んでるだけで結構知ったかぶりができる。これも今回の声優ブームの特徴の一つといえるかも)

渡辺久美子

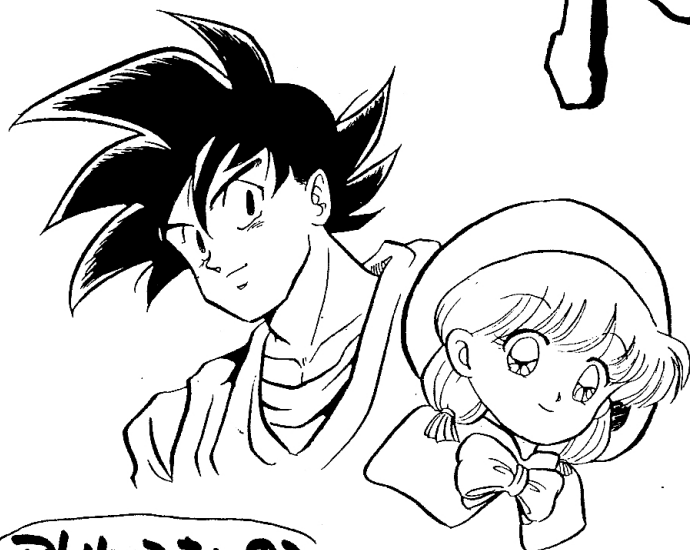
*ここ5、6年の『ドラえもん』の出演声優リストを作ってみると、この方の「スーパーシリーズレギュラー」さがよくわかると思う。

ギャグ版

声優小事典

知ったかぶり野郎・編

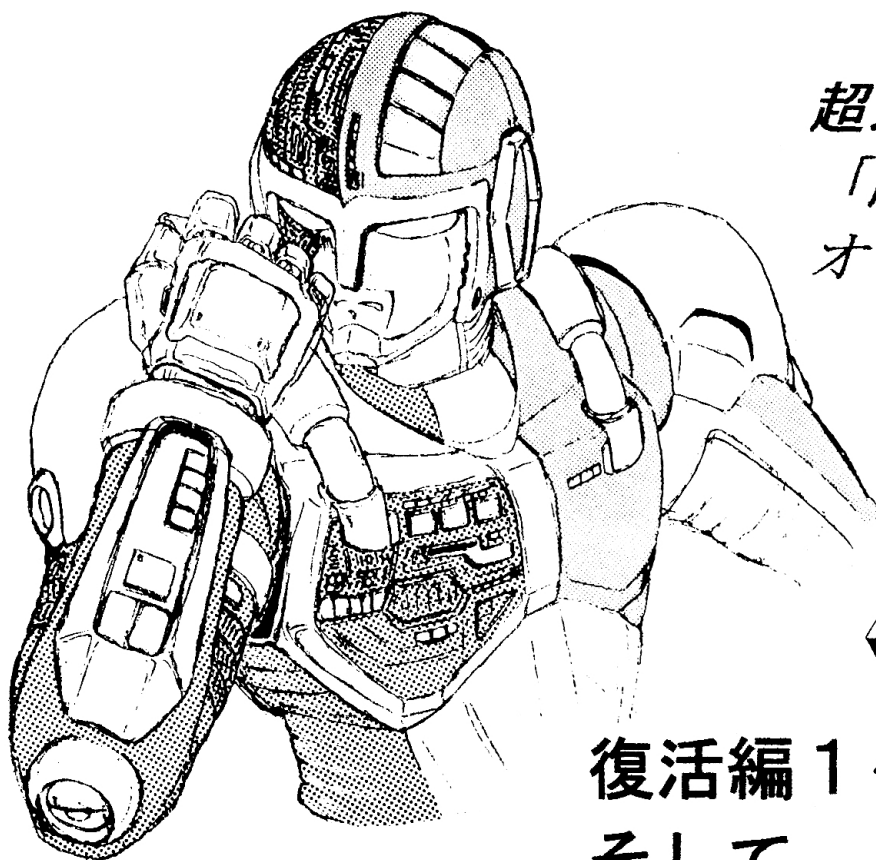
by寺田 欣司

関連書籍告知のページ

昨日も
今日も
明日も
アニメを愛する全ての人へ
アニコムKを
お届けします!

いまのところ
1冊
200えん

・年2回・夏冬発刊
Vol.3は'95冬コミ刊!!

・Vol.1（1994冬）
追悼特集・幽遊白書
Vol.2（1995夏）
さよなら悟空&チャチャ

連載・緒方恵美さんの部屋・アニメ文化評論
M&S対談などなどアニメ魂満載だ!

新生編1――1995年冬　刊行予定

編集後記

◎声優本2の編集とカット書きで夏休みが終わってしまいました。鳴々・特許の〆切りがあ〜〜〜えぇ〜!何という事だぁ!!(東方不敗は王者の風よ!!ー以下略)またいつの日か『オヤジ声優大事典』でお会いしましょう。(寺田)

✖私の表の顔は、某メーカーの営業マンにして、草ラグビーのFW。平日は、残業時間に上司の眼を盗んで会社の端末でワープロ打ち。土曜は午前中炎天下でタックル練習した後、午後は編集作業(半徹夜)。そんな私も28。ウルウル…(岡村)

◆今回は編集の効率化を図るべくパソコンを導入したのですが、ワープロソフトがヘソを曲げてしまい結局いつもの通りの手作業修羅場が、許せんマイクロソフト!(電脳同人野郎)

東京に戻ったとたんにいろいろな企画が突然動きだしてて(この本もその1つ)、うれしいやらしんどいやらですが、絵がでてうれしいです。ということでマスターグレードガンダムよろしく♡ね、六連銭さん。(柳本直樹)

▼先日お亡くなりになった、山田康雄さんと富内幸平さんの御冥福を心よりお祈りいたします。(ノ/ろ)

目編集長、これでやっと当日謝まらなくても済むんですね?! たった1日しかない夏休みを、コミケにかける人間としては、本くらい出してくれなくちゃ、ハハハ。(八十島)

⊗わたくしという現象は仮定された有機交流電燈のひとつの青い照明です と、いうわけで、最電脳に金をかけている。今回の編集作業場所大山スタジオの家主です。パソコンみたく、才能も有機脳もアップグレードしたい今日この頃です…。(山中)

⑳前の本出た時は車はコロナだった。それがカムリ↓68年式カルマン・ギア↓69年式カルマン・ギアと3回も変わっている…。トホホホ……年をとるわけだわな(六)

◎ども、陰の編集長(木)です。いやぁ、川魚食いたいっすね。鯉のあらい、どじょうの柳川、うな丼、うな重、うな茶、うな雑炊にうなぎ浦焼っ!! 焼鮎もいいけど置鮎は喰いたくない。(やとわれ編集人)

✖今回の表紙はな、なーんと、最近売れ急上昇中の漫画家、みずも倶楽部の水城たくや画伯が描いて下さいました。で、画伯のコメント。「し、締切りが……」いやホント申し訳なかったっす。また酒のみましょう。(銀鉄)

誰もが驚いている通り、この本のvol.1が出てからvol.2の本誌が刊行されるまでの間、声優をとりまく状況は奇跡の如く激変した。そのよしあしは世間の人々に論じさせておいてぼくらは「よし」になるべく最大限の努力をしよう。それはぼくらの義務だ。そしてその権利もあるぞ。(小西進&真弓)

★実際にインタビューをしてから、本になるまでずいぶん長い時間が経ってしまいました。御協力をいただいた声優諸氏には大変申し訳なく思っています。そして、この本の製作に協力いただいた方々に、心の底からお礼を申し上げます。(阿佐美)

STAFF LIST

スタッフ

役職	氏名
編　集　長	阿佐美達也
編　集　副　長	木村光伸
編集協力&カット&パソコン&東方不敗	田嶋尚之
編集協力&カット&天下一の電脳ガンダム野郎	柳本直樹
万能ドローイングマシーンリターンズ	八十島聖子
万能ドローイングマシーンフォーエバー	小川浩伸
編集&執筆&ラガーマン	岡村邦孝
インタビュアー&ワープロ	浅井俊隆
	田部伸一
インタビュアー	小川敏明
インタビュアー&編集	福永寛
インタビュアー&カメラマン	竹内克行
ワープロ	安藤浩司
執筆&編集&ピーターパン	寺田欣司
執筆&鎮西康元	岩尾元
執筆	菅原章吾
	石川雄一
	遊佐任
	山本剛史
	平島達治
	松平康二
プリンティングアドバイザー&おもろい夫婦	小西進・真弓
アトリエ提供&復活万能ドローイングマシーン	山中清和
資料提供	あっぷるはうす
公用車	ジュピター号（VWカルマンギア)&インテグラ
演奏	大谷幸・菅野よう子

（表紙・水城たくや　裏表紙・八十島聖子）

おくづけ

Character Voice vol.2

平成7年8月18日　初版発行

編集・発行　　声優倶楽部
印刷・製本　　（株）栄光印刷

この本に関する連絡先
〒154　東京都世田谷区太子堂2-4-4
阿佐美　達也

Character Voice

声優倶楽部